

福岡市埋蔵文化財年報 VOL.23

— 平成20(2008)年度版 —



2010

福岡市教育委員会



序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

本書は、平成20年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する事前審査及び緊急調査件数は、平成12年度をピークに以後減少しましたが、平成15年度から一転して増加に転じ、平成18年以降微増・微減を繰り返す傾向にあります。平成20年度の事前審査件数は平成19年度に比べ、公共事業は増加、民間事業は若干の減少がありました。また、窓口照会はやや減少し、FAXなどの照会も若干ですが減少となりました。これは下半期に世界中を巻き込んだ景気の急激な落ち込みによるものと考えられます。今後とも埋蔵文化財保護業務について適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財第12課、文化財整備課が平成20年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある報告のうち、調査番号0809、0834、0835、0846、0850、0852、0859調査は、この年報をもって本報告とする。その他については別途、本報告書が刊行される予定、または既刊であり、刊行年度については各概要の文末に記載している。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VIについては文化財整備課が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は宮井善朗が担当した。

表紙写真：浜の町貝塚遠景と発掘風景

目 次

I	平成20年度文化財部の組織と分掌事務	2
II	開発事前審査	3
III	発掘調査	8
IV	公開活動	12
V	平成20年度発掘調査概要および報告	14
VI	平成20年度新指定文化財	102
報告書抄録		105

I 平成20年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部の組織と分掌事務

文化財部	54
文化財管理課	9
管理係（事6・文1）	文化財指定、史跡の保存・管理
主査（文1）	文化財資料室開設準備
文化財整備課	8
整備第1係（文2事1）	文化財指定、史跡の指定・保存・整備
整備第2係（文2事1）	福岡城及び鴻臚館跡の調査・整備
課長（学1）	文化財調査等
埋蔵文化財第1課	15
事前審査係（文4）	公共及び民間開発事業に係る事前審査
主任文化財主事（文1）	課の庶務・第1・2課の予算・決算・東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
調査係（文6）	主任文化財主事（文3）
埋蔵文化財第2課	13
調査第1係（文4）	国庫補助事業総括・課の庶務・西部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
主任文化財主事（文2）	
調査第2係（文4）	九大移転地及び周辺地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
主任文化財主事（文1）	
主査（文1）	今宿古墳群保存担当
埋蔵文化財センター	7
運営係（文3事2）	施設の管理運営、考古学的資料の収集・保存・展示
主任文化財主事（文1）	

埋蔵文化財第1、2課の職員構成（職員はすべて文化財専門職）

△埋蔵文化財第1課長	山口治治	◇埋蔵文化財第2課長	田中壽夫
調査係長	米倉秀紀	調査第1係長	杉山富雄
係員（文化財主事）	加藤良彦 櫻木義嗣 久住猛雄	係員（文化財主事）	加藤隆也 今井隆博 板倉有大
主任文化財主事	星屋 洋 本田浩二郎	主任文化財主事	松村道博 山崎龍雄 長家 伸
事前審査係長	吉留秀敏	調査第2係長	常松幹雄
係員（文化財主事）	星野惠美 藏富士寛 阿部泰之	係員（文化財主事）	池田祐司 木下博文 森本幹彦
主任文化財主事	宮井善朗	主査（今宿古墳群担当）	菅波正人

II 開発事前審査

1. 概 要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。

2. 平成20年度の事前審査

平成20年度の開発事業等に伴う事前審査件数は、表1のとおりである。年度後半期の景気の急激な落ち込みにより、民間事業はやや減少した。

申請内容

公共事業に伴う依頼202件の内訳は表3のとおりである。これを事業者別に見ると国機関19件（9%）、うち国土交通省14件、7%、福岡県4件（2%）、福岡市177件（88%）、その他2件（1%）であり、福岡市各部局事業が大半を占める。事業別に見ると道路63（31%）、水道など66（33%）、公園15（7%）、空港関係12（6%）、学校関係10（5%）、その他建物13（6%）、そのほかの開発が13件（6%）である。このほかに公有財産の売却にかかる事前審査依頼が13件（6%）があるのが特徴である。また空港関係が昨年に続き一定の割合を占めており、今後増加するものと考えられる。なお事業照会の事業別内訳は上下水道409件（47.4%）、道路204件（23.7%）、学校87件（10.1%）の上位3事業は昨年と変わらないが、これについて公有財産の処分が41件（4.8%）と増加を見せており、以下公園39件（4.5%）、建物30件（3.5%）と続き、昨年から増加の傾向を見せており、河川と同じく10件（1.2%）を占めた。これ以外の事業は1%以下である。

民間事業1,000件の届出内容は、届出者別に見ると個人424件（42.4%）、一般企業382件（38.2%）、個人事業者157件（15.7%）、法人等の民間事業者35件（3.5%）となっている。全体の6割近くを個人および個人事業者が占めている。事業別では個人住宅411件（41.1%）、共同住宅155件（15.5%）、これに戸建分譲住宅などその他の住宅をあわせると全体の71.7%を住宅が占め、事業者別とあわせてみると、個人住宅をはじめとした小規模住宅の比率が高い。これに次ぐのはその他の構築物（広告看板、バス停など）で、136件（13.6%）を占める。周辺化が進み、小規模事業についても届出が激減なく提出されていることが窺われる。住宅以外の建物としては店舗56件（5.6%）、事務所、社屋等28件（2.8%）となっている。なお、土地取引に伴う審査依頼は62件（6.2%）であった。

届出地を区別に見ると早良区252件（25.2%）が最も多い。これに次いで博多区196件（19.6%）、西区195件（19.5%）が同規模で並ぶ。以下南区137件（13.7%）、城南区102件（10.2%）、東区91件（9.1%）、中央区25件（2.5%）となっている。景気動向を反映して、都心部から周辺部に開発が移りつつあることが窺われる。

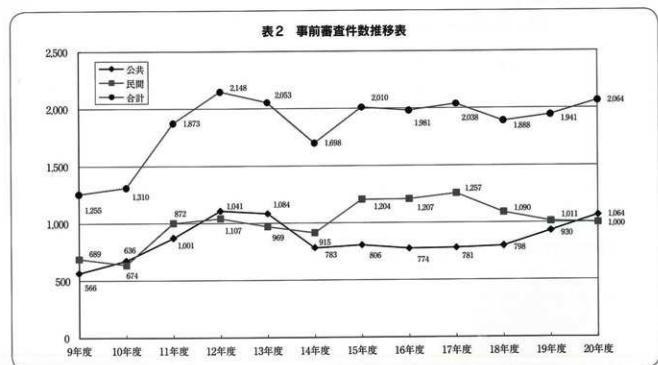
指導内容

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,184件である。総括的に見ると書類審査での回答821件（69.3%）、以下踏査28件（2.4%）、試掘335件（28.3%）で、審査結果は開発同意90件（7.6%）、慎重工事955件（80.7%）、工事立会87件（7.3%）、発掘調査54件（4.6%）、要協議（設計未定、売却予定で遺跡ありなど）10件（0.8%）である。昨年に比べて発掘調査の率が微減した分、他の比率が微増している。

表1 平成9～20年度事前審査件数推移

事業	内訳	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	
		事業照会審査件数	566	674	872	1,107	1,084	783	671	662	668	665	769	862
公共	申請件数	566	674	872	1,107	1,084	783	806	774	781	798	930	1,064	
	審査件数計	566	674	872	1,107	1,084	783	806	774	781	798	930	1,064	
民間	窓口照会件数				2,832	3,597	4,540	4,662	4,292	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144
	FAX照会件数							524	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	
	照会件数計				2,832	3,597	4,540	4,662	4,816	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681
	申請（審査）件数	689	636	1,001	1,041	969	915	1,204	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	
公・民審査件数計	1,255	1,310	1,873	2,148	2,053	1,698	2,010	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064		

表2 事前審査件数推移表



試掘調査・確認調査

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査（以下試掘調査と総称する）は総計364件である。昨年に比べて微減であるが、21年度まで見通すとはば横這いと考えてよい。すなわち届出件数の減少の割には試掘は減っていないということである。これは福岡西方面地震以後、木造2階建て程度の専用住宅でも杭打ちや表層、柱状改良が行われる例が一般化し、試掘をする案件が増加しつつあることを物語っている。

各区分、事業別の中内訳は表4のとおりである。10ヶ所以上試掘した遺跡としては有田遺跡群（19ヶ所）、那珂遺跡群（11ヶ所）、比恵遺跡群（10ヶ所）があげられる。特徴的なのは博多遺跡群での試掘が8件と昨年（22件）から半減以下に落ち込んでいることである。不況により都心部の開発が停滞していることがここでも窺われる。

今年度特筆すべき試掘に、福岡空港内の総合的な試掘調査があげられる。滑走路の耐震化工事の通知を請けて、国土交通省九州地方整備局博多港湾・空港整備事務所と協議の上、事務所が行う土層性状調査に立ち会う形で試掘を行った。試掘は8月25日から10月22日までの約2ヶ月間、航空機発着が終了した午後11時ころから行った。試掘には1課調査係、2課の職員の応援を得た。試掘の結果、福岡空港内には弥生時代、古代～中世の水田を主とした遺構が、良好に依存していることが明らかとなった。これは当該事業はもとより、福岡空港の今後の再整備の際の重要な資料となった。

表3 平成20年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別（審査未了・現地踏査・試掘調査）でみた判断指示の結果										区分別件数	照会件数（%）
		開発同意	借地工事	工事立会	発掘調査	協議	審査	取り下げ	公別件数	市区			
東	公共	1	5	3	2			1		2	1	15	160
	民間	17	1	2	44	8	3	1	2	3	1	90	1,444
博多	公共	5		43	5	6	2	4			65	263	186
	民間	3		85	4	54	15	8	21	6	1	198	1,684
中央	公共		2	2		1					5	30	105
	民間	2		13	4	5	1				25	30	1,648
南	公共	3		10		2	1		1		17	110	
	民間	2	78	1	36	13		1	3		1	137	1,539
城南	公共		12		1				1	2	17	76	
	民間	4	1	49	5	35	5	1		2	102	119	898
早良	公共	5	1	11	3				4		24	83	
	民間	13		142	4	65	10	3	9	1	1	253	1,387
西	公共	8		43	6	1					58	142	
	民間	18		128	2	36	3	1	1		3	3	195
小計	公共	21	0	4	126	0	18	13	1	2	0	10	1
	民間	59	1	5	539	24	238	54	2	12	7	0	37
道路下水道局（**）					10		3						合計
公共汚水井（市内全域1件）													80
合計		80	1	9	675	24	256	70	3	14	7	0	47
合計													9,681
総計													

(*) 民間の公共は事業照会件数。民間は窓口およびFAX照会の合計、小計には不明23件を含む。

(**) 道路下水道局の公共汚水井は複数案件が一括提出され、21年度以降件数が大きく増加しているため、今年度より件数と、審査結果の内訳のみを示す。

窓口等照会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は6,144件、ファックスでの照会は3,537件、民間照会あわせて10,543件である。景気の低迷を反映してか昨年よりやや減少している。区分別の内訳は表3のとおりで、城南区、西区が若干少ないが、他はほとんど同規模の照会が見られた。またファックス照会では、包蔵地外が2,511件（71%）、包蔵地内が763件（21.6%）、隣接地が263件（7.4%）であった。

埋蔵文化財包蔵地の改訂

試掘調査や踏査、また発掘調査などの結果に基づき、25遺跡（重複有り）で埋蔵文化財包蔵地の改訂を行った。平成20年度に新たに発見、登録されたのは6遺跡である。これには、福岡空港滑走路内での試掘で発見された下月隈D遺跡、警固断層調査時に海拔-5mで発見された浜の町貝塚などを含む。遺跡の範囲拡大は11件、縮小は3件であり、5件で隣接地の解除を行った。このほか從来混在していた「遺跡」「遺跡群」の名称を整理し、遺跡群は博多、比恵、那珂、有田、吉武、元岡、桑原、三宅、コノリの8遺跡群に限り、他は遺跡とするとした。これは遺跡名として定着しているもの（博多～吉武、大規模開発に伴って便宜上大括りしており、将来変更になる可能性があるもの（元岡・桑原）、複数の遺跡をまとめたもので、将来的には群を除くのが望ましいもの（三宅、コノリ）に限って遺跡群の名称を残したものである。

表4 試掘調査件数集計

東区	33 件	試掘結果と指示事項										試掘結果と指示事項												
		指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						
		小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意		小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意				
道構あり	13					13				0					0									
道構なし	20					20				0					24			11		10		1		
内・外小計	33									0					24			11						
合計	33														35									
公・民・事業別		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他							道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他	
公共事業	道構あり	6				2			1						0									
	道構なし	14				1			2						24			1		1				
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅 店舗 その他建物 造成など 売買 その他																							
民間事業	道構あり	7				1			1						33			8		1		3	6	
	道構なし	6				2			2						33			14						
博多区	112 件																							
試掘結果と指示事項		指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						
		小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意			小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意			
道構あり	30		2	2	26		26			26				18	4	2	12	0						
道構なし	42		40	2		14		14	14					61	61			6		6				
内・外小計	72									40				79				6						
合計	112													85										
公・民・事業別		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他							道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他	
公共事業	道構あり	31				25		2	1					2		1		1						
	道構なし	12		1	6				1					3		1								
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅 店舗 その他建物 造成など 売買 その他													16	7	3	2	1	1	2				
民間事業	道構あり	25		2	13			2	3					69	道構なし	44	15	9	3	8	5	9		
	道構なし	44		15	9			3	8					64	23	17	5	6	3	9	1			
中央区	4 件																							
試掘結果と指示事項		指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						
		小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意			小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意			
道構あり	0					0								12	3	9	0							
道構なし	3		3			1		1						35	35		8		8					
内・外小計	3					1								47				8						
合計	4													55										
公・民・事業別		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他							道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	売買	その他	
公共事業	道構あり	0												3							1		2	
	道構なし	1												6		1					3		2	
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅 店舗 その他建物 造成など 売買 その他													9		3								
民間事業	道構あり	0												46	道構なし	37	13	7	6	4	2	1	4	
	道構なし	3		1		2								37			13	7	6	4	2	1		
南区	40 件																							
試掘結果と指示事項		指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						指示事項(包蔵地内)					指示事項(包蔵地外・隣接)						
		小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意			小計	借重工事	工事立会	発掘調査	小計	借重工事	工事立会	発掘調査	開発同意 <th></th>			
道構あり	4		1		3		0							77	10	4	63	26	0	0	0	26	0	
道構なし	26			26			10		8					211	208	2	0	50	47	0	0	0	3	
内・外小計	30													288										
合計	40													364										
公・民・事業別		道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	補繕整備	公園整理	売買	その他					道路	空港	住宅	公園	水道、電気等	農業関連	補繕整備	公園整理	
公共事業	道構あり	0												42	4	25	0	5	0	1	2	5		
	道構なし	2												82	道構なし	40	7	6	2	4	1	3	6	11
	個人住宅 共同住宅 戸建住宅 店舗 その他建物 造成など 売買 その他													151	15	21	1	4	5	1	8	6		
民間事業	道構あり	4		3		2		1	3	1	1			282	道構なし	221	84	46	2	16	24	9	35	5
	道構なし	34		16	3	2		1	3	1	8			364										

III 発掘調査

1. 平成20年度の発掘調査

市域内に実施された本年度の登録発掘調査件数は、表9に示したように16～19年度からの継続事業が4件、20年度新規事業が63件である。このうち6件が平成21年度に継続した。この発掘件数には本発掘調査63件のほか、確認調査1件（0856）、記録作製を行った試掘調査1件（0809）、不時発見による調査（0852）、および史跡整備工事に伴う調査1件（0821）のあわせて4件も含んでいる。

67件の発掘調査面積は44,289m²で、前年度に比べ約22,091m²減少した（表6・表7右）。公民別では公共事業が33,099m²、民間事業が約11,190m²であり、公共が75%を占める。民間事業総面積は前年比37%減少し、公共事業は32%の減少となった。個々の発掘調査の面積は、100m²以下が14件、101～300m²が23件、301～500m²が10件、501～1,000m²が9件、1,001m²以上が11件、10,000m²以上の調査は今年度は行われていない。1,000m²以下の調査面積が主体となっており、300m²以下の小規模調査は37件（55.2%）で、昨年の35件（45.5%）より増加している。試掘調査（0809、24.3m²）を除く本調査で、調査面積が最も大きいのは有田遺跡群第229次（0816）で、個人住宅建築に伴う26m²の調査であった。最も広いのは香椎A遺跡第4次（0737）の4,539m²である。今年度から年度を越える調査は各年の調査面積を調査期間比（20年度調査期間／全調査（予定）期間）に応じて算出していることもあり、平均は661m²（19年度862m²）で昨年より減少している。公民別では民間294.5m²、公共1141.3m²であり差が大きい。また博多遺跡群、箱崎遺跡などでは遺構面が複数あり、これを面ごとに調査しているため、実際の発掘面積は増加する。

調査地区を区別に見ると（表7中）、博多区が最も多く23件（19年度31件）、西区17件（同17件）、早良区10件（同10件）、東区9件（同11件）、南区5件（同7件）、中央区2件（同1件）、城南区1件（同0件）と続く。昨年と比べると博多区以外はほぼ横ばいで、総件数の減少分は博多区の減少に起因していることがわかる。福岡市の場合、都心といえるのは博多区、中央区であるが、中央区には比較的の周知の埋蔵文化財が少ないため、都心の開発の動向は、文化財から見れば博多区に反映されるといえよう。この点事前審査の動向とともに、不況の影響が如実に見て取れる。たゞし博多区の件数が一番多く、西区がそれに次ぐ傾向は変わらない。博多区では博多遺跡群が7件で昨年の12件から減少し、かつ最大調査面積が243m²（182次）と小規模化している。早良区では10件のうち半数の5件を有田遺跡群が占めている。東区では市域東端部の蒲田地区での調査が目立つ年となった。いずれの調査でも多量の遺構、遺物が出土しており、注目される。またこの地域では倉庫など大規模開発が多く、事前審査としても注意すべき地域である。西区では九州大学移転用地の調査が終盤となり、元岡・桑原遺跡群（4件）の発掘調査が行われている。また関連する交通路や周辺整備に関わる区画整理などで大坂遺跡（2件）、谷遺跡（1件）などの調査が行われた。

予算別（表8）では、国庫補助を受けた事業が22件（国補18件（試掘含む）、国補+民間受託4件）、公共受託事業が6件、民間受託事業が20件。令達事業が18件である。国庫補助事業以外は昨年とほぼ同数であるが、国庫補助事業は昨年から約3割減少している。小規模開発にまで不況の影響が及んでいる。

以上のように20年度は19年度より発掘調査件数や面積はやや減少している。しかし、小規模調査の比率が大きくなっていることは、調査の方法、着手時期の設定、現場間の頻繁な移動、調査期間等に細心の留意が必要になる案件が増加しているということでもあり、必ずしも事前審査、本調査それぞれの担当職員の負担が、数字に表れる事業量の減少ほどには軽減されていないという側面を持っている。20年度の調査一覧は前年度からの継続分も含め表9に示した。

表5 発掘調査件数の推移 ()前年度からの継続件数

事業	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
民 間	43(0)	47(0)	67(1)	52(3)	52(3)	44(4)	38(0)
圃場整備	(1) 3(0)	(2) 0(0)	4(0)	4(2)	1(1)	0(0)	0(0)
公 共	18(1)	27(4)	28(5)	27(6)	27(6)	33(4)	29(4)
合 計	62(4)	76(4)	99(6)	83(11)	80(11)	77(8)	67(8)

表6 発掘調査面積の推移 (nf)

事業	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
民 間	12,421	13,281	24,556	12,265	15,184	17,651	11,190
圃場整備	39,799	23,937	42,152	56,000	21,000	0	0
公 共	36,914	37,919	43,568	22,708	56,530	48,729	33,099
合 計	89,134	75,137	110,276	90,973	92,714	66,380	44,289

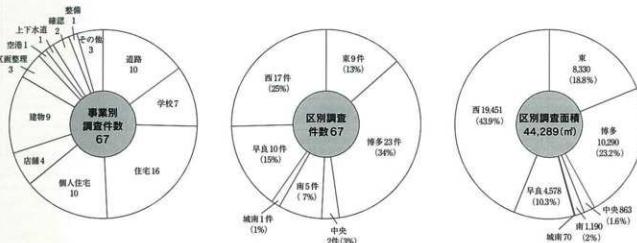


表7 発掘調査内訳

表8 平成20年度発掘調査総括表

区名	事業別	調査費用						県教委 民 間	総 計		
		令達	受託	補助事業		補助 + 民受	市単費				
				補助	補助 + 民受						
東	公共	3	1	1	0	0	0	5	0		
	民間	3	0	0	1	0	0	4	0		
博多	公共	0	2	0	0	0	0	2	0		
	民間	14	5	2	0	0	0	21	0		
中央	公共	0	0	1	0	0	1	2	0		
	民間	0	0	0	0	0	0	0	0		
南	公共	1	0	1	0	0	0	2	0		
	民間	0	3	0	0	0	0	3	0		
城南	公共	0	0	0	0	0	0	0	0		
	民間	0	1	0	0	0	0	1	0		
早良	公共	3	0	0	0	0	0	3	0		
	民間	2	4	1	0	0	0	7	0		
西	公共	11	3	1	0	0	0	15	0		
	民間	1	1	0	0	0	0	2	0		
小計	公共	18	6	4	0	0	1	29	0		
	民間	20	14	4	0	0	0	38	0		
合 計		18	26	18	4	0	1	67	0		

*補助事業には試掘1件を含む（南区1件）

表9 平成20年度調査一覧（前年度からの継続含む）

調査番号	道路名	次数	地点	区	所在地	調査原因事業者	予算種別	申請面積(m ²)	調査面積(m ²)	古	調査開始終了	担当者番号	道筋略号
0451	元岡・桑原 道筋跡	42	西	大字元岡	大字移転地造成 国立大学法人	公受	27500.000	1684 (8000)	2004/10/1 2009/6/30	常松	14-1-18	MOT	
0737	香椎A道跡	4	東	香椎2丁目	道路建設 九州都市整備局	公受	10000	4539 (6808)	2007/10/1 2009/3/31	濱石	19-1-1	KSA	
0741	元岡・桑原 道筋群	51	西	大字桑原字金屋	学校建設 国立大学法人	公受	4000.0	4813.9 (6881.4)	2007/8/29 2008/10/3	池田	16-1-109	MOT	
0763	元岡・桑原 道筋跡	52	西	大字元岡	学校建設 国立大学法人	公受	3000.0	1753 (3800)	2008/1/21 2008/6/20	常松	14-1-18	MOT	
0801	比恵道跡群	114	博多	博多駅南3丁目 59番	共同住宅 個人	民受	4634	3766	2008/4/7 2008/6/27	加藤良彦	19-2-527	HIE	
0802	名子道跡	4	東	名子1丁目内地	道路建設 福岡市教委	令達	1600	1200	2008/4/7 2008/4/21	今井	19-1-47	NAO	
0803	笠抜道跡	3	南	横手町	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	760.0	5040	2008/4/10 2008/9/9	星川	15-1-29	KSN	
0804	野芥大戻道跡	2	早良	賀茂4丁目100-1 市営沿岸施設	市営沿岸施設 福岡市都市基盤局	令達	500.0	5464	2008/4/10 2008/6/6	山崎	19-1-133	HKZ	
0805	麦野C道跡	13	博多	麦野6丁目11番2	店舗建設 JA	民受	270.0	3180	2008/4/14 2008/6/14	小林	19-2-805	MGC	
0806	大塚道跡	16	西	今宿字大塚	伊都地区整理 福岡市住み七部市局	令達	2000.0	2095.0	2008/4/1 2008/5/18	菅波	13-1-233	OTS	
0807	那珂道跡群	121	博多	竹下5丁目9179- 5179-1	個人住宅 個人	国補	171.0	131.0	2008/4/23 2008/5/20	木下	19-2-960	NAK	
0808	名島城跡	6	東	大字1丁目2410-1 外	確認調査 福岡市教委	国補(重確)	500.0	250.0	2008/4/21 2008/11/29	樋木		NZE	
0809	上佐道跡	1	南	臼田4丁目35	下水道 福岡市道路下水道局	国補(試掘)		243	2008/4/21	星野、 宮井	19-1-153	KOS	
0810	羽根戸原B道跡	3	西	野方3丁目212213- 1218-16372	宅地造成 一般企業	民受	1200.0	1402.0	2008/4/24 2008/7/4	加藤 隆也	19-2-626	HNB	
0811	箱崎道跡	61	東	箱崎4丁目3371- 13373等3-各一部	共同住宅 個人	民受	252.0	190.0	2008/5/12 2008/6/27	今井	19-2-899	HKZ	
0812	博多道跡群	182	博多	祇園町548外	商業建設 飲食業	民受	815.0	2430	2008/5/12 2008/5/31	長家、 板倉	19-2-38	HKT	
0813	那珂道跡群	122	西	祇園2丁目 347-348-349-350- 351-352	共同住宅 飲食業	民受	728.7	995.1	2008/6/12 2008/8/8	本田	19-2-778	NAK	
0814	有田道跡群	228	早良	大字1丁目11番9	個人住宅 個人	国補	159.1	71.0	2008/6/2 2008/6/11	森本	20-2-98	ART	
0815	博多道跡群	183	博多	御所町2-4	寺院建設 宗教法人	民受	168.0	1534	2008/6/9 2008/6/23	池田、 木下	19-2-776	HKT	
0816	有田道跡群	229	早良	小山田1丁目 177番4	個人住宅 個人	国補	34.3	26.0	2008/6/16 2008/6/20	森本	20-2-115	ART	
0817	蒲生水ヶ元道跡	2	東	黒崎3丁目191-1 番	事務所兼倉庫 一般企業	民受	308.3	420.0	2008/6/24 2008/8/9	小林	19-2-374	KMT	
0818	比恵道跡群	115	博多	博多駅南3丁目60 番外10番	共同住宅 一般企業	民受	900.0	755.0	2008/7/1 2008/10/2	長家、 板倉	20-2-40	HIE	
0819	コノリ道跡群	6	コノリ C道跡	西 拾六町3丁目21-1	学校建設 福岡市教委	令達	126.0	275.0	2008/7/1 2008/7/20	森本	19-1-81	KNR	
0820	博多道跡群	184	博多	冷泉172-2, 173-174	共同住宅 個人事業	民受	163.0	131.8	2008/7/2 2008/8/7	木下	20-2-16	HKT	
0821	福岡城跡	60	灘離館 26次	中央 城内	史跡整備 福岡市教委	国補(史跡)	860.5	2008/7/1 2009/3/31	吉武	FUE			
0822	比恵道跡群	116	博多	博多駅南4丁目 189番4	事務所建設 飲食業	民受	336.0	326.7	2008/7/7 2008/7/31	山崎	20-2-162	HIE	
0823	王山道跡	5	博多	山王2丁目25-9	共同住宅 一般企業	民受	167.7	162.3	2008/7/9 2008/8/5	加藤 良彦	20-2-200	SNN	
0824	都地道跡	8	西	大字金武2038番地 の1	校舎建設 福岡市教委	令達	210.0	300.0	2008/7/14 2008/8/6	今井	19-1-80	TZI	

調査番号	道路名	次数	地点	区	所在地	調査原因事業者	予算種別	申請面積(m ²)	調査面積(m ²)	古	調査開始終了	担当者番号	審査番号	道筋略号
0825	緑崎道跡	62	東	馬出5丁目	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	920.0	693.2	2008/7/16 2008/10/15	久住	10-1-20	HKZ		
0826	緑崎道跡	63	東	箱崎1丁目27-37	公共施設 福岡市道路下水道局	令達	600.0	506.0	2008/7/17 2008/10/15	榎本	19-1-65	HKZ		
0827	久保田道跡	4	博多	福岡空港内	空港整備 九州地方整備局	公受	7,100.0	2,000 (6000)	2008/7/18 解説中	池崎	19-1-161	KBZ		
0828	吳原道跡	2	西	戸切2丁目地内	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	460.0	370.0	2008/8/1 2008/9/23	加藤 隆也	18-1-119	HYG		
0829	戸切道跡	4	西	戸切2丁目1324番1 の一部	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	70.0	70.0	2008/8/4 2008/9/14	森本	18-1-119	TGR		
0830	猪六町2イジ 道跡	3	西	上山門1丁目27番1	体育改良 福岡市教委	令達	158.0	247.5	2008/8/4 2008/8/25	山崎	19-1-79	JRT		
0831	博多道跡群	185	博多	糸田町415-1415- 213-3-14-2	ホテル建設 一般企業	民受	250	1137.1	2008/8/11 2008/9/22	加藤 良彦	19-2-524	HKT		
0832	戸切道跡	5	西	戸切2丁目1324番1 の一部	個人住宅 個人	国補	125.5	180.0	2008/8/11 2008/9/9	森本	20-2-142	TGR		
0833	高畠道跡	20	博多	飯伏1丁目1-1	警察学校建設 九州地方整備局	公受	3,715.0	2,223 (5067)	2008/8/18 2008/9/2	小林	19-1-93	TKB		
0834	有田道跡群	230	早良	舟町2丁目20-120- 13	共同住宅 個人事業	民受	295.6	300.0	2008/8/18 2008/10/7	菅波	20-2-227	ART		
0835	麦野C道跡	14	博多	東雲町4丁目17- 21,18,19	共同住宅 個人事業	国補	166.8	191.4	2008/8/20 2008/9/3	木下	20-2-82	MGC		
0836	原八幡道跡	24	早良	原6丁目13-41	奈良会堂 宗教法人	民受	72.0	420	2008/8/23 2008/9/3	今井	20-2-52	HAA		
0837	南八幡道跡	16	博多	相生町2丁目30	ビル建設 一般企業	国補	123.0	51.6	2008/9/1 2008/9/8	木下	20-2-33	MHM		
0838	田村道跡	23	早良	田村4丁目内地	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	1,400.0	780.5	2008/9/1 2008/11/21	山崎	18-1-35	TMR		
0839	戸切道跡	3	西	戸切2丁目内地	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	150.0	105.0	2008/9/1 2008/9/12	加藤 隆也	18-1-119	TGR		
0840	博多道跡群	186	博多	冷泉町400- 240-402-403-404- 408-409	共同住宅 一般企業	民受	426.7	120.1	2008/9/18 2008/12/18	本田	20-2-146	HKT		
0841	ヒワシ道跡	1	早良	大原2丁目1773- 4番4	戸建住宅 一般企業	民受	292.0	329.5	2008/9/22 2008/10/15	木下	20-2-149	HWT		
0842	博多道跡群	187	博多	余良原町100番、 101番	共同住宅 個人事業	民受	1,733	143.0	2008/10/1 2008/11/7	星屋	19-2-509	KHT		
0843	四箇古川道跡	4	早良	西園4.5丁目	道路 福岡市道路下水道局	令達	1,100.0	2,200.0	2008/10/1 2008/11/9	今井	19-1-105	SHK		
0844	元岡・桑原 道跡群	54	西	大字桑原字金屋	学校建設 福岡市都市基盤公社	令達	1,872.0	2,009/1/9	2008/10/6 2009/1/9	池田		MOT		
0845	黒田原土原道跡	12	東	黒田3丁目751-2	育苗セッタ・通造 福岡市東部農場	民受	378.0	375.0	2008/10/28 2008/12/5	長家	19-2-862	KHH		
0846	五十川12丁目308- 11	17	南	五十川12丁目308- 11	個人住宅 個人	国補	45.5	43.0	2008/10/21 2008/12/31	加藤 良彦	20-2-402	GJK		
0847	戸切延川道跡	2	西	戸切2丁目内地	道路建設 福岡市道路下水道局	令達	110.0	121.0	2008/10/16 2008/10/23	加藤 隆也	18-1-119	TRM		
0848	有田道跡群	231	早良	小田部1丁目216-1	個人住宅 個人	国補	80.6	80.6	2008/11/29 2008/12/10	木下	20-2-536	ART		
0849	井尻12道跡	32	南	井尻1丁目712番7	個人住宅 個人	国補	98.8	98.2	2008/11/10 2008/12/8	久住	20-2-370	IGB		
0850	西ノ堤道跡	1	城南	片江5丁目1431-225	個人住宅 個人	国補	83.6	69.9	2008/11/26 2008/12/9	森本	20-2-627	NTI		
0851	蒲田水ヶ元道跡	3	東	蒲田三丁目203番1	事務所甜茶倉庫 一般企業	民受	1,400.0	1,236.7 (150)	2008/12/15 2009/4/30	加藤 良彦	20-2-530	KMT		
0852	浜の町貝塚	1	中央	浜の町貝塚公園内	不動産見附 福岡市市民局	不動 発見	28.0	30	2008/12/9	吉留 ・星野		HMS		

番号	遺跡名	次数	地点	区	所在地	調査対象事業者	予算面積 (㎡)	申請面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	古墳	調査開始日	担当者	参考番号	遺跡番号
0853	比恵道跡群	117	博多	博多駅南3丁目34	共同住宅 一般企業	民受	4240	3866	2009/1/13 2009/3/11	榎本	20-2539	HIE		
0854	那珂道跡群	123	博多	東光寺1丁目 131,132,133,134,135	店舗 一般企業	民受	5500	6520	2009/1/16 2009/3/10	本田	20-2256	NAK		
0855	大塚遺跡	17	西	今宿大塚	伊都区衛生整理 福岡市住宅都市局	令達	5200.0	3900 (5200)	2009/2/9 2009/8/19	森本		OTS		
0856	瓶氏古墳群B群	3	12,13 号墳	西 大字瓶氏字正寺 13,字御ヶ瀬223	確認認定委 福岡市教育委員会	国補(重複)	5,255.0	30.0	2009/1/29 2009/3/18	菅波		IHK-B		
0857	山王道跡	6	博多	山王1丁目56,57,60- 261	共同住宅 一般企業	民受	5772	435 (580)	2009/2/16 2009/4/23	木下	20-2538	SNN		
0858	有田遺跡群	232	早良	小田部3丁目247番	個人住宅 個人事業	国補	187.0	202.0	2009/2/17 2009/3/6	加藤 隆也	20-2789	ART		
0859	井尻B道跡	33	南	井尻1丁目305番16	個人住宅 個人事業	国補	348	37.0	2009/2/24 2009/3/6	山崎	20-2719	IGB		
0860	博多遺跡群	188	博多	冷泉町86,87,88-2	共同住宅 一般企業	民受	1480	747 (112)	2009/2/24 2009/4/12	屋山	20-2580	HKT		
0861	比恵道跡群	118	博多	博多駅南6丁目6-2	店舗 個人事業	国補	170.0	192.0	2009/2/25 2009/3/12	長家	20-2747	HIE		
0862	谷道跡	3	西	今宿谷地内	伊都区衛生整理 福岡市住宅都市局	令達	250.0	218 (227)	2009/2/2 2009/4/9	森本		TAN		
0863	麦野A道跡	21	博多	麦野5丁目3-3041	共同住宅 個人事業	国補	1342	1342	2009/3/10 2009/3/26	久住	20-2864	MGA		

*継続事業については平成20年度分の面積で、() 内が調査終(予定)面積である。

IV 公開活動

市民への公開を目的とした事業として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等があげられる。平成20年度は3ヶ所の調査に対し計4回の記者発表を行い、うち2回の現地説明会を実施した。

また市内中小学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成20年度は大塚遺跡、箱崎遺跡に2校(延べ7名)、室見整理室での整理作業に1校(3名)、また元岡桑原遺跡では高校1校(15名)の体験学習を受け入れた。

発掘成果を資料化し、公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表11のとおり計45冊が刊行された。

表10 平成20年度福岡市現地説明会・報道発表一覧

番号	調査番号	遺跡名	次	住所	現場担当者	記者発表 現地説明会	見学者(人)	備考
1	0451	元岡桑原遺跡群	42	西区大字元岡	常松	2008/4/24	-	青銅鏡類金具の出土
2	0452	元岡桑原遺跡群	42	西区大字元岡	常松	2008/10/30	-	鹿、太陽、建物、鳥を描く彌生時代の琴出土
3	0806	大塚遺跡	16	西区今宿地内	菅波・森本	2008/6/11 2008/6/14	100	伊都郡の有力聚落
4	0821	福岡城跡 (鴻臚館跡)	60 (26)	中央区域内	吉武	2008/11/21 2008/11/22	232	海鷗崖面の特定

表11 平成20年度刊行報告書一覧

集	書名	副書名	収録調査番号	編著者
1022	史跡鴻臚館 鴻臚館跡 18	谷(櫛)部分の調査	99100080109.0218, 0309.0415.0502	大庭 康時
1023	荒平古墳群 1	E群 2号墳・3号墳調査の報告	0722	加藤 隆也
1024	有田・小田部 46	第22次調査報告	0735	今井 隆博
1025	大塚遺跡 3	第8次・10次・12次・13次調査の報告	0528.0659.0702.0715	森本 幹彦
1026	瓶氏遺跡 5	第12次調査報告	0723	今井 隆也
1027	井相田C 7	井相田C遺跡第8次調査報告	0703	久住 勝雄
1028	板付 9	板付遺跡 第71回調査の報告	0707	加藤 隆也
1029	五十川遺跡 6	市道御井所と尻線建設に伴う 発掘調査報告書VI	0444.0481	吉武 学
1030	坂堤遺跡	一般国道3号博多バスターミナル建設に伴う 発掘調査 I	0725	濱石 智也
1031	田村 15	田村遺跡第21次調査報告	0652	加藤 良彦
1032	市道戸町親水工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書1	上龍遺跡 第1次調査・尸戸川通り町遺跡 第1次調査・兵庫町遺跡第1次調査	0738.0739.0740	加藤 隆也
1033	那珂 52	那珂80・83・84・98・ 110・118次調査報告	01220146.0217.0421, 0500.0719	吉武 学
1034	那珂 53	那珂遺跡群第117次調査報告	0717	久住 勝雄
1035	那珂 54	那珂遺跡群第119次調査報告	0721	屋山 洋
1036	那珂 55	那珂遺跡群第120次調査報告	0729	小林 義彦
1037	仲島遺跡 1	第2次調査報告	8332	横山 邦雄
1038	博多 126	博多遺跡群第161次調査報告	0572	小林 義彦
1039	博多 127	博多遺跡群第166次調査報告	0646	久住 勝雄
1040	博多 128	博多遺跡群第170次調査報告	0669	小林 義彦
1041	博多 129	博多遺跡群第171次調査報告	0670	屋山 洋
1042	博多 130	博多遺跡群第173次調査報告	0708	山崎 龍雄
1043	博多 131	博多遺跡群第176次調査報告	0728	屋山 洋
1044	博多 132	博多遺跡群第178次調査報告	0748	山崎 龍雄
1045	博多 133	博多遺跡群第180次調査報告	0754	加藤 良彦
1046	箱崎 36	箱崎遺跡第47次・第55次調査報告	0437.0664	中村 啓太郎
1047	箱崎 37	箱崎遺跡第56次調査報告	0665	赤坂 亨
1048	箱崎 38	箱崎遺跡第59次調査報告	0749	山崎 龍雄
1049	比恵 55	比恵遺跡第112次調査報告	0745	加藤 良彦
1050	比恵 56	比恵遺跡第113次調査報告	0761	屋山 洋
1051	東比恵三丁目遺跡 2	東比恵三丁目遺跡第2次調査報告	0713	加藤 良彦
1052	鹿嶋遺跡 18	鹿嶋遺跡第36次調査報告	0743	阿部 泰之
1053	女原遺跡 4	第1次調査報告	8517	横山 邦雄
1054	麦野 A 遺跡 5	麦野 A 遺跡第15次調査報告	0704	阿部 泰之
1055	麦野 A 遺跡 6	麦野 A 遺跡第15次調査報告	0724	小林 義彦
1056	麦野 A 遺跡 7	第20次調査報告	0755	榎本 義嗣
1057	麦野 C 遺跡 6	麦野 C 遺跡第13次調査報告	0731	小林 義彦
1058	姪浜 3	第4次調査の報告	9844	米倉 秀紀
1059	免遺跡 2	第3次調査報告	0712	今井 隆博
1060	諸岡 B 遺跡 3	諸岡 B 遺跡第23次調査報告	0744	小林 義彦
1061	吉武遺跡群 2	史跡整備に伴う第17・18・19次調査報告	0363.0483.0534	長冢 伸
1062	老司瓦窯 1	第1・2・3次調査報告	0654.0653.0701	榎本 義嗣
1063	元岡桑原 14	第12次・18次・20次調査の報告(下)	9902.9946.0001	菅原 正人
1064	元岡桑原 15	第33・40・41・44・47・47次調査の報告	0303.0410.0523.0562	米倉 秀紀
-	福岡市埋蔵文化財年報Vol.22	2007年度版	0711.0716.0720, 0730.0733.0736, 0753.0756.0760	吉留 秀敏
-	元岡・桑原遺跡群 発掘調査パンフレット			常松 鈴雄

V 平成 20 年度発掘調査概要および報告

調査概要及び報告は表9の調査番号順に掲載している。また下に五十音順の索引をついた。位置番号は右頁の地図に一致する。各概要・報告中の図「1. 調査地点の位置」の（ ）内は、左から福岡市都市計画地図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・地図の縮尺である。

発掘調査索引

遺跡名	次数	調査番号	位置番号	遺跡名	次数	調査番号	位置番号
あ 有田遺跡群	228	0814	1	な 名子遺跡	4	0802	23
有田遺跡群	229	0816	1	名島城跡	6	0808	24
有田遺跡群	230	0834	1	に 西ノ堀池遺跡	1	0850	25
有田遺跡群	231	0848	1	の 野芥大塚遺跡	2	0804	26
有田遺跡群	232	0858	1	は 博多遺跡群	182	0812	27
い 飯氏古墳群B群	3	0856	2	博多遺跡群	183	0815	27
井尻B遺跡	32	0849	3	博多遺跡群	184	0820	27
井尻B遺跡	33	0859	3	博多遺跡群	185	0831	27
お 大塚遺跡	16	0806	4	博多遺跡群	186	0840	27
大塚遺跡	17	0855	4	博多遺跡群	187	0842	27
か 笠塚遺跡	3	0803	5	博多遺跡群	188	0860	27
香椎A遺跡	4	0737	6	箱崎遺跡	61	0811	28
蒲田郡木原遺跡	12	0845	7	箱崎遺跡	62	0825	28
蒲田水元遺跡	2	0817	8	箱崎遺跡	63	0826	28
蒲田水ヶ元遺跡	3	0851	8	羽根戸原B遺跡	3	0810	29
上臼佐遺跡	1	0809	9	浜の町貝塚	1	0852	30
く 久保園遺跡	4	0827	10	原遺跡	24	0836	31
こ 五十川遺跡	17	0846	11	ひ 比恵遺跡群	114	0801	32
コノリ遺跡群	6	0819	12	比恵遺跡群	115	0818	32
さ 山王遺跡	5	0823	13	比恵遺跡群	116	0822	32
山王遺跡	6	0857	13	比恵遺跡群	117	0853	32
し 四膳古川遺跡	4	0843	14	比恵遺跡群	118	0861	32
格六町西イジ遺跡	3	0830	15	兵庫遺跡	2	0828	33
た 高畠遺跡	20	0833	16	ヒワタシ遺跡	1	0841	34
谷遺跡	3	0862	17	ふ 福岡城跡	60	0821	35
田村遺跡	23	0838	18	み 南八幡遺跡	16	0837	36
と 戸切遺跡	4	0829	19	む 白野A遺跡	21	0863	37
戸切遺跡	5	0832	19	麦野C遺跡	13	0805	38
戸切遺跡	3	0839	19	麦野C遺跡	14	0835	38
戸切通り町遺跡	2	0847	20	も 元岡・桑原遺跡群	42	0451	39
都原遺跡	8	0824	21	元岡・桑原遺跡群	51	0741	39
な 那珂遺跡群	121	0807	22	元岡・桑原遺跡群	52	0763	39
那珂遺跡群	122	0813	22	元岡・桑原遺跡群	54	0844	39
那珂遺跡群	123	0854	22				



0451 元岡・桑原遺跡群第42次調査 (MOT-42)

所在地 福岡市西区元岡字二叉

調査原因 大学移転用地造成

調査期間 2004.10.1～2009.6.30

調査面積 1,684m² (総面積8,000m²)

担当者 常松 幹雄

処置 記録保存

位置と環境 42次調査区は、元岡・桑原遺跡群の南西端にある。南は今津湾の入海の奥部を臨み、北の丘陵部に杜をいたぐる標高8～10mの南斜面に立地している。西接する前原市側の台地部は治跡群とよばれている。52次調査区は、42次調査区の北側にあたり、一連の調査区である。

検出遺構 これまで検出された遺構は、調査区の東西の谷筋を流れる幅20～30mの2条の自然流路 (SD-01・02) と、二者にはさまれた中州部分に分布する掘立柱建物および堅穴住居跡である。

南北80mにわたって蛇行して流れる自然流路 SD-02には、弥生中期後葉から後期にかけての多量の土器が流れ込んでおり、その量はコンテナ8,000箱近くにのぼる。

20年度は、調査区の西側を流れるSD-02で検出された土器・木器の実測・取り上げと併行して撮影をすすめた。

自然流路下層の粘土質土では、木製品の遺存状況が良好で、弥生中期後半の埋土から鉗・鉢・エブリなどの農具、杓子・匙などの掬い具、火鑓臼・鉄柄斧などが出土した。

出土遺物 注目される資料として署と推定される有文木製品、立体的なトリ形木製品、人面を表現した木製品、男性シンボル形木製品、剣形木製品、剃りもの箱などがある。これらの木製品はすべて弥生中期後葉の土器を伴っており、北部九州において稀少な資料が主体を占めている。

まとめ 木製祭祀具以外では、刀子の鞘尻金具、古代中国の貨幣である五銖銭1枚と貨銭8枚が出土している。原の辻遺跡で出土した総数にせまる数であり、分布密度の高さが伺える。楽浪系の土器や無文土器、出雲や中国地方など各地域の土器も出土しており、紀元前後から3世紀あまりの間、交易の拠点として機能していたことをうかがわせる。



1. 土器群 106 有文木製品や鞘尻金具はこの土器群で出土した。



2. 有文木製品 復元図



3. 鳥形木製品

0737 香椎A遺跡第4次調査 (KAS-4)

所在地 東区香椎2丁目地内

調査原因 道路建設

調査期間 2007.10.1～2009.3.31

調査面積 4,000m² (総面積6,808m²)

担当者 滝石 哲也

処置 記録保存

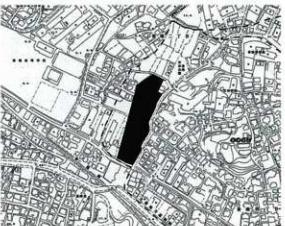
位置と環境 香椎A遺跡は香椎2～3丁目を中心広がり、東の老山から西の博多湾に向う丘陵上に立地する。第4次調査地は遺跡の西端近くに位置し、南の香椎川から北に約200m、幅約45～55mの道路計画用地が対象地である。南側からI～IV区に分けて調査を行った。現在の標高はI区で4m前後、IV区で7m前後をはかる。

検出遺構 I区では中世の屋敷地を検出した。全体で1町四方とみられる敷地に、今回の調査では、溝や柵に区画された50棟以上の掘立柱建物、5基の井戸、10基以上の墓、多数の土坑、3基の鐵冶遺構などを検出した。この屋敷地は13世紀の敷地造成以後、16世紀まで建築替えを繰り返しながら屋敷が営まれたと考えられる。造成前の山面には弥生～古墳時代の粘土探査坑がみられた。II～IV区は大半が丘陵端部にあたり、開田時の削平が進んでいたが、古墳時代の堅穴住居跡の外、中世の掘立柱建物、多数の土坑などを検出した。IV区北側では西に開く浅い谷を確認し、その谷頭で弥生時代のドングリ貯蔵穴を、また谷が埋没した古墳時代には壺・高杯などを多量に廃棄した祭祀の跡を検出した。

出土遺物 弥生前・中期土器、古墳時代土器・須恵器、中世土器(杯皿が多い)・須恵器・輸入陶磁器(白磁・龍泉青磁・同安青磁・明染付・朝鮮陶器など)・銅鏡・銅鏡・硯・ガラス玉など木製品約150点、310箱と曲物、井戸枠材など木製品約150点。

まとめ 今回の調査は、香椎宮を中心としたこの地区的中世集落解明に重要な資料を提出したのみならず、これまでほとんど知られていなかった弥生・古墳時代の営みの一端もうかがわせるに至った。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (17浜男 69 1:8000)



2. I区全貌 (上空から)



3. IV区北側全貌 (東から)

0741 元岡・桑原遺跡第51次調査 (MOT-51)

所在地 西区大字桑原字金糞

調査原因 大学造成

調査期間 2007.8.29～2008.10.3

調査面積 4919.3m² (総面積6887.4m²)

担当者 池田祐司

処置 記録保存

位置と環境 水崎山から派生する丘陵が北西に開く谷部に位置する。造構面は標高4.5mから9.5mを測る。造成前は金糞池と水田および造成地である。工事調整池の造成により大きく削平を受けていた。調査区南側に接する緩傾斜地は49次調査区で、主に6世紀から8世紀の住居、建物を検出している。上流の24次調査では古代の製鉄炉を検出している。昨年度からの継続調査。

検出遺構 調査区中央を幅5mから8mの蛇行する河川が流れる。最下層は弥生時代中、後期に砂礫・粘質土が堆積し、古代末にはぼば埋まる。この河川の両岸に6世紀後半から7世紀代の堅穴式住居7軒、主に7世紀と考えられる掘立柱建物28棟が広がる。掘立柱建物は2間×2間の縦柱建物、2間×3間、1間×2間と、壁立建物とされているもの等がある。柱穴には柱材が残るものがあった。他に古代の鍛冶炉、溝を確認している。

出土遺物 弥生時代の明確な遺構の検出はない。突帯文土器が焼土面を作りうらはみから出土している。

遺物の大多数が河川周辺の土器である。弥生土器、土師器、須恵器を主体とし、越州窯系青磁、綠釉陶器、白磁、布目瓦、石鍋等が出土した。また下層からは6世紀後半の柱、ねずみ返し等の建築材、農具等の木製品が出土している。遺構からの遺物はピット主体であるため少ない。古代以降の包含層、遺構からは鉄滓も出土している。このほかに、押型文土器、刻目突帯文土器、石鎚、石斧等の绳文時代の遺物が少量出土した。

まとめ 49次調査とあわせると、河川の両岸に6世紀後半から7世紀を主体とする堅穴式住居と掘立柱建物が広がる。遺物は河川を中心に古代末までの遺物を確認した。掘立柱建物は大型のものもあり、官能的な性格が考えられる。24次調査の製鉄炉との関連も考えられる。



1. 調査地点の位置 (129桑原 2782 1:8000)



2. 建物群 (南東から)



3. 木造出土状況 (北から)

0763 元岡・桑原遺跡群第52次調査 (MOT-52)

所在地 福岡市西区元岡字二叉

調査原因 大学移転用地造成

調査期間 2008.1.21～継続中

調査面積 1,753m² (総面積3,800m²)

担当者 常松幹雄

処置 記録保存

位置と環境 52次調査区は、元岡・桑原遺跡群の南西端にある。42次調査区の北側にあたり、両者は一連の調査区である。南は今津湾の入海の奥部を臨み、北の丘陵部に社をいくだく標高10mの南斜面に立地している。西接する前原市側の台地部は泊遺跡群とよばれている。ここでは、20年度に出土した資料のなかから祭祀に関連する木製品について紹介する。

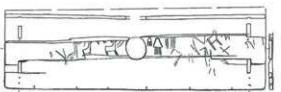
検出遺構 南北80mにわたって蛇行して流れる自然流路SD-02には、弥生中期後葉から後期にかけての多量の土器や木器が流れ込んでいる。20年度は、調査区の西側を流れるSD-02で検出された土器・木器の実測・取り上げと併行して掘削をすめた。

出土遺物 注目される資料として原始絵画を刻んだ琴の部材、人面を表現した木製品・男性シンボル形木製品、剣形木製品、刺りもの箋などがある。これらの木製品はすべて弥生中期後葉の土器を伴っている。琴の部材には、中央の円形の透かし孔をはさんで左手に疾走する狼のシカ、右手に大小2棟の建物、すこし間をおいてトリの胸から脚とみられる描写がある。剣形木製品は、硬質の木を加工した木製品で、刃部の両端は鋸歯状に刻みが入れられている。刃部中央とその両側に箋が通る精緻なつくりである。現在長60cm、柄は20.3cmで、本来は1m近い長剣であったと推定される。

まとめ ここにあげた木製品は約50mという限られた範囲で出土したこととは、遺跡の特殊性を示している。琴に描かれたシカ・トリに象徴される農耕祭祀と木偶や男性シンボル形木製品に託された粗魯信仰や自然崇拜的な要素。これらを共存とみるか、拮抗とみるかについては、さらに論を尽くさねばならないが、木製祭祀具が弥生時代の祭祀構造の解明に重要な局面を担っていることを示している。



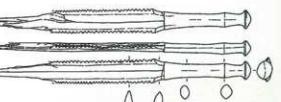
1. 琴の部材の出土状況



2. 琴の実測図



3. 剣形木製品



4. 剑形木製品実測図

0801 比恵遺跡群第114次調査 (HIE-114)

所在地 博多区博多駅南3丁目59

調査面積 376.6m²

調査原因 共同住宅建設

担当者 加藤 良彦

調査期間 2008.4.7~6.20

処置 記録保存

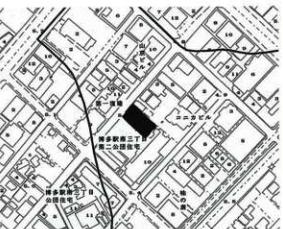
位置と環境 調査区は比恵遺跡群の最北端に近い位置である。

検出遺構 弥生時代前期堅穴住居11基、溝4条、貯蔵穴8基、土坑13基。中期溝1条、古墳時代前期溝7条、土坑1基、たみ池状遺構1基、平安時代後期溝1条ほか柱穴多数を検出した。古墳時代前期の6号溝からは径50cmほどの針葉樹を半裁した木樋が延長7mにわたって検出された。

出土遺物 弥生土器、土師器、木器など約20箱が出土した。

まとめ 調査区周辺は弥生時代前期に集落の中心的位置を占め、中期後半以降は集落の中心から外れ、耕作地に改変された可能性が高い。古墳時代の溝はこれに伴う灌漑用と考えられる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区西半部全景 (南東から)



3. 木樋出土状況 (南西から)

0802 名子遺跡第4次調査 (NAO-4)

所在地 東区名子1丁目地内

調査面積 120m²

調査原因 道路改良工事

担当者 今井 隆博

調査期間 2008.4.7~2008.4.21

処置 記録保存

位置と環境 名子遺跡は多々良川・須恵川・宇美川などの沖積作用により形成された船屋平野に位置し、城ノ越山の麓、丘陵に挟まれた猪野川による狭い沖積地に立地する。周辺には江辻遺跡、菅原田木原遺跡、三角縁神獣鏡が出土した天神森古墳がある。本調査地は前年度に実施した名子遺跡第3次調査の隣接地で、縄文時代の包含層と遺構を検出した調査区に挙まる。幅3m、長さ40mの狹長な調査区である。

検出遺構 水田耕作土・床土を除去して、GL-50~-70cmの黄褐色粘質土を検出面とした。検出面の標高は東端で12.5m、西端で12.3mで東から西に緩やかに傾斜する。検出した遺構は土坑1基(SK01)とビットである。SK01は長さ16m、幅0.9mの長楕円形で、深さは約50cmの遺存である。覆土は灰褐色土。検出面付近では少量の土器片が見られたが、下層からは遺物の出土はなかった。

出土遺物 全体的に出土遺物は僅少で、土器小片が4袋ほど出土したのみである。胎土から縄文土器と思われる。隣接する第3次調査1区・2区と同じく縄文時代後期に属するものであろうか。

まとめ 本調査地点は削平が著しく、東側に隣接する第3次調査2区で検出された縄文土器包含層は全く見られなかった。密度は非常に薄いものの遺構はわずかに遺存しており、第3次調査2区を中心として西側の県道猪野土井線の手前付近まで遺構の分布が広がるようである。第3次・第4次調査は対象地が道路拡幅部分のためトレンチ状の調査となったが、今後の周辺調査で縄文時代集落の範囲を確認する必要がある。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (8 土井 2829 1:8000)



2. 調査区全景 (東から)



3. SK01 完掘状況 (南から)

0803 笠抜遺跡第3次調査 (KSN-3)

所在地 福岡市南区横手南18
調査原因 市道の新設
調査期間 2008.4.10~9.9

調査面積 504m²
担当者 屋山 洋
処置 記録保存

位置と環境 笠抜遺跡は那珂川右岸に沿う台地が谷により細かく分断された狭い台地上に位置し、東側には奴国を中心とした集落である御陵遺跡や須須遺跡群が分布する。本調査区南側の1次調査では台東側を分断する河川内で弥生時代中期後半の井堰が出土し、また台地上では突帝文期の溝や弥生時代から古代の溝が数条出土した。

検出遺構 台地上で弥生時代から中世の溝数条と柱穴群を検出した。溝は1次調査C区のSD10（突帝文期）とSD02の続きである。柱穴状遺構は台地上全体に分布するが、掘り込みは浅く遺物の出土量は少ない。時期は弥生時代中期頃から中世までで、断続的に集落が営まれていたと考えられる。調査区東側を流れる河川からは1次調査で弥生時代中期後半の杭排列が4列出土したが、本調査区では8~10世紀の杭列が数条出土した。

木杭は後流の流れに削られるなどして遺存状態は悪い。遺物は最下層で8世紀頃の瓦や須恵器が多く出土した他、中層から12世紀前後の青磁碗、白磁碗や多くの弥生土器が出土した。

まとめ 1次調査で出土した弥生時代中期後半の井堰の続きが出土すると予想されたが、実際には底面で古代の杭列、河川埋没途中で中世と考えられる杭列を確認した。これは笠抜遺跡の台地と東側台地は約40m程離れているが、河川はその中を時代ごとに流れる場所を変えながら蛇行しており、1次調査地点では岸から離れていた古代の河道が3次調査では岸寄りに流れを変えたため弥生時代の井堰を押し流してしまったものと思われる。その後12世紀中頃には3次調査地点は粗砂で埋没したが、もし弥生時代の井堰が谷部全体に広がっていたとしたら現河道の東側に残っている可能性も考えられる。

調査報告書は平成21年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (25井戻 2811 1:8000)



2. II区井堰出土状況 (西から)



3. III区全景 (北から)

0804 野芥大藪遺跡第2次調査 (NK0-2)

所在地 福岡市早良区賀茂2丁目1001外
調査原因 市営住宅にて替え
調査期間 2008.4.10~6.6

調査面積 547m²
担当者 山崎 龍雄
処置 記録保存

位置と環境 調査地は早良平野の内陸、室見川の支流金屑川によって形成された扇状地上に立地する。標高は現地表面で約14.2~14.5mを測る。周辺の遺跡としては、西北側に免造跡、南東側に野芥遺跡などがあり、調査で縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出されている。調査区の南に隣接する第1次調査区では、縄文時代の川跡や、古墳時代前期の集落、古代の溝、江戸時代の屋敷跡跡を検出している。

検出遺構 調査は建物予定範囲について行った。遺構面は黒褐色砂質土又は黑色粘土で、地表下1.3~1.5mの深さで検出した。遺構面までの堆積土は真砂土の客土と水田耕作土である。検出遺構は縄文時代晚期頃と思われる川跡2条、古代と思われる溝1条とビット群などである。検出した遺構面が基盤の灰黄色シルト粘土の上であったため、更に0.2~0.3m程の基盤面まで掘り下げ遺構の確認を行い、更に溝1条を検出した。

出土遺物 遺物は縄文時代川跡や古代の溝から出土したが、パンコンテナ2箱と総量はそれほど多くない。遺物の時期としては縄文時代から古代にかけての土器・石器などがある。

まとめ 古代の溝は第1次調査区から直線的に延びる溝で、幅は約4mを測る。主軸方位が古代早良郡の条里基準に合うものであり、早良郡の条里地割りの一部を確認出来た。また下部基盤面で検出した溝からはアカホヤ火山灰を検出した。

報告書は2009年度刊行の予定である。



1. 調査地点の位置 (83野芥 2448 1:8000)



2. 調査区全景 (真上から)



3. 古代早良郡の条里方向の溝 (南から)

0805 麦野C遺跡第13次調査 (MGC-13)

所在地 博多区麦野6丁目11番2
調査原因 社屋建設
調査期間 2008.4.14～6.14

調査面積 318m²
担当者 小林義彦
処置 記録保存

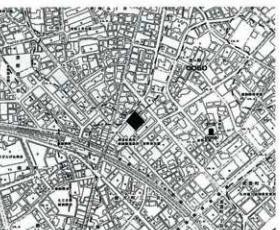
位置と環境 麦野C遺跡は、福岡平野東南部の御笠川と諸岡川に挟まれた麦野台地上に位置している。この南北にのびる麦野台地には幾筋もの開析谷が嵌入して八つ手状をなし、嵌入する谷を境として麦野A・B・C遺跡や南八幡遺跡としている。第13次調査区は、この麦野C遺跡の中央部北縁に位置し、北から嵌入した開析谷が浅く南に済入する台地の縁辺に立地している。南東隣に隣接する第1次調査区では、奈良時代の住居跡が検出されている。

検出遺構 発掘調査では、奈良時代の堅穴住居跡が25棟と土壙6基、溝遺構1条を検出した。堅穴住居跡は、北西部に単基である2棟を除いて5～7棟の堅穴住居跡が重複している。これらの堅穴住居跡は、いずれも竪が敷設されている。竪の設置場所には画一性ではなく、四壁のそれぞれに取付けられているが、傾向的には東西壁が多い。また、壁面に付設した竪の中には直径が10～15cmの煙道を1mほど住居外へ延ばして排煙しているものもある。床面は基盤層の黄褐色ロームで貼床しているが、主柱穴はほとんどの住居跡で確認できなかつた。

出土遺物 坚穴住居跡や土壤から須恵器や土師器の坏や高坏、壺、甕のほかに鉄斧、刀子、鋸鍼車、ガラス玉等がコントナケース21箱分出土した。

まとめ 本調査区で検出した遺構は、奈良時代の堅穴住居跡からなる集落遺構である。南東の第1次調査区でも23棟住居跡が検出されており、わずか1,000mに満たない狭い空間の中で48棟の堅穴住居跡が折重なって密集中しており、数期に亘って建替えが繰り返されたことが窺える。立地的には北西から済入する浅い谷に面した緩斜面上の好環境下にあり、麦野C遺跡の中でも中心的規模をもつたものと考えられる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



3. 4・5号住居跡（西から）

0806 大塚遺跡第16次調査 (OTS-16)

所在地 西区今宿大字大塚
調査原因 土地区画整理
調査期間 2008.4.1～8.18

調査面積 2,095m²
担当者 蒼波正人
処置 記録保存

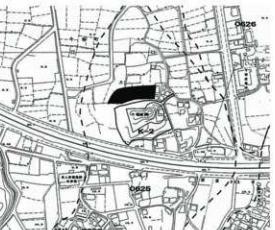
位置と環境 本遺跡は福岡市西部の今宿平野にあり、標高約8.5～9.5mの低丘陵地に立地する。現況は畑地で、南側隣接地には国史跡の今宿大塚古墳がある。遺構は耕作土下約30cmの淡橙色粘質土で検出した。

検出遺構 耕作土の直下が遺構面であるため、遺物包含層はほとんど検出できなかった。遺構は弥生時代後期の周溝状遺構、掘立柱建物、中世の土坑墓、木棺墓、掘立柱建物、溝状遺構などを検出した。弥生時代の周溝状遺構は径10～20mを測り、大塚11次調査、15次調査では掘立柱建物や鍛冶工房の周囲に巡るような状態で検出された。本地点では溝の内側ではそれらの遺構は検出できなかった。掘立柱建物は1×2間の規模で、周溝状遺構とは分布が異なる。中世の掘立柱建物は2×3間の側柱建物で、主軸を東西、南北方に配置される。これらの建物を区画するように調査区北側で東西溝を検出した。

出土遺物 遺物は周溝状遺構から弥生土器、石錘などが出土した。中世の土坑墓、木棺墓からは副葬された龍泉窯系青碗が出土した（コレクション31箱）。

まとめ 今回の調査では弥生時代後期～中世の遺構、遺物を検出した。弥生時代後期の集落遺構は調査区北東側にある環濠集落に重なる時期であり、環濠の外側にも集落が広がることが確認できた。また、遺構の分布から今宿大塚古墳の下にも同様の遺構が予想される。遺跡は古墳時代になると、遺構は見られなくなり、再び遺構が見られるようになるのは鎌倉時代以降である。

調査報告書は23年度に刊行予定である。



2. 調査地点全貌（北から）



3. 周溝遺構出土状況（北から）

0807 那珂遺跡群第121次調査 (NAK-121)

所在地 博多区竹下5丁目91、179-3、179-1

調査面積 131m²

調査原因 専用住宅建設

担当者 木下博文

調査期間 2008.4.23～5.20

処置 記録保存

位置と環境

那珂遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた標高6～10mの低位段丘上に展開する集落遺跡である。今回の調査地点は遺跡の西部に位置し、68次調査の南、114次の北西に隣接する。68次調査では古代の井戸や掘立柱建物跡が検出されており、それらの広がりが予想された。

検出遺構

東西方向に走る飛鳥～奈良時代の溝、同じく中世前半の大溝、ピット群を検出した。

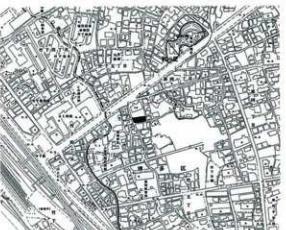
出土遺物

飛鳥～奈良時代の須恵器杯・土師器甕把手・瓦・滑石製子持勾玉、中世の中国製磁器・滑石製石瓢片などコンテナ6箱分が出土している。

まとめ

調査区北壁に沿って検出した飛鳥～奈良期の溝は、周辺地域での調査成果から官衙・寺院などの公的施設の範囲を区画する溝である可能性がある。また調査区南壁に沿って検出した中世前半の大溝は、幅3m・深さ1.7mをはかり、船の壕と言つても良い規模・造りであり、周辺に屋敷地が存在した可能性がある。

調査報告書は2009年度以降に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (36 堀原 0085 1:8000)



2. 調査区東半全景 (西から)



3. SD01 (西から)

0808 名島城跡第6次調査 (NZE-6)

所在地 東区名島1丁目2410-1外

調査面積 249.8m²

調査原因 重要遺跡確認調査

担当者 榎本義嗣

調査期間 2008.4.21～7.30、10.20～11.20

処置 埋め戻し保存

位置と環境

名島城は、豊臣秀吉による九州平定後の天正16(1588)年、小早川隆景が築城した織田城の城郭で、慶長5(1600)年に筑前国に移封された黒田長政が福岡城を築城するまでの10数年間、小早川・黒田両氏の居城となつた。今回の調査対象は、日々良川河口の博多湾に突出した東西方向の丘陵西端に築かれた本丸の南東部で、宅地や畠地の段造成により高低差がある。現地表面の標高は15.4～24.5mを測り、調査地点はA～Dの4区に分かれる。

検出遺構

A区は第5次調査に接する調査区で、赤褐色土整地層上に、延長15m以上の石垣の背面前の切土肩およびその内部に充填された幅約3mの石垣裏込石を確認した。その北側端部では、法面に埋没した石垣築石を検出することができた。B区は上述の石垣面を検出すために設定した調査区で、南北方向に延長する長さ約19mの石垣面および南端部で約75度角の入角をもって東側に折れる長さ7m以上の石垣面を確認できた。石垣は野面積みで、勾配は約70度を測る。また、石垣が築かれた整地面には、石垣に沿って石組側溝が設置されており、本丸から東側に一段下がった曲輪面が存在することが明らかとなった。この曲輪面上の下層には多數の瓦が、その直上には築石を含む多量の裏込石が堆積しており、福岡城への石垣移築もしくは破却等の行為によるものと推測される。C区でも裏込石と考えられる多量の礫群を検出したが、石垣列は未確認に終わった。なお、D区では遺構は認められなかった。

出土遺物

三巴文や菊花文の軒丸瓦や三葉文を中心飾とする軒平瓦、コビキBを主体とする丸瓦・平瓦、棟飾瓦等がコンテナケースにして49箱出土した。

まとめ

B区の石垣は第3次調査G地点石垣と併せ、本丸大手虎口を形成するものと推測される。魔城後、破却等の行為が行われるもの、本丸には予想以上に遺構が遺存されていることが明らかとなつた。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (32 名島 115 1:8000)



2. 調査区全景 (北から)



3. B区石垣検出状況 (北から)

0809 上日佐遺跡第1次調査 (KOS-1)

所 在 地 南区日佐4丁目

調査面積 24.3m²

調査原因 日佐第6雨水幹線築造工事

担当者 宮井 善朗・星野 恵美

調査期間 2008.4.21

処 置 記録保存

1. 調査に至る経緯

下水道局建設部中部建設課より南区日佐4丁目35番における日佐第6雨水幹線築造工事に伴う埋蔵文化財事前審査依頼が提出された。これを受け、埋蔵文化財第1課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である上日佐遺跡と日佐遺跡に隣接することから、2008年3月9日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。両者で協議を行った結果、工事の掘削深度が遺構面に達するところから記録保存のための発掘調査を4月21日に行った。

2. 位置と環境

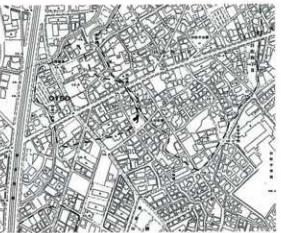
申請地は、標高16.7mを測り、すぐ東側に谷川が流れる。東西方向に設定した試掘トレンチの東側は河川の状況を呈しており、谷川の氾濫原が約15m西側へ広がっていることを確認した。一方、西側では柱穴等を検出し、上日佐遺跡が東側へ拡大し、東側の日佐遺跡とは河川を挟んで対峙していた。上日佐遺跡は、福岡平野を北流する御笠川と那珂川に挟まれた南北方向に長い洪積段丘上に展開する遺跡の一つで、西側に独立した低位段丘上に位置している。

3. 遺構と遺物

調査区の層序は現地表面から20cmまで盛土、40cmまで旧水田面である灰色粘質土、その下に黄褐色粘質土、マンガンを多量に含む茶褐色粘質土である。この茶褐色粘質土にはわずかであるが土師器の小片が含まれていた。この直下が黄灰褐色シルトの遺構面で、標高16.0mを測る。検出した遺構は土坑2基と柱穴である。覆土は茶褐色粘質土が主体をなし、焼土・炭化物を含むものも見られた。出土した遺物は小片ばかりである。

(SK1) 現長2.0mを測る隅丸方形を呈し、南側は調査区外へ延びる。深さは13cmと浅く、底面はやや凸凹を呈する。土師器の小片が2点出する。

(SK2) 直径約1.6mの円形を呈し、北側は調査区外へ延びる。深さは約60cmを測る。覆土には炭化物、焼土を含み、土師器、瓦器、瓦質土器、龍泉窯系青磁、茶葉、滑石片、不明鉄製品が出土する。1は回転糸切り底の土師器の坏である。復元口径13.0cm、器高2.65cmを測り、底部に板状压痕を呈する。胎土



1. 調査地点の位置 (26 上日佐 150 1:8000)



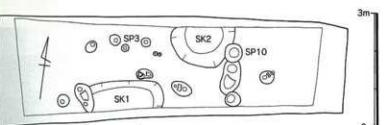
2. 調査地点全景 (東から)

には白色粒、金雲母を含み、白橙色を呈する。2は低い高台をもつ瓦器碗の底部片で、外側は白橙色、内面は黒色を呈する。胎土には白色砂粒を含む。3は龍泉窯系青磁碗 I類の口縁部片である。4は花崗岩製の茶臼の上臼である。復元直径は9.0cm、厚さは7.8~8.8cmを測り、やや傾斜している。よく使用され、擦り減った結果と考えられる。挽手孔に菱形の飾りを削り出している。

(柱穴) 平面形は円形と楕円形のものがあり、深さは最も深いもので50cmを測る。調査区が狭く、全体像は不明である。5はSP3 (直径25cm、深さは20cm) から出土した瓦器碗の口縁部片で、外面上端1cmは黒色、下半は白橙色、内面は黒色を呈する。胎土には細かい白色砂粒を含む。6はSP10 (直径50cm、深さは25cm) から出土した白磁皿IX類の口縁部片で、他に回転糸切り底の土師器の小片が出土する。

4. まとめ

出土した遺物はほぼ12~13世紀の範疇におさまるものであり、この時期の集落が上日佐遺跡で展開していたと考えられる。北側の立会調査でも同時期と考えられる柱穴と遺物が出土している。今回の調査地点は立地から集落の縁辺部に相当するものと推測される。

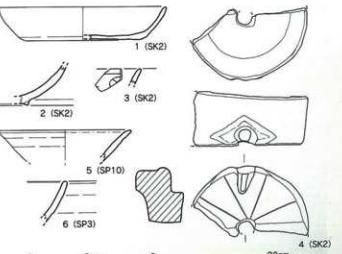
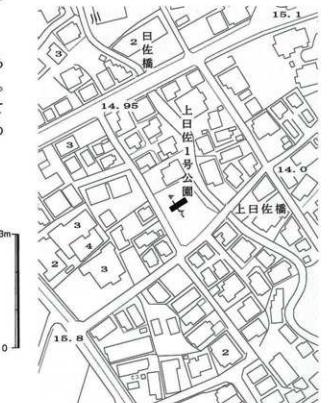


遺構配置図

断面図



3. SK2 (南から)



出土遺物実測図 (1/3・1/6)

0810 羽根戸原B遺跡第3次調査 (HNB-3)

所在地 西区野方3丁目212番他

調査面積 1,402m²

調査原因 宅地造成

担当者 加藤隆也

調査期間 2008.4.25～7.4

処置 記録保存

位置と環境

早良平野の西側を限る山塊のひとつである飯盛山からは、東側に向かって幾つもの丘陵が派生している。その丘陵の先端は小河川によって細かく分断され、羽根戸原B遺跡はその丘陵先端上に位置している。調査区の南側隣接地は、かつて宅地造成時に壟基層がみられたとされている藤ヶ丘団地であり、北側には「戸切池」と呼称される貯水池が位置し、古くから開析谷が存在していたと考えられる。

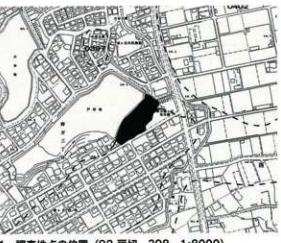
検出遺構

遺構面は、現地表土である腐植土直下の赤褐色裸混り層上面にて検出された。南側斜面では、その上面に灰茶褐色土の遺物包含層が部分的にみられた。出土遺物としては、古くは縄文時代の黒曜石製石器、弥生時代後期半の土器などがみられた。検出遺構には、弥生時代後期半の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壤と、古墳時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡の大きく2時期に分かれる。どちらの時期の遺構もその遺存状況は悪く、特に丘陵頂部では顕著であった。集落の分布範囲は、かつて丘陵全面に広がっていたと思われるが、後世の削平などによりその多くが失われていると考えられる。

まとめ

検出された遺構は、弥生・古墳時代を含め竪穴住居跡9軒。掘立柱建物跡5棟である。弥生時代では、藤ヶ丘団地の造成時にみられた壟基層は広がらず、同時期の遺物が散布することから、集落域として利用されていたと思われる。また、古墳時代後期の住居群には大型竪穴住居のみられ、羽根戸古墳群の形成を含め、集落構造を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (92 戸切) 398 1:8000



2. 丘陵頂部調査区全景 (北東から)



3. 竪穴住居跡検出状況 (南から)

0811 箱崎遺跡第61次調査 (HKZ-61)

所在地 東区箱崎3丁目3371-1他

調査面積 190m²

調査原因 共同住宅建設

担当者 今井 隆博

調査期間 2008.5.12～2008.6.12

処置 記録保存

位置と環境

箱崎遺跡は博多湾岸に広がる箱崎砂層と呼ばれる砂丘にある。箱崎遺跡は古代～中世を中心とする遺跡で、今回の調査区は遺跡の北端に位置する。周辺では10次・31次・34次・35次・36次・59次調査が行われており、12～15世紀を中心とする集落が確認されている。

検出遺構

地表面から60cm付近の褐色砂から遺物は少量含まれていたが、遺構を識別できなかったため地山の黄白色砂を検出面とした。検出面の標高はおよそ2.5mである。検出した遺構は溝、戸井、土坑、ピット、木棺墓である。調査区中央を溝(SD042)が貫き、南東部ではそれと並行して2条の溝(SD005, 006)がある。これらの溝は大学通りと並行しており、現在の町割りに沿っている。土坑からは土師器・陶磁器とともに土鍤、貝、獸骨が出土したものもある。北壁付近では径15mほどの大範囲に貝層と焼土層がみられた。貝も火を受けている。調査区南西隅では木棺墓1基を確認した。完形の白磁碗と土師皿が副葬されていた。棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘が数点出土したことから木棺墓と判断した。

出土遺物

出土遺物は12～13世紀を中心とする土師器、陶磁器、銅鏡、土鍤、鹿角、貝殻などで、コンテナケース30箱分である。木棺墓からは白磁碗1点と土師皿5点が出土した。

まとめ

今回の調査では、周辺の調査と同じく12～13世紀を中心とする集落を確認した。本地点は從来の分布地図では遺跡の北端に当たり、北側に向かって砂丘が落ちていくと予想されていたが、調査の結果、砂丘はさらに北側まで延び、九州大学キャンパス内まで遺跡が広がるものと思われる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎) 2639 1:8000



2. 1区全景 (北から)



3. SK069遺物出土状況 (西南から)

0812 博多遺跡群第182次調査 (HKT-182)

所在地 博多区祇園町9-11

調査原因 商業施設建設

調査期間 2008.5.12～5.30

調査面積 243m²

担当者 長家伸・板倉有大

処置 記録保存

位置と環境

調査地点は、キャナルシティ博多東側の駐車場内に位置し、中世都市博多の南限に開削された「房州堀」の西側推定地に重なる。調査地点の東西隣接地では、1989年に博多遺跡群第57次調査が行われ、房州堀内の水田耕作土、その上層の石垣などが確認されている。また、調査地点の東方約200mの地点（博多警察署）では、1998年に博多遺跡群第112次調査が行われ、房州堀の南側の立ち上がり、堀内の水田耕作土、堀埋没後の石垣などが確認されている。

検出遺構

盛土直下に粘土層が残存しており、房州堀内の水田土壤の可能性が想定された。その他の遺構は、調査区東側で近世以降の井戸1基、土坑1基を確認した。また、調査区北側の旧比恵川堆積層には、人頭大縄の集中箇所があり、その下から人骨（上腕骨骨片）が検出された。

出土遺物

弥生時代前期～中世までの幅広い時期の遺物が出土した。大半が、旧比恵川堆積層中からの出土であり、調査区東側の古砂丘に包蔵されていた遺物が流れ込んだものと考えられる。特記すべき遺物としては、弥生時代終末の外來系土器（山陰系・西部瀬内系など）、古墳時代の円筒埴輪、移動式竈などがある。

まとめ

房州堀の北側立ち上がりは近現代の破壊のため確認できなかったが、堀内埋土の一部を確認することができた。採取した土壤の理化学分析によって、堀の利用状況や周辺環境について復元が可能である。房州堀下層の旧比恵川堆積層中からは、調査区東側の古砂丘に包蔵されていたものと考えられる多様な遺物が出土した。特に円筒埴輪の出土は、東側砂丘上に古墳が存在した可能性を示しております。重要な成果となった。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (49天神 121 1:8000)



2. 調査区北壁土層 (南から)



3. 調査区南側土層 (北から)

0813 那珂遺跡群第122次調査 (NAK-122)

所在地 博多区那珂2丁目347～352

調査原因 共同住宅建設

調査期間 2008.6.2～2008.8.8

調査面積 995.0m²

担当者 本田浩二郎

処置 記録保存

位置と環境

那珂遺跡群第122次調査地点は、那珂遺跡群包括地指定範囲の東端部に位置している。

検出遺構

調査では古墳時代から古代の堅穴住居5棟、古代の掘立柱建物3棟以上、溝状造構、道路状造構などを検出した。道路造構は幅約6m前後、路面には歩行痕跡や構築時の圧痕が波板状に残り、轍も断続的に残る。歩行痕跡は道路東側の幅2m程度の範囲に集中する。道路は概ね南北方向に延伸するが、南側でやや東側に振れる。遺物や遺構の切り合いより八世紀前半代以降の造営であると考えられる。

掘立柱建物は3棟以上を検出した。調査区南側で検出した掘立柱建物は梁間3間×桁間7間以上の大きなもので、出土遺物より七世紀後半代に属するものと考えられる。建物主軸は真北より10°東に振れており、この主軸を採る柱穴列が複数有り本来は建物群を構成していたものと考えられる。建物の規模と柱穴の構造より官衙関連造構群と考えられる。この掘立柱建物には同主軸とする堅穴住居があり、床面上から円面鏡が出土した。住居内のカマドは東側に設置され廃絶時にはほとんどが破壊されるが、小型の壺を逆位に据えて支脚としていた。

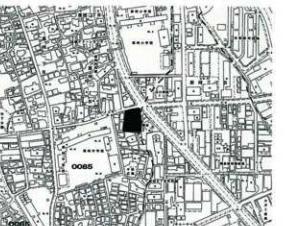
この他には古墳時代後期に属する大型堅穴住居を3棟検出した。一辺が7m程度とやや大型であり主柱穴は四本柱となる。須恵器蓋坏や土師器壺などが出土した。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、貿易陶器、黒曜石剥片等がコンテナケース10箱分出土した。

まとめ

検出した道路は南北方向を強く意識して敷設されており、那珂遺跡群周辺で展開する他の遺跡群との古代遺構と強く関連性を持っていることから大規模な区画の一端を担う遺構であることが推定される。



1. 調査地点の位置 (24 梱付 85 1:8000)



2. 道路造構全景 (北から)



3. 掘立柱建物検出状況 (北から)

0814 有田遺跡群第228次調査 (ART-228)

所在地 早良区有田1丁目11-9

調査原因 個人住宅建設

調査期間 2008.6.2～2008.6.11

調査面積 71m²

担当者 森本 幹彦

処置 記録保存

位置と環境

調査地点は早良平野のほぼ中央部にある有田遺跡群の東部に当たる。現況は宅地で、標高10.5m前後の低丘陵上に位置する。有田遺跡群の中では比較的調査の少ない箇所である。

検出遺構

検出した主な遺構は弥生時代前期の貯蔵穴1基、弥生中期の柱穴・土坑約40基、飛鳥時代の柱穴列1条、戦国時代の溝1条である。弥生時代の柱穴はその配置から円形堅穴住居に伴うものであつた可能性がある。弥生時代前期の貯蔵穴は深さが15cmしか遺存していないが、甕、鉢がまとめて出土した。この貯蔵穴を切る弥生時代中期の遺構は深く遺存しているので、弥生時代中期の段階で周辺の地下げが行われた可能性が高いとみられる。飛鳥時代の柱穴列は調査区中央部でほぼ東西方向に並ぶ。建物でなく構列と考えられるが、調査範囲が狭小なため明らかでない。戦国時代の溝は調査区北端で東西方向に現在の地境にほぼ沿うようにみつかった。幅1mに満たない小規模な区画溝である。瓦質の足鍋、土師皿、瓦などが出土した。

出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、黒曜石剝片など総量コンテナケース2箱である。弥生時代前期の貯蔵穴から略完形の土器群が一括出土している。

まとめ

狭小な調査であるが、各時代の遺構を検出し、比較的調査の少ない有田遺跡群東部の様相が明らかになった。時代ごとの遺構の遺存状況からみて、弥生時代中期には地下げなどの大規模な開発が行われているようである。飛鳥時代の構列については、屯倉の関連遺構である可能性があり、今後の周辺での調査に期待される。戦国時代の溝は区画溝であり、屋敷地や道路の境界をなすものとみられる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



2. 調査区全景（南から）



3. 弥生時代前期貯蔵穴（東から）

0815 博多遺跡群第183次調査 (NKT-183)

所在地 福岡市博多区御供所町2-4

調査面積 153.4m²

調査原因 五重塔建設

調査期間 2008.6.9～6.23

担当者 池崎 譲二・木下 博文

処置 記録保存

位置と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川にはさまれた砂丘上に展開する弥生～近世の複合遺跡である。今回の調査地点は東長寺境内の北側に位置し、北には聖福寺があり、付近一帯は百堂といわれた中國人に縁の深い地である。

検出遺構

現地表下3mで池状遺構を検出した。地山の砂丘上に有機物の腐植による黒色系粘土が1.1m堆積しており、多量の遺物が含まれていた。汀線は調査区内で検出されておらず、さらに広がるものと見られる。

出土遺物

土師器・中国製陶器・瓦・石器・木器・骨などコンテナ73箱分が出土した。特筆すべきものとして、中国系軒瓦、墨書き陶器、雨乞いの文言・女性器を記した石、木製陽物、滑石製の碇石ミニチュア・風鐸形錘がある。

まとめ

調査区はこれまでの調査・研究の所見から、柳田神社のある南西方面から等高線が食い込むその先端に近い位置に当たる。堆積土の質から、その谷部かまたは池状の遺構が存在した可能性を考えられるものの、調査面積が狭小のため、様相は不明確である。

しかし出土物の出土密度は非常に高く、1m²当たり3箱に及ぶ。その内容も中国系とされる瓦群と碑、鷹吻がまとまって出土しており、宋人百韻の伝承からも中国の釋迦様仏堂が存在したことを物語る。その一方で雨乞いを祈願した古来の伝統を持つ祭祀遺物が共存していることは、博多における信仰の様相を知る上で興味深い成果である。年代も12世紀代と紋れることも貴重である。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 構列（西から）



3. 調査区中央土層断面（西から）

0816 有田遺跡群第229次調査 (ART-229)

所在地 早良区小田部1丁目177-4

調査面積 26m²

調査原因 個人住宅建設

担当者 森本 幹彦

調査期間 2008.6.16～2008.6.20

処置 記録保存

位置と環境 調査地点は早良平野のほぼ中央部にある有田遺跡群の北部に当たる。現況は宅地でそれ以前は畑である。東に向けて低くなる丘陵斜面上に位置しており、遺構面の標高は西部で8.6m、東部で8mを測る。



1. 調査地点の位置 (82 号 309 1:8000)

検出遺構 遺構はGL-50cm前後の鳥栖ローム上面で直径30cm深さ40cm前後のピットが約35基検出された。覆土は暗茶褐色土が主体で、柱痕を残すものになかった。根摺乱を受けるものも多い。出土遺物が極少量であるが、遺構の時期は中・古墳と思われる。



2. 調査区全景 (西から)

出土遺物 遺物はコンテナケース1箱にも満たない。弥生土器、土師器、古墳時代後期の須恵器、鉄滓などが出土しているが、遺構に伴うものか分からず。周辺から流入した可能性が高いとも考えられる。



3. ピット群近景 (東から)

調査報告書は2009年度に刊行予定である。

0817 蒲田水ヶ元遺跡第2次調査 (KMT-20)

所在地 東区蒲田3丁目191-外

調査面積 420m²

調査原因 倉庫建設

担当者 小林 義彦

調査期間 2008.6.25～8.10

処置 記録保存

位置と環境 蒲田水ヶ元遺跡は、福岡市東部の多々良川と久原川に挟まれた冲積地上に立地する。蒲田地区は、九州自動車道福岡インターチェンジや福岡都市高速に隣接する利便性から物流拠点として開発が進み、周辺の水田は倉庫群へと変貌しつつある。第2次調査地点の現在は水田で、蒲田水ヶ元遺跡の西線に位置し、微高地間の狭い低地部を挟んで蒲田木原遺跡が対峙し、更に南方の丘陵上には都木古墳群がある。これまでに蒲田木原遺跡で12地点、蒲田水ヶ元遺跡で3地点で発掘調査が実施され、弥生時代～古墳時代の墳墓群や集落遺構が高い密度で確認されている。

検出遺構 発掘調査は、エレベーターピット部と道路の拡幅部について実施し、弥生時代中期～終末期の堅穴住居や土壙を検出した。堅穴住居などの遺構は、沖積層を形成する疊層上に掘り込まれている。申請地北側のI区では、弥生時代中期の土壙や焼土壙が検出され、遺構上には5～10cmの遺物包含層が堆積していた。中央部のII区では弥生時代後期後葉の堅穴住居7棟が重複して検出された。このうち4号住居は、火災住居で廃棄に際して多くの甕や器台、甕片が投棄されていた。また、III区は疊層上に水性的シルト質粘土層が厚く堆積しており、土壙などが検出された。

出土遺物 検出した堅穴住居や土壙、遺物包含層からは、弥生時代中期～後期後葉および古墳時代初めの甕や甕、器台のはかに滑石製紡錘車や片刃石斧などがコンテナケース61箱ほど出土した。

まとめ 本調査では、弥生時代中期～後期後葉の堅穴住居や土壙など集落域に伴う遺構や遺物が検出された。周辺の調査でも多くの住居跡や甕棺墓群が検出されており、周辺一帯に大規模な集落域が形成されていたことが窺える。

調査報告書は2009年度に刊行予定。



1. 調査地点の位置 (2 蒲田 2 1:8000)



2. II区全景 (西から)



3. II区4号住居跡 (南から)

0818 比恵遺跡群第115次調査 (HIE-115)

所在地 博多区博多駅南3丁目60番ほか
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 2008.7.2～2008.10.2

調査面積 755m²
 担当者 長家伸
 処置 記録保存

位置と環境

比恵遺跡群は福岡平野の中央を流れる那珂川と御笠川に挟まれた丘陵上に立地し、基盤の花崗岩上面には火山噴火起源のローム層が堆積している。

申請地は比恵遺跡群の北端部分にあたり、周辺の調査では弥生時代前期～中期を主体とした竪穴住居跡・貯蔵穴・溝・甕棺墓などを中心とした遺構群が確認されている。

検出遺構

遺構面は現況表土を70～120cmほど除去した鳥栖ローム層上面で、検出面標高は西側で4.5m、東側で4m前後となり、東側に向かって緩やかに傾斜し、調査区外で尾根にはさまれた谷部に至る。東側では傾斜に堆積した弥生時代前期～中期の包含層も残っているが、尾根線に近い西側ではローム層の削平も進んでいるものと考えられる。

検出遺構は主に西側の丘陵高所部に集中しており、竪穴住居跡10棟以上・貯蔵穴5基、溝5条のほか土坑・ピットも多く確認している。時期は弥生時代前期～中期を主体とし一部弥生時代後期～古墳時代前期、近世以降に位置付けられるものもある。弥生時代の注目すべき遺構として平面70×220cmの平面隅丸長方形の土坑を階段状に掘り下げ、松材の柱を立てた立柱遺構などがある。

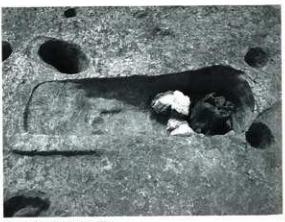
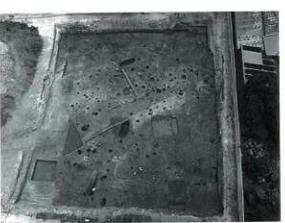
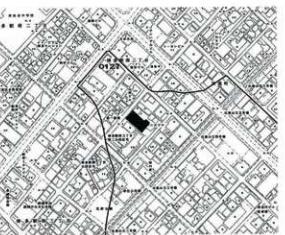
出土遺物

遺物はコンテナ85箱出土しており、弥生時代前期～中期の土器・石器が主体を占めている。また調査区中央部で確認した溝からは古墳時代前期の土師器と共に部材を中心とした木製品が出土している。このほか貯蔵穴からは大量の炭化米が出土しており注目される。

まとめ

東側に隣接する第114次調査をはじめとした周辺の調査成果とあわせ、丘陵北端部において弥生時代前期～中期、古墳時代前期の生活遺構群が濃密に展開する状況が追認された。

調査報告書は平成21年度に刊行予定である。



調査面積 275m²
 担当者 森本幹彦
 処置 記録保存

0819 コノリ遺跡群第6次調査 (KNR-6)

所在地 西区拾六町3丁目21-1
 調査原因 小学校校舎増築
 調査期間 2008.7.1～2008.7.20

調査面積 275m²
 担当者 森本幹彦
 処置 記録保存

位置と環境

調査地点は良平野の西部、十郎川左岸の低丘陵上に位置するコノリ遺跡群の東部に当たる。現況は小学校内敷地ではほぼ平坦となっているが、遺構面の標高は9～10m前後で、南側が緩やかな谷状地形となる。

検出遺構

周辺にはかつて木造の校舎があったため、その基礎や壊乱が調査区全体にみられる。調査区北部の遺構面は標高が高いが、削平が著しく、遺構、遺物はほとんどみられなかった。一方、調査区南部は緩やかな傾斜の谷状地形となっており、暗褐色土の遺物包含層が遺存している。包含層面で検出できた遺構は少なかったが、その下層において多数の柱穴、土坑、溝、竪穴住居跡の遺構を検出した。包含層は奈良時代に形成されたものであるが、その下層で検出した遺構の多くは弥生時代(主に中期後半)とみられる。遺構の遺存状況も比較的良好である。

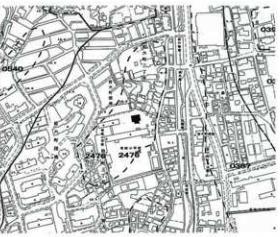
出土遺物

遺物は弥生土器を中心にコンテナケース10箱ほど出土した。弥生土器の他、黒曜石剥片、奈良時代の須恵器、土師器、鉄滓などが出土している。

まとめ

予想以上に遺構、遺物がみつかったことから、本調査区南部は彦岐小学校内では最も遺構の残りの良い箇所とみられる。また、その遺構密度や遺物量からみて、当該期には小学校内敷地に一定規模の弥生集落が展開していたものと考えられる。後の時代では奈良時代の遺物や遺構が少しつかっており、1箱程度出土した鉄滓もこの時期のものであろう。周辺での製鉄関連遺構の発見が期待される。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



2. 調査区全景（南から）



3. 3区弥生時代井戸周辺（南西から）

0820 博多遺跡群第184次調査 (HKT-184)

所在地 博多区冷泉町172-2、173、174-1
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 2008.7.2~8.7

調査面積 131.8m²
 担当者 木下博文
 埋置 記録保存

位置と環境 博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた3列の砂丘上に展開する弥生~近世に至る複合遺跡である。今回の調査地点は祇園町交差点の北西、大博通りを挟んで東長寺と対応する位置にある。付近には南に4・24次、北に23・105次調査地点があり、中世の遺構のほか弥生時代の甕棺墓も検出されている。



1. 調査地点の位置 (49 天神 0121 1:8000)

検出遺構 計3面の遺構面を調査した。第1面で幅2m・深さ1m強の大溝、第2面では戸井戸・土坑・ピット、第3面ではピットを検出した。



2. 第2面全景 (北から)

出土遺物 第1面の大溝およびその上の近世包含層から多量の瓦・陶磁器・銅製品が出土した。そのほか中世前期の輸入陶磁、極めて少量だが古代の須恵器・土師器片、弥生土器片が出土している。総量はコントナ38箱で、9割方は近世である。



3. 第2面SE02 (南から)

まとめ 計3面の遺構面を確認した。第1面の大溝は太閤町割にそろい現大博通りに平行しており、遺物からも近世のものと見られるが、その性格は今後の検討課題である。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。

0821 福岡城跡第60次(FUE-60)・鴻臚館跡第26次調査(KRE-26)

所在地 中央区城内一地内
 調査原因 確認調査
 調査期間 2008.07.01~2009.03.31

調査面積 860m² (うち530m²は2面)
 担当者 吉武 学
 埋置 埋め戻し保存

位置と環境 博多湾のほぼ中央部へ北に突き出した福崎丘陵の先端部に立地する。7世紀後半~11世紀半ばに置かれた我が国の外交施設である。現状は史跡福岡城三の丸（舞鶴公園）であり、城郭との二重史跡指定となっている。

検出遺構 平成18年度から平和台球場北半分を対象とした第V期調査を行っている。本年度は1ヶ所のトレンチにおいて、昨年度に引き続き福岡城三の丸武家屋敷関係遺構の調査を行い、その終了後に一部を掘り下げて下層の鴻臚館関係遺構の調査を行った。

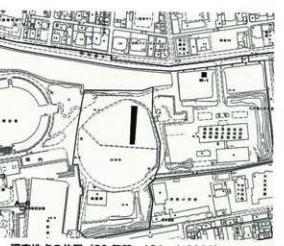
近世福岡城に関する遺構としては、石組み井戸1・敷地境界溝1・廐棄土坑などを確認した。

鴻臚館関係の遺構としては、第I期(7世紀後半)の柱列、第II期(8世紀前半)の布掘り縄と東門、第III期(8世紀後半~9世紀前半)と見られる礎石などを確認した。一方、瓦溜まりなどの廐棄土坑は全く見られない。鴻臚館の遺構はトレンチの南半に広がっており、北半は3mほど急激に丘陵が落ちて砂丘となる。

出土遺物 近世の遺物が大半を占めており、近世瓦を中心とし、古代~近世の陶磁器・須恵器・土師器などコントナ約200箱が出土した。

まとめ 福岡城武家屋敷については、今回のトレンチが屋敷地境付近に当たっているためか、建物遺構は認められなかった。下層の鴻臚館関係遺構では、トレンチ中央部で海側に向って落ちる高さ3m前後の斜面を検出し、前年度のトレンチ2で確認した斜面と結ぶことにより鴻臚館の海側崖面のラインが特定できた。また崖下は築城時に削られているものの、多量の古代瓦が出土しており、鴻臚館の外郭施設が崖下に存在する可能性が出てきた。次年度も引き続き崖下の調査を進めていく。

調査報告書は平成24年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (60 鶴舞 191 1:8000)



2. トレンチ南半の鴻臚館関係遺構 (南から)



3. トレンチ北半の海側へ落ちる斜面 (北西から)

0822 比恵遺跡群第116次調査 (HIE-116)

所在地 福岡市博多区博多駅南4丁目180番4

調査原因 事務所ビル建設

調査期間 2008.7.7~7.31

調査面積 327m²

担当者 山崎 龍雄

処置 記録保存

位置と環境

比恵遺跡群は那珂川と御笠川に挟まれて北側に細長く伸びる標高5~11mを測る洪積台地上に立地する遺跡で、南側に隣接する那珂遺跡群と並んで福岡市を代表する弥生時代遺跡である。調査区はこの比恵遺跡群中央部やや西よりに位置する。調査区一帯は開発に伴って調査が比較的行われている地域で、周辺の調査区としては東側に第12次調査区、南側に第13次調査区、南西側には第91次調査区などがある。

検出遺構

廃土の場内処理の関係から調査区を2区に分けて行った。遺構面は客土による盛土造成を受けているためか、深さは浅いところで地表下1m、深いところでは2mを測り、北から南へ下傾している。北側高所部は削平を受け遺構は少なく、主に南側傾斜地で検出した。

検出遺構は溝1条、土坑2基、ピットなどである。また南側斜面には弥生土器を含む遺物包含層が堆積していた。

出土遺物

遺構や包含層から弥生時代中期～奈良時代頃にかけての土器がパンコンテナ7箱出土した。

まとめ

北側を中心に削平を受けているため周辺に比して遺構は少なかったが、検出した遺構の時期は溝は出土した遺物から古代、土坑は弥生時代中期と後期末頃である。また今回の調査で調査区南側に深い谷が入ることが確認出来た。

報告書は2009年度刊行の予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 0127 1:8000)



2. 調査区西側第1区全景 (北西から)



3. 調査区東側第2区全景 (北西から)

0823 山王遺跡群第5次調査 (SNN-5)

所在地 博多区山王2丁目25-9

調査原因 共同住宅建設

調査期間 2008.7.9~8.5

調査面積 162.34m²

担当者 加藤 良彦

処置 記録保存

位置と環境

調査区は山王遺跡の南東部、御笠川に近く、現地表高5.9mで、GL下20cm程で鳥栖ローム上部の遺構検出面となる。基礎解体時の擾乱が著しい。

検出遺構

擾乱のため全容を判断しがたいが、検出した遺構は弥生時代中期土坑2基、溝2条、後期前半土坑1基、古墳時代後期土坑1基、溝1条、平安時代後期井戸1基ほか柱穴多数を検出した。擾乱の間際に厚さ30cm程の黒褐色の包含層がわずかに残存しており、土坑と多くの柱穴は堅穴住居の残存と考えられ、遺構の密度は高い。部分的に灰褐色砂質土の中世包含層が重なる。井戸は径90cm・70cmの2段掘となっており、2.7mが遺存する。下段の1.25mは桶の井筒と考えられるが、腐朽し遺存しない。検出面から1.5m下から八女粘土となり、境が湧水面となる。

出土遺物

井戸内部からは鍛付の石鍋と丸底の土師器が出土している。柱穴の底面中央から、長18cmの石剣切先をえた状況で出土している。前期末～中期初頭と考えられる。このほか弥生土器、土師器などコンテナケース3箱が出土した。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 2379 1:8000)



2. 調査区全景 (南西から)



3. 石剣出土状況 (南から)

0824 都地遺跡第8次調査 (TZI-8)

所在地 西区大字金武208-1
調査原因 小学校校舎増築工事
調査期間 2008.7.14～2008.8.6

調査面積 300m²
担当者 今井 隆博
処置 記録保存

位置と環境

都地遺跡は早良平野の南端、室見川の左岸に位置する。調査地点は室見川左岸の段丘上部の突端部で、都地遺跡の東端付近に位置する。過去に小学校の体育館部分を調査しており（5次調査）、弥生・古代～中世の遺構と古代の包含層を確認している。製鉄関連遺構も検出されており、多量の鉄滓が出土している。また、小学校の南側道路では弥生中期の包含層と古墳・古代の掘立柱建物が確認されている。

検出遺構

対象地は小学校の畠として利用されていた土地である。地表面からおよそ70cmほど下の礫混じりのロームを検出面とした。検出面の標高は西側で31.0m、東側で30.7mで、東側にゆるく傾斜する。地表から検出面までは全て盛土である。検出した遺構は柱穴のみである。柱穴は北側半分に集中しており、南側・西側は遺構が少ない。削平によるものと思われる。掘立柱建物を復原したが、柱穴の大きさが不揃いで建物と断定するには心許ない。

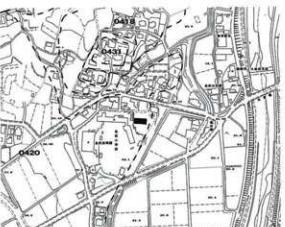
出土遺物

土師器片・陶磁器片・鉄滓少量がコンテナケース2箱分出土した。須恵器・土師皿・貿易陶磁器などのがほとんど出土していないうえに小片が多く、時期が判断しづらい。中世～近世であろうか。

まとめ

周辺では弥生～中世の集落・墓地・包含層が確認されているが、本地点では明確にそれらの時代と判断できる遺物は出土していない。調査区の西側・南側の遺構密度はうすいが、北側には遺構が広がるものと思われる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (93 都地 420 1:8000)



2. 調査区全景 (東から)



3. 遺構検出状況 (北東から)

0825 箱崎遺跡第62次調査 (HKZ-62)

所在地 東区馬出5丁目31外地内
調査原因 道路建設
調査期間 2008.07.15～10.15

位置と環境

箱崎遺跡は、多々良川河口の博多湾岸に形成された南北に延びる砂丘上の複合遺跡であり、筥崎宮が10世紀に建立されて以来、これを中心とする「中世都市」が形成された。調査地は遺跡南西縁辺部にある。現標高は3.2～3.6mであり、東側がやや高い。周囲では55次、60次の調査がある。

検出遺構

調査地は細長く、東西のI・II区に分割する。西側のI区は、西端～南辺が他より標高2.3～2.1mで砂丘上面の黄褐色砂となるが、東側は砂丘が低くなり砂層上に褐色砂の中世包含層が覆い、層中の1.6～1.9mを検出面とした（第1面）。またこの下部、1.2～1.4mのにぶい黄色砂上面も遺構検出面とした（第2面）。I区東半は、東半第2面と同じ1.4～1.7mのにぶい黄色砂上面まで下げて遺構を検出した。第1面は近世遺構が大半を占め、遺構が激しく重複する。推定18世紀以降の20基以上の壇場墓と、やや古い（17～18世紀か）多数の土塼墓群がある。土塼墓の一部には、銅鏡や鏡などの銅製品、鉢・刀子など鉄製品が副葬される。第2面は一部に近世墓もあるが、遺構の多くは中世である。調査区中央は中世遺物を包含する凹み状の地形となるが、砂丘列間の鞍部か。この面は13世紀までの遺物を含む礫混じりの河川堆積である。

II区は標高2.2～2.3mで砂丘上面となり、遺構を検出した。II区は近代以降の擾乱が多いが、近世墓の分布は僅かで、遺構密度は薄い。中世（12～14世紀）の構・井戸・土塼墓・柱穴を検出した。溝2条は3m幅で平行し、道路側溝だろう。

出土遺物

パンケース50箱分が出土した。12世紀から近世までの土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・国産陶磁器（壇場を含む）のほか銅製品・鉄製品がある。

まとめ

近世墓は、隣接する60次に統くもので、分布域は近年までの墓地区画に近い。一部に中世墓もあり、都市の縁辺部としての様相がうかがえる。

報告書は2009年度未刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (34 箱崎 2639 1:8000)



2. 調査区全景 (上が北)



3. I区近世土塼墓 SK362 (西から)

0826 箱崎遺跡第63次調査 (HKZ-63)

所在地 東区箱崎1丁目2706-2外
調査原因 公民館等施設建設
調査期間 2008.7.17～10.15

調査面積 506.2m²
担当者 榎本義嗣
処置 記録保存

位置と環境

箱崎遺跡は、博多湾岸に形成された古砂丘上の北端部に立地し、西側を博多湾、東側を多々良川の支流である宇美川に囲まれる。遺跡の占地する砂丘は南北方向に長く延びる。

調査地点は、遺跡の中央北寄りに所在し、砂丘の尾根縁付近に位置する。遺構検出は、地表下約1.4mの黄褐色砂丘基盤層上面で行い、その標高は約2.8mを測る。

検出遺構

検出した主な遺構は、12世紀前半から13世紀後半に位置付けられる井戸、土坑、ピットである。

井戸は総数18基を確認した。平面プランは径3～4mの円形もしくは梢円形を呈し、深さ20m以上を測る。井筒の大半は腐食するが、底面付近には遺存状態が不良ながら、水溜に用いられた径0.7m前後の木桶が残るもののが認められた。また、木質の腐食した輪郭のみの検出であったが、1基の水溜は径が0.3m程度と小振りで、曲物を用いた可能性がある。いずれの井戸も標高0.7m前後で湧水する。

土坑の大半は廃棄用のもので、数基には多数の土器類小皿や壺が一括廃棄されていた。

出土遺物

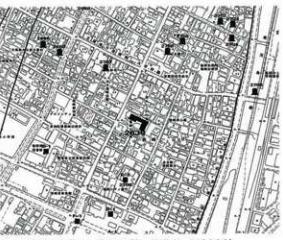
土器類を主体に瓦器、須恵質土器、国産陶器、中国産陶磁器、銅鏡、石鍋や石錘等の滑石製品、土鍤等がゴンコンテナケースにして40箱出土した。

まとめ

本調査地点での遺構の初現は12世紀前半で、ピークは13世紀前半にある。井戸は接続した位置に複数基が重複するものが多く認められ、一定期間に掘り直しをしながら、継続した維持管理が行われていたものと推測される。

今回の調査によって、本砂丘の尾根付近が12世紀以降になって積極的に生活の場として利用されはじめ、都市化が進行する様相を窺い知ることができた。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



3. 井戸掘削状況 (南西から)

0827 久保園遺跡第4次調査 (KBZ-4)

所在地 博多区東平尾 (福岡空港内)
調査原因 空港整備
調査期間 2008.7.18～継続中

調査面積 2,000m² (総面積6,000m²)
担当者 池崎謙二・板倉有大
処置 記録保存

位置と環境

調査地は月隈丘陵西端、丘陵部と低地部の境、福岡空港内の標高約5mに位置する。東側丘陵部に位置する久保園遺跡・席田大谷遺跡群では、これまでの発掘調査によって、主に弥生時代中期～古墳時代前期の集落・墓地が確認されている。

検出遺構

調査区北側では、平安時代の水路と水田、古墳時代前期の水路と水田、弥生時代後期の大溝、弥生時代中期の土器祭跡と溝などを確認した。

調査区南側では、水路と土器片を多量に含む明褐色粘質土層を確認した。この明褐色粘質土は10～20cmの堆積で、古代以降の埋め立て・整地層の可能性が高い。整地層上面で遺構は確認できず、整地層下に黒色土を埋土とする溝・土坑・柱穴などを一部確認した。

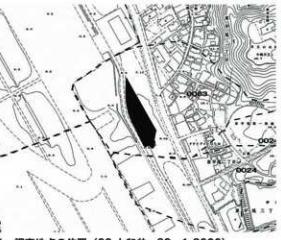
出土遺物

平安時代の遺物としては、椀皿類・墨書き土器・曲物・鏡矢・和同開珎などが出土している。古墳時代の遺物としては、土師器・須恵器が出土している。弥生時代の遺物としては、壺・塗などの日常用土器類・祭祀用土器類・礪形土製品・石磨丁・石斧・大小の棒材・板材・杭・ねずみ返し・二又鋸・机脚・へら・横樋・不明木製品・種子などが出土している。また、縄文時代の蛇紋岩製石斧や旧石器時代の剥片尖頭器も出土した。

まとめ

本年度の調査では、弥生時代～古代を主体とする遺構・遺物が発見され、久保園遺跡が月隈丘陵西側から低地側(空港滑走路側)へ広がっていることが明らかとなった。特に、弥生時代中期・後期の集落の広がりが明らかとなり、古墳時代から古代いたる水田利用の変遷を追うことができた点は、月隈丘陵西側の古代史を理解する上で重要な成果であった。調査は2010年度まで継続して行われる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



3. 水田足跡・土質調査状況 (南から)

0828 兵庫遺跡第2次調査 (HYG-2)

所在地 西区戸切2丁目地内

調査面積 370m²

調査原因 道路建設

担当者 加藤 隆也

調査期間 2008.8.1 ~ 9.23

処置 記録保存

位置と環境

兵庫遺跡は、早良平野のやや西寄りに位置する。早良平野は、東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から延びる長垂丘陵によって今宿平野と画されている。平野最深部の内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開析され、博多湾に向かって扇状に展開する複合扇状地の平野であり、平野部では幾つかの小河川の開析による沖積扇状地を形成している。本遺跡は室見川流域西岸の沖積高地上に立地しており、東側には戸切廻り町遺跡、西側には戸切遺跡が位置している。

検出遺構

遺跡の基本層序は、約50cmの盛土、旧耕作土と床土下には灰茶褐色砂質土の弥生時代から古墳時代遺物を含む遺物包含層がみられ、その直下の黄褐色粘質土層の上面にて遺構が検出された。遺構の密度は散漫であり、主にピット状遺構が見られた。調査区やや西寄りの地点で2間×4間の掘立柱建物が確認された以外は、遺構は主に調査区の東寄りの第1次調査地点側に多く分布する状況がみられた。

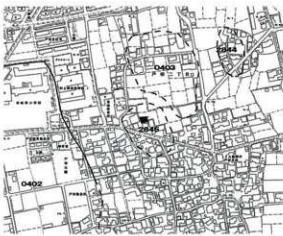
出土遺物

出土遺物は、主に遺構検出面上層の遺物包含層から出土した。

まとめ

検出された遺構の密度は決して高いものではないが、弥生時代前期末から中期初頭を主体とする兵庫遺跡のほぼ中央部を東西にわたって調査することができた。集落域の一部は、後世の削平で遺構が削られていることが確認されたが、集落の縁辺部の遺構は良好に遺存しており、今後は生産域を含めた土地利用の解明が期待される。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (92 戸切 2845 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 掘立柱建物検出状況 (北東から)

0829 戸切遺跡第4次調査 (TGR-4)

所在地 西区戸切2丁目1324

調査面積 70m²

調査原因 道路建設

担当者 森本 幹彦

調査期間 2008.8.4 ~ 2008.8.8

処置 記録保存

位置と環境

調査地点は早良平野の西部、十郎川東岸にある戸切遺跡の東縁辺部付近に位置する。戸切遺跡は南北に伸びる沖積微高地に位置する遺跡の1つで、これまでの調査では古墳時代後期前半を中心とする集落がみつかっている。現況は田地、5次調査地点とは同一の敷地内である。遺構面は水田耕作土下約30cmの砂礫混黄褐色シルト層で、標高10m前後である。

検出遺構

遺構密度は薄いが、古墳時代中期から後期とみられる溝1条、溝または土坑1基、小柱穴10基前後を検出した。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、黒曜石剝片などがごく少量出土している。時期を判別し難いものが多いが、隣接する5次調査地点と同時期のものであろう。

まとめ

調査範囲が狭小なため本調査地点だけでは、遺跡の実態を掴むのが難しいが、隣接する5次調査の成果から古墳時代後期を中心とする集落関連遺跡と考えられる。



1. 調査地点の位置 (92 植木 402 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 溝または土坑 (南から)

0830 拾六町ツイジ遺跡第2次調査 (JRT-2)

所在地 福岡市西区上山門1丁目27番1号
 調査面積 248m²
 調査原因 小学校講堂兼体育館建替え
 担当者 山崎 龍雄
 調査期間 2008.8.4～8.25
 処置 記録保存

位置と環境 本遺跡は十郎川下流西側の沖積地に立地する遺跡である。今回の調査は小学校講堂の建替えに伴うものであるが、この学校は建設時に第1次調査として調査が行われており、今回はその未調査部分についての調査であった。この遺跡の東側には十郎川遺跡、南側には湯原遺跡が立地している。調査地一帯は小学校建設以前は水田であったが、造成によって厚く埋め立てられており、現地表の標高は5.3mを測る。

検出遺構 調査区は既に厚く土客造成されていたため、深さ1.8mの灰オリーブシルト粘土まで重機で掘り下げ遺構の確認を行った。この面から上は搅乱土である。この面は比較的堅く安定した土壤であったので、遺構を確認したが、確認出来なかった。第1次調査の成果から下面遺構の存在を考え幅1mのトレチを2か所設定し、人力で掘り下げ確認を行った。堆積土は僅かに流木を含む黒褐色粘土層で、深さ0.9mで灰オリーブ細砂層となる。湧水がひどくこの下は掘削不可能であった。トレチ内では明瞭な遺構は検出出来なかった。

出土遺物 搅乱土から弥生時代から現代にかけての遺物がパンコンテナ2箱出土した。またトレチからは縄文土器や古代頃の土器細片が数点出土したのみで、木器などは検出出来なかった。

まとめ 上面及びトレチ調査でも明瞭な遺構・遺物は検出出来なかった。西側既調査区でも遺構・遺物は報告されていないので、本調査区も遺構はなかったと考える。

報告書は2009年度刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (103長堀 2475 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)

0831 博多遺跡群第185次調査 (HKT-185)

所在地 博多区祇園町415-1,2,3,414-2
 調査面積 113.71m²
 調査原因 ホテル建設
 担当者 加藤 良彦
 調査期間 2008.8.11～9.22
 処置 記録保存

位置と環境 調査区は博多遺跡群の南部、最奥部の砂丘列の南西側緩斜面に位置し、地表高は4.6mを測る。1.7m程の搅乱層を除去した面を第1面とした。北1/3程はすでに基盤の黄灰色砂が露出し、以南は暗褐色質土の包含層が40cmほど堆積し、基盤層は南に緩やかに下がる。この包含層下を第2面とした。

検出遺構 検出した遺構は弥生時代終末期土坑2基、古墳時代前期土坑11基、井戸1基、周溝状遺構1条、古墳時代後期土坑6基、奈良時代土坑1基、溝1条、水溜遺構1基、平安時代後期土坑4基、井戸2基、溝2条ほか柱穴多数を検出した。奈良時代の水溜遺構は径4m深さ40cmほどの土坑の壁に3～5cmの三和土を張ったもので、鉄鋸、マンガンが沈殿する。

出土遺物 弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦、貿易陶磁器などコンテナケース20箱が出土した。弥生時代終末期の土坑からは脚付土器等完形に近い土器4点がまとめて出土した。

まとめ 周溝状遺構は幅5m、深さ1.2mを測り、端部が矩形に曲がり、方形周溝墓と考えられ、主体部は北側の万行寺墓地内にある。円筒埴輪の小片も數点確認され、あり方は博多1号墳周辺に類似している。前方後円墳を伴う墓群が北、東方向の稜線上に広がる可能性がある。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (48天神 121 1:8000)



2. 調査区全景 (南西から)



3. 土器出土状況 (南西から)

0832 戸切遺跡第5次調査 (TGR-5)

所在地 西区戸切2丁目1324

調査面積 195m²

調査原因 個人住宅建設

担当者 森本 幹彦

調査期間 2008.8.11～2008.9.9

処置 記録保存

位置と環境

調査地点は早良平野の西部、十郎川東岸にある戸切遺跡の東部に位置する。戸切遺跡は南北に伸びる沖積微高地に位置する遺跡の1つで、これまでの調査では古墳時代後期前半を中心とする集落がみつかっている。現況は田であり、4次調査地点とは同一の敷地内である。遺構面は水田耕作土下約30cmの砂礫混泥褐色シルト層で、標高10m前後である。

検出遺構

遺構密度は薄いが、古墳時代中期前半の土器等がまとまって出土する土壤墓状の長楕円形土坑2基、古墳時代後期の井戸（溜め井）1基、溝2条、不整形落ち込み（住居？）3基、柱穴多数などを検出した。

出土遺物

遺物は土器器、須恵器、木製品、黒曜石剣片などコンテナケース8箱分出土している。古墳時代後期の井戸状遺構からの出土が多い。木製品もこの井戸状遺構からの出土で、有柄木製品（棒錐）などがみられる。古墳時代中期の土壤墓状遺構からは供獻器とみられる丸底壺や布留系壺が出土している。

まとめ

古墳時代後期前半の集落域は西に接する壱岐南小学校周辺が中心とみられ、1次調査では倉庫などがみつかっている。本調査区は当該期の集落域の東縁辺に位置すると考えられるが、井戸状遺構などがみつかっており、注目される。また、古墳時代中期の土坑は土壤墓の可能性が高く、古墳時代後期の集落成立以前は墓域であったと考えられる。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (92 桁本 402 1:8000)



2. 調査区全景 (北から)



3. 井戸状遺構 (東から)

0833 高畠遺跡第20次調査 (TKB-20)

所在地 博多区板付6丁目1-1

調査面積 2,203m² (総面積5,067m²)

調査原因 生徒寮建設

担当者 小林 義彦

調査期間 2008.8.18～2009.8.2

処置 記録保存

位置と環境

高畠遺跡は、福岡平野の東縁を北流する御笠川中流域の西岸に広がる洪積台地上に立地する。高畠遺跡ではこれまでに19地点で発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代と古代の遺構が検出されている。殊に、第8次調査や第17次調査では、古代瓦や埴輪、墨書き器、木簡のほかに人面土器や木製人形等の祭祀的遺物が出土している。第20次調査区は、高畠台地の東縁に位置する。

検出遺構

弥生時代中期末～古墳時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構は、堅穴住居や掘立柱建物、貯蔵穴、井戸、土壤と木棺墓があり、東縁には幅が30mを越す旧河川が北流しており、井堰が築かれていた。深さが3m余の井戸の底には壺や壺の完形品が投棄されていた。古墳時代の遺構は、堅穴住居と土壤のはか埋没した弥生時代の旧河川上には北流する幅が5～7m、深さが50～70cmの流路があり、覆土中からは小型丸壺や高杯、ミニチュア土器のほか建築材や農耕具、漁具などの木製品が大量に出土した。更に、古代の遺構は河岸段丘際に掘られた井戸と溝のほか調査区西端で幅員が9mの道路遺構が検出された。この遺構は、南接する第18次調査区でも検出されている。井戸はクスノキを削り貫いた桶を井戸底に転用していた。

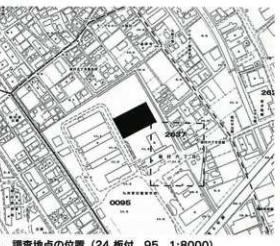
出土遺物

遺物は、住居や井戸および旧河川から多種多様な壺や高杯などのほか建築材、農耕具、古代瓦、埴輪、鬼瓦などがコンテナケース531箱が出土した。また、井戸からは765年に初鋳された三番目の皇朝十二銭「神功開寶」が出土した。

まとめ

古代の道路遺構は、水城東門から高畠・板付・那珂・比恵遺跡を経て博多まで一直線に延びる古代官道であることが明らかになった。また、瓦や鬼瓦、埴輪の出土は何らかの公的施設の存在を示唆している。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (24 板付 95 1:8000)



2. 10号溝中層遺物出土状況 (東から)



3. 9号井戸断面 (東から)

0834 有田遺跡第230次調査 (ART-230)

所在地 早良区有田2丁目20-1
調査面積 300m²
調査原因 宅地造成
調査期間 2008.8.18～10.07

担当者 菅波 正人
処置 記録保存

位置と環境 本遺跡は福岡市西部に位置する早良平野北側の独立丘陵上に立地する。調査地点は有田遺跡群の最高所付近に当たり、標高約14mを測る。調査地点は弥生時代前期初頭の環濠内部にあり、また、隣接地では那津官家関連建物や早良郡衙政府、正倉の建物が発見されている。

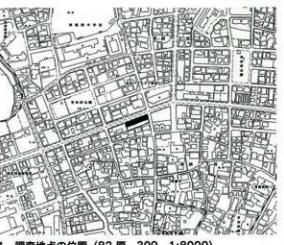
検出遺構 調査地点の現況は畠地で、周辺の道路より約50cm程度高い位置にある。約20～30cmの畠地の耕作土を除去すると、地山の鳥居ロームとなる。この面で遺構検出を行い、柱穴、溝等を確認した。

遺構は弥生時代前期の貯蔵穴、古墳時代後期の柵状遺構、奈良時代の続柱建物、中世の堀等を検出した。弥生時代の貯蔵穴は長方形プランを呈し、深さ60cmを測るものもある。柵状遺構は那津官家関連遺構に特徴的な3本の柱からなるものである。また、その前段階と考えられる1列の柵状遺構も確認された。奈良時代の倉庫は柱径40cmを超えるもので、早良郡衙正倉の一つと考えられる。中世の堀は幅約5m、深さ約2mの断面V字形を呈するもので、16世紀代のものと考えられる。

出土遺物 遺物は堀、貯蔵穴、柱穴等から弥生土器、土師器、須恵器等が出土した（コンテナ16箱）。

まとめ 今回の調査では弥生時代の貯蔵穴が検出でき、環濠の内部構造を知ることができた。また、那津官家や早良郡衙関連の遺構を検出でき、それらの施設の規模、構造を改めて考える上で、重要な成果が得られた。

調査報告書は21年度に刊行予定である。



- 54 -

0835 麦野C遺跡第14次調査 (MGC-14)

所在地 博多区東雲町4丁目17-2、18、19 調査面積 191.4m²
調査原因 共同住宅建設
調査期間 2008.8.20～9.5

担当者 木下博文
処置 記録保存

1 調査に至る経緯

2008（平成20）年4月28日、酒井博章氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区東雲町4-17-2、18、19における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（20-2-82）。申請地は麦野C遺跡の範囲内にあることから、協議の上2008（平成20）年8月4日に試掘調査を行った。その結果現地表面下0.5mにて遺構面を確認した。今回は設計変更不可能とのことから、全額国庫補助金により、発掘調査を実施することとなった。本調査は2008（平成20）年8月20日に重機による表土剥ぎより着手、同年9月5日に終了した。

2 位置と環境

麦野C遺跡は御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地上に位置し、東に大野城市、西に春日市が接する福岡市の最南端に位置する。周囲は麦野A・B・井相田、南八幡、雜賀隈、三筑の各遺跡に取り巻かれている。今回の調査地点は遺跡の最東端に位置し、標高14.7m程度の地点である。

3 検出遺構

現地表下0.5m下の暗灰シルト質土上面で、東西および南北方向の溝5、ピットを検出した。溝からは中国白磁、土師器皿が出土しており、古代末～中世前半のものとみられる。

SD01 (図7)

幅0.85mで、SD03を切り、磁北に直交して走り、調査区西壁際で北に直角に曲がっている。北端は搅乱によって失われているが、本来は方形区画をなしたものとみられる。しかし深さは9cmと非常に浅く、性格ははっきりしない。

SD02 (図7・9)

幅0.45～0.5m、深さ0.3mの南北溝で、断面逆台形である。埋土はしまりのない暗褐色土で、やや茶色味がある。SD03との違いが微妙だが、SD02がSD03を切るものとみられる。

SD03 (図7・9)

幅0.65～0.8m、深さ0.4mの南北溝で、断面逆台形である。走向は磁北より25度東に振れる。埋土はしまりのない暗褐色土だが、SD02よりは黒味が強い。他の溝に切られており、調査区内で最も古い遺構である。出土遺物から、平安末期～鎌倉前期に属す。

出土遺物 (図10)

1は土師器杯。2～4は白磁碗。1・2がSD03、3がSD02、4がSD04出土。

まとめ

溝の走向は概ね磁北に直交あるいは沿っている。近接する時期の遺構は、5次調査地点で確認されており、性格や関連性の究明が今後の課題である。



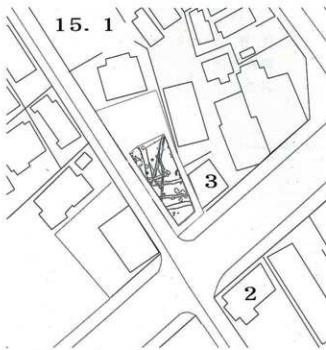
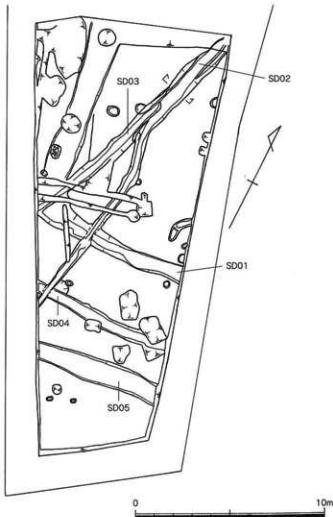
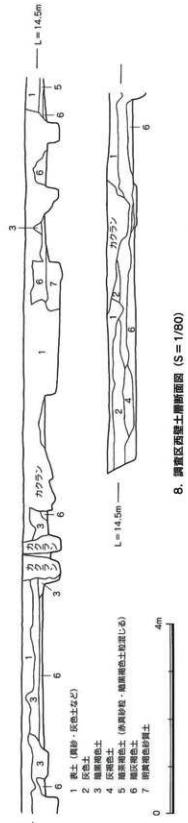
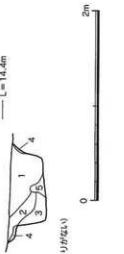
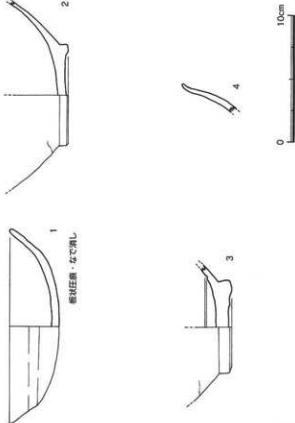
2. 調査区全貌（北から）



4. SD02 (南から)



5. SD03 (南から)

6. 調査区位置図 ($S = 1/1000$)7. 遺構配置図 ($S = 1/200$)8. 調査区底面土層断面図 ($S = 1/50$)9. SD02・SD03 土層断面図 ($S = 1/40$)10. 出土遺物測量図 ($S = 1/3$)

0836 原遺跡第24次調査 (HAA-24)

所 在 地 早良区原6丁目13-41

調査面積 42m²

調査原因 納骨堂建築

担当者 今井 隆博

調査期間 2008.8.25～2008.9.3

処 置 記録保存

1. 調査に至る経緯

平成20年4月15日、宗教法人寶樹院より納骨堂建築に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡に含まれており、試掘調査により遺構の存在が確認された。協議の結果、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。

2. 位置と環境

原遺跡は早良平野の中央を流れる室見川の東側に位置し、金屑川と稲塚川に挟まれた低位段丘上に広がる遺跡である。本地点は原遺跡の中央付近に位置する。周辺では7次・12次・16次調査が行われ、弥生時代～近世までの遺構が確認されている。

3. 接出遺構

地表面より-60～-90cmの明黄褐色粘土質土を検出土面としたが、この地山は調査区の南壁際と北東隅にわずかに残るのみで、調査区の大半は近世墓と擾乱と溝（SD07）であった。検出土面の標高は約5.0～5.2mである。SD07は東西方向に延び、調査区東端で向きを北に変える。幅は約2m、深さは約60cmで、断面はゆるやかなU字形である。覆土は一様な黒褐色土である。調査区東半ではSD07を確認できたが、西半の地山の落ちは幅4m以上、深さ1m以上で、一連のものか疑わしい。調査区の狭さと廐土置場の関係で調査区東半と西半の境付近を精査することができず、同じ溝なのがあるいは別の溝・擾乱と重複しているのかを確認することができなかった。溝に掘り込まれた近世墓から、溝の時期の下限は18～19世紀と判断できるが、覆土から出土した遺物は中世～近世の少量の土器・陶磁器のため、正確な時期は不明である。



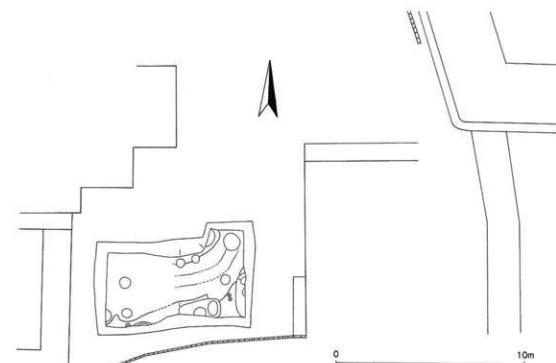
1. 調査地点の位置 (82 原 311 1:8000)



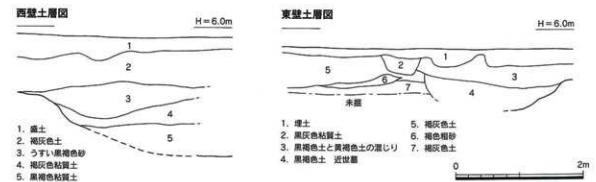
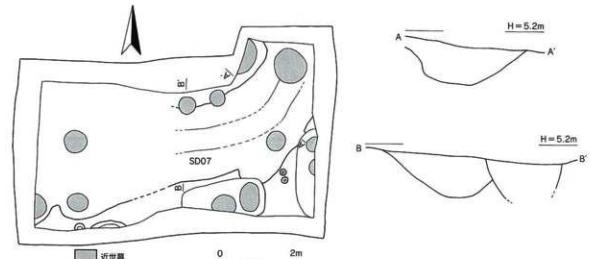
2. 調査区西半全景 (東から)



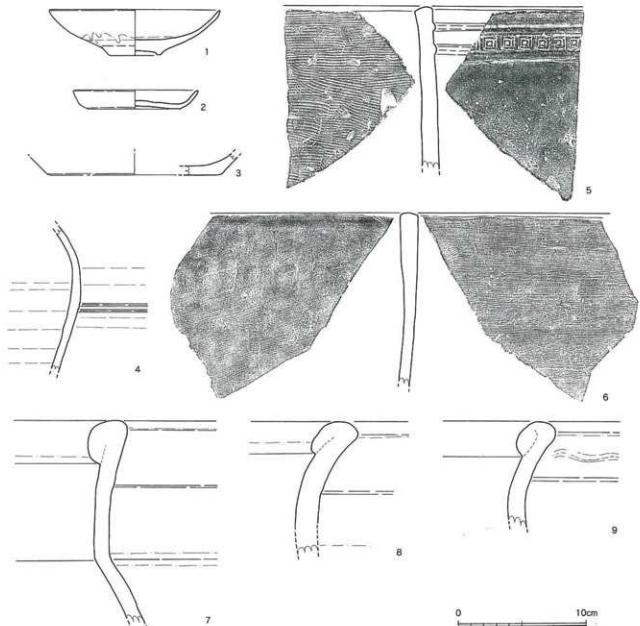
3. 調査区東半全景 (北から)



4. 調査区位置図 (1/200)



5. 調査区全体図 (1/100) 及び土層図 (1/60)



6. 出土遺物実測図 (1/3)

4. 出土遺物

1は陶器碗、2は土師皿、3は土師器の壊である。4は褐ochromeの陶器壺の胴部片である。5、6は瓦質の鉢である。5は口縁部に溝文を施す。7~9は陶器の大甕の口縁部片である。近世の墓に用いられている。1・2・5はSD07出土、その他のは採集遺物である。図化したものには、土師器・陶磁器の小片、黒曜石片が出土している。総量でコンテナケース2箱である。

5.まとめ

SD07は調査区の狭さと擾乱のために規模・機能が明らかではないが、本地点から北西へ数メートルの第16次調査地点では、弥生・古墳時代の住居址・貯蔵穴に加えて中世～近世の掘立柱建物・井戸などの集落遺構が確認されており、今回検出した溝はこの付近を面む区画溝であった可能性もある。

0837 南八幡遺跡第16次調査 (MHM-16)

所 在 地 博多区相生町2丁目30

調査面積 51.6m²

調査原因 共同住宅建設

担当者 本田 浩二郎

調査期間 2009.9.1 ~ 2009.9.8

処置 記録保存

位置と環境

南八幡遺跡第16次調査地点は遺跡範囲中央部のやや北西側に位置する。現地は西側に緩やかに傾斜する丘陵斜面上に位置しており、現地表面の標高は18.40m前後を測る。

検出遺構

調査では古代に属する方形堅穴住居1軒を検出した。この他には建物としてはまとめられない柱穴群を検出したのみである。堅穴住居は東側半分のみの検出で、全容は不明確であるが一辺2.80m程度、検出面から床面までの深さは20cmを測る。住居内にも上面からの攢乱が及んでいるためカマド・壁溝は確認できなかったが、埋土中に白色粘土がブロック状に含まれており未調査範囲にカマドが敷設されているものと考えられる。周辺の調査成果および本調査の成果より、過去の区画整理などにより周囲が大きく地形変化されていることが分かる。

出土遺物

遺物は住居埋土から土師器・須恵器がわずかに出土したのみである。出土遺物をFig.1に示した。1は須恵器碗である。口縁は端部で内傾し東口状となる。高台は断面形が方形で外底部端に接合される。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。この他の遺物はいずれも細片資料であるが、土師器甕・土師器壺などが出土している。

ま と め

今回の調査成果及び周囲の試掘調査の成果より、遺跡範囲の北西側についても八つ手状に谷地形が存在し、谷頭に沿うように古代の集落が展開していたことが推測される。

また、調査地点西側の試掘調査では遺構面となる鳥居ローム層が急激に落ちており、西側50m付近に存在する現在の鹿児島本線下で見られる微高地との間に旧河川が存在していた可能性が考えられる。



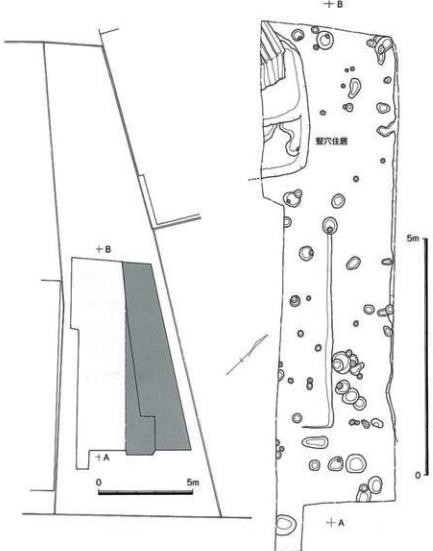
1. 調査地点の位置 (25 井戸 51 1:8000)



2. 調査区西側全景 (北西から)



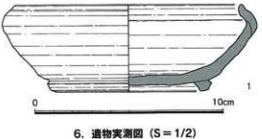
3. 堅穴住居発掘状況 (東から)



4. 遺構実測図 (S = 1/200・1/80)



5. 聖穴住居完壁状況（北から）



6. 遺物実測図 (S = 1/2)

0838 田村遺跡第23次調査 (TMR-23)

所在 地 福岡市早良区田村4丁目地内 調査面積 781m²
 調査原因 市道有田重留線建設 担 当 者 山崎 龍雄
 調査期間 2008.09.01～11.21 处 置 記録保存

位置と環境

調査地は福岡市西部の早良平野内陸部に立地する田村遺跡の東部に位置する。田村遺跡は田隈中学校の第1次調査以来、現在23次の調査が行われ、調査によって縄文時代から中世にかけての集落遺跡が存在したことが分かっている。田村遺跡の南には四箇遺跡、東側には野芥遺跡、北側には免遺跡や野芥大蔵遺跡など、本遺跡とはほぼ同時期の遺跡がある。

検出遺構 調査地は既存道路に従って南から北にI～IV区の4調査区を設定した。I・II区は圃地造成時に厚く盛土造成されている。遺構面はシルト又は粘土・砂礫層で、遺構面の標高は14～15mである。各区の検出遺構は以下のとおり。I区：遺構面は地表下1.2～15mの砂礫層。土坑1基とピットを少数検出。II区：遺構面は地表下1.6～1.9mの砂礫または粘土・シルト層。検出遺構は溝、ピット、土坑などである。III区：水田耕作下で検出した。検出遺構は溝、土坑、礫群、ピットである。IV区は一部平面の調査を行った。第1面は地表下1～1.1mで、北側は砂礫層、南側は遺物を含むシルト粘土層。南側では洪水砂が覆い、浅い自然流路を検出。第2面は南側で縄文土器を含む自然流路を検出した。

出土遺物 縄文時代～中世の各種遺物が出土した。出土量は少なく、総量でパンコンテナ10箱である。

ま と め 全体的に検出遺構は多くないが、東側のIII区では他区よりも多くの遺構を検出したので、調査区東側にも遺構が広がることが予想出来る。遺構面から縄文土器細片が少量出土したので、試掘ピットを入れ確認調査を行ったが、包含層は確認出来なかった。

報告書は2009年度刊行予定である。



2. 各調査区全景（南から）



3. 第IV区旧河川出土縄文土器

0839 戸切遺跡第3次調査 (TGR-3)

所在地 西区戸切2丁目地内
調査原因 道路建設
調査期間 2008.9.1~9.12

調査面積 105m²
担当者 加藤 隆也
処置 記録保存

位置と環境

戸切遺跡は、早良平野の西寄りに位置する。早良平野は東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から延びる長垂丘陵によって今宿平野と両側で囲まれている。平野最深部の内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開削され、博多湾に向かって扇状に展開する複合扇状地の平野であり、平野部では幾つかの小河川の開拓による沖積扇状地を形成している。本遺跡は室見川中流西岸の冲積微高地に立地しており、東側には兵庫遺跡、北東側には橋本櫻田遺跡が位置している。

検出遺構

遺跡の基本層序は、約40cmの盛土の下には旧耕作土と底土が見られ、その下には30~40cmの洪積砂が厚く堆積している。遺構はその下層の黄灰色粘質土上にて検出され、部分的に黒茶褐色粘質土の古墳時代遺物を含む遺物包含層がみられる。この遺構検出面は、調査区では西側に向けて緩やかに傾斜している。検出された遺構は、建物基礎の抜き取りの搅乱が著しいこともあり、ピット状遺構を確認するのみであった。ただし、その幾つかには柱痕跡がみられ、土壁からは古墳時代後期の鉢（碗）が出土した。

まとめ

調査面積が狭く、また検出された遺構の密度は決して高いものではないが、戸切遺跡第1次調査地点と第2次調査地点の間を埋める調査であり、古墳時代後期を中心とする遺構の遺存が見られる事から、当該期集落が広範囲に広がっていることを確認することができた。今後の調査成果により戸切遺跡の集落構造などが明らかになることを期待したい。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (92 戸切 402 1:8000)



2. 西側調査区全景 (西から)



3. 東側調査区全景 (東から)

0840 博多遺跡群第186次調査 (HKT-186)

所在地 博多区冷泉町400-2外
調査原因 共同住宅建設
調査期間 2008.10.1~2008.12.18

位置と環境

博多遺跡群第186次調査地点は博多遺跡群範囲内の中央部東側に位置する。周囲の調査では古墳時代から中世にかけての遺構や遺物が検出され、古代以降活発に集落が営まれていたことが判明している。調査区は三分割して設定することとなり、1区表土掘削より着手した。調査区の現地表面の標高は5.60~5.80mを測る。

検出遺構

第1面・第2面で検出した遺構は、溝・土坑・柱穴列・土師器廐棄土坑などではほぼ同一主軸 (N=50°-E前後) を採る。この主軸方向を探る遺構群は博多遺跡群の西側一帯で多数検出されており、これらの遺構の時期は古代から14世紀代まで存続するものと考えられる。

第3・4面では円形・方形土坑・区画溝・井戸等を検出した。区画溝はN=50°-Eの主軸方向をとり、断面形は逆台形となり幅3.50~3.00m程度、深さは1.20m程度となる。出土遺物より8世紀から13世紀代まで存続していることが分かる。井戸の多くは11世紀後半代から12世紀代のものであるが、3区で検出した井戸は9世紀頃のものと考えられ、多角形の掘方を持つ。井戸掘方からは銅製鋤が出土した。

出土遺物 遺物は総数で53箱分が出土した。

まとめ

遺構・遺物の初現としては弥生時代中期末の土坑・土器であり、該期より博多港の北西端部まで活動領域として取り込まれていたことが判明した。古代には規格的な大溝が掘削されており、この街区が中世期まで存続していることが確認された。このような古代から中世まで町割りが存続している地点は博多遺跡群内では複数確認されている。また、多角形を呈する井戸遺構や銅製鋤方の出土から官人階級がこの一帯にも存在していたことが窺える資料が得られた。

報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 3区第2面全景 (北東から)



3. 3区第3面全景 (北西から)

0841 ヒワタシ遺跡第1次調査 (HWT-1)

所在地 早良区東入部2丁目173-1・2、1776
 調査原因 宅地造成
 調査期間 2008.9.22～10.15

調査面積 329.5m²
 担当者 木下博文
 処置 記録保存

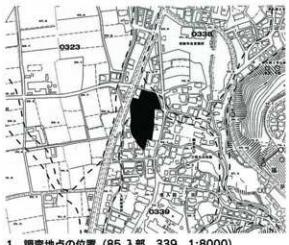
位置と環境 ヒワタシ遺跡は室見川東岸、荒平山西麓の標高34m程度の段丘上に立地する。今回の調査地点は遺跡の北端部に位置する。

検出遺構 中世以降の溝1、古墳時代中期～古代までの掘立柱建物1、焼土坑1、ピット群を検出した。

出土遺物 古墳時代中期～後期および古代の土師器・須恵器、中世の陶磁器、鉄滓少量などコンテナ1箱分が出土している。

まとめ ヒワタシ遺跡は調査事例がなく、具体的な内容がよくわからていなかった。今回の調査から古墳時代を中心とした遺構が展開することが明らかになった。掘立柱建物や焼土坑、鉄滓の存在から、生産関連遺構が周囲に広がる可能性がうかがわれる。少量だが遺物から株生・古代の遺構の存在も想定できる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (85 入部 339 1:8000)



2. 調査区全貌 (北から)



3. SB03 (西から)

0842 博多遺跡群第187次調査 (HKT-187)

所在地 博多区奈良町110番・101番
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 2003.10.1～11.7

調査面積 143m²
 担当者 屋山洋
 処置 記録保存

位置と環境 本調査地点は博多遺跡群の北端部に位置し元寇防塁推定線よりも60m程海側に位置する。中世中頃までは元寇防塁が博多の街の北限であったとされるが、中世末から近世初頭には博多を代表する豪商である神屋宗湛の屋敷が築かれており、以後街地として発達した。発掘調査では博多小学校を中心とする地域で石積土坑が多く出土するが、用途としては小型の地下蔵やトイレとして利用されたと考えられる。

検出遺構 調査区中央で近世後半に埋没した石積土坑を3基検出した。そのうち1基は遺存状態が悪く規模などは不明である。2基はほぼ似たような規模で並んでおり同時並存の可能性もあるが、接点部分が近代の井戸により破壊されているため詳細は不明である。調査区東端には径6m近い土坑が掘られており、多量の瓦や近世陶磁などが廃棄されていた。調査区東側で検出した溝は現行の地割りと若干ずれており、太閤町割り以前の溝のある可能性がある。また掘り直しを行っており、長期間使用されたと考えられる。

出土遺物 廃棄土坑から多量の近世瓦と近世陶器が出土した。出土する器種は時期の碗・皿や陶器大甕や土師質の火鉢等が多い。その他中世まで遡る可能性がある土坑 (SK2010) からは土師壺・皿がまとまって出土した。その他に土鈴や土馬など祭祀に関わる遺物が数点出土している。

まとめ 中世の溝と土師壺・皿廃棄土坑、近世石積土坑と廃棄土坑が出土した。溝の出土遺物は主軸が現地割りと若干ずれることから中世まで遡ると考えられる。溝は掘り直されており、長期間使用されたと考えると元寇防塁北側の街化が中世のどの時期まで遡るかを周辺の発掘調査で検証する必要があると思われる。

調査報告書は平成21年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (48 千代博多 121 1:8000)



2. 調査区全貌 (北東から)



3. SK2008 (東から)

0843 四箇古川遺跡第4次調査 (SHK-4)

所在地 早良区四箇4・5丁目地内

調査面積 2200m²

調査原因 道路新設工事

担当者 今井 隆博

調査期間 2008.10.1 ~ 2009.3.10

処置 記録保存

位置と環境 四箇古川遺跡は早良平野の南東端に位置する。周辺には四箇遺跡、重留遺跡、東入部遺跡などがあり、縄文時代～中世の遺構が多く確認されている。第4次地点は四箇古川遺跡の中央を南北に縱断する位置にある。

検出遺構 調査区を5つに分け、北から順にA区～E区とした。A区では灰オーリーブ色シルト及び疊層を検出面とした。検出面の標高は約23.6m。検出した遺構は縄文時代晚期の埋甕・土坑・ピット・縄文時代後期～弥生時代前期の包含層である。B区は現地表から-80cmの黄褐色シルトを検出面とした。標高はおよそ24.7m。検出した遺構は堅穴住居址、ピット、溝、土坑である。弥生時代中期の土器が少量見られるが、出土遺物が少ないため時期決定が難しい。C区・D区は耕作土及び耕土下の砂疊層を検出面とした。検出した遺構は中世の溝、土坑、ピット、包含層である。E区の大部分は河川であった。遺物はほとんど出土していない。

出土遺物 遺物は縄文土器、弥生土器、土器盤、陶磁器を中心とし、総量でコンテナケース約30箱分出土した。

まとめ 狹く長い調査区のため、地点により遺跡の様相が大きく異なる。B区は黄褐色粘土質を基盤とする微高地で、住居址、溝、柱穴など弥生時代前期～中期と中世の集落遺構が多く見られる。北側のA区は低地にあたり、縄文時代後～晚期の遺物が確認されたが、明確に遺構と判断できるものは少ない。B区の微高地より南側のC・D区は河川による砂疊堆積後に中世の生活面が形成されている。E区も河川跡である。四箇古川遺跡は河川跡と微高地上の集落からなる遺跡であり、縄文時代遺構の広がりと微高地範囲の把握が今後の課題であろう。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



0844 元岡桑原遺跡第54次調査 (MOT-54)

所在地 西区大字桑原字戸山610他

調査面積 1872m²

調査原因 大学用地造成

担当者 池田 裕司

調査期間 2008.10.1 ~ 2009.1.9

処置 盛土造成、一部破壊

位置と環境 北側に開く谷の下流に位置し、数m北側は西側からの大原川の谷への落ちとなると考えられる。標高6.5mほどの緩傾斜地で、水田として造成されていた。20次調査地内、その未掘部分の調査である。造成土、旧耕作土等を除去した後、標高5mで遺構面に達した。

検出遺構 調査区の北西には20次、48次から続く黄褐色土を地とする高まりがある。南東隅にも淡黄褐色土を地とする高まりがあり、その間は調査区を斜めに河川堆積となる。

北西側の高まりに若干のピットを検出したが、まとまりはない。河川落ち際では杭列を検出した。河川は幅40mほどで、20次調査のSD002とSD044の合流地点にある。河川堆積は大きく2層に分かれる。上層は暗褐色粘質土を主体とし、下層は粗疊層と若干の有機土壤で上下で不整合をなす。

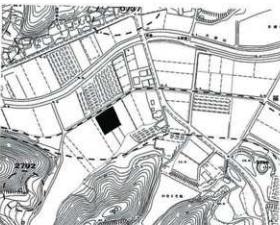
河川は複数の流れがあるが区別しての掘削は行っていない。

出土遺物 遺物の多くは河川堆積からである。その上部からは主に6、8世紀、下部は弥生後期から6世紀の土器を中心とした遺物が出土した。遺物は北西岸に多く、南東岸は少ない。河川中央部分はまばらとなる。櫛等の木製品も数点出土している。下層では若干の弥生土器、縄文前期、中期、晚期の土器が出土した。

北西岸落ち際からは、2×2mほどの範囲から黒曜石の剥片が集中して出土した。そのなかには15cm×6cmほどのコアもあり、石器製作の跡とも考えられる。

まとめ 20次調査地内から続く河川堆積を確認し、コンテナケース4箱の遺物を収集した。黒曜石剥片の集中部は、縦長の剥片と伴出した若干の土器から縄文晚期かと考えられる。

平成22年度に報告書刊行予定である。



0845 蒲田部木原遺跡群第12次調査 (KHH-12)

所在地 東区蒲田3丁目751-2

調査面積 375m²

調査原因 育苗施設建設

担当者 長家伸

調査期間 2008.10.20 ~ 2008.12.5

処置 記録保存

位置と環境 蒲田部木原遺跡は久原川と多々良川に挟まれた丘陵及び沖積地に立地している。本調査地点は、部木八幡宮が位置する丘陵の北側に広がる沖積地上に位置している。周辺では主として倉庫建設に伴って発掘調査が行われており、弥生時代中期ごろの埋葬遺構である壺棺墓や、弥生時代～古墳時代の生活遺構が非常に高い密度で確認されている。

検出遺構 検出した遺構・遺物は弥生時代中期後半及び古墳時代後期を主体としている。古墳時代後期に位置づけられるのは堅穴住居跡7棟以上、土坑、柱穴などである。遺構はいずれも後世の削平により残存状態はあまりよくなかったが、堅穴住居跡には竈が設置されていた。

また弥生時代中期後半には微高地間に低地部が残されており、多くの土器・石器が出土している。ここは低地部を利用した為的な溝が掘削された可能性も考えられるが、今回の調査では不明瞭である。遺物は微高地土上に展開した集落から投棄されたものと考えられる。

出土遺物 遺物はコンテナ74箱出土しており、その大半は弥生時代中期後半の溝から出土したものである。出土遺物の大半は日常土器であるが、このほか甕棺及び丹塗り土器破片、石器、少量の木器も出土している。また、堅穴住居からは土師器・須恵器が出土している。

まとめ 蒲田部木原遺跡とともに隣接する蒲田水ヶ元遺跡は、微高地鞍部を挟んだ一連の遺跡群と考えられるが、これまでの調査においても縄文時代後晚期～古墳時代を中心とした非常に濃密な遺構群が確認されており、今回の調査においてもその一端を明らかにすることことができた。特に弥生時代全期を通じて展開する遺構群は市内でも有数のものであり、今後も調査成果が注目される。

調査報告書は平成21年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (2 篠田 3 1:8000)



2. 全景 (西から)



3. 低地部堆積状況 (北から)

0846 五十川遺跡第17次調査 (GJK-17)

所在地 南区五十川2丁目308-10.11番

調査面積 43.0m²

調査原因 専用住宅建設

担当者 加藤真彦

調査期間 2008.10.20 ~ 10.31

処置 記録保存

1. 位置と環境

調査地点は、福岡平野の中央部、那珂川右岸800 × 240m程の独立洪積台地中位段丘面上に立地する、五十川遺跡の南西部の台地線辺付近に立地し、西隣地では市道御供所井尻線建設に伴う第11次調査が実施され、弥生時代前期貯蔵穴3基・古墳時代前期方形周溝墓2基・中世の溝2条が検出されている。

本調査は道路境界に面した幅20m長さ25mの擁壁部分を対象に実施、重機の搬入路確保のため東西で調査区を二分し反転して行った。また、溝等の大型の遺構は、擁壁ブロックの基礎掘り以下のレベルに達すると基礎が傾くとの施工側からの提言があり、西半部の溝・貯蔵穴は検出面下25cmの掘削に留め、遺構を遺存し将来の調査に託すこととなった。現地表面標高は11.0mを測り、現況は宅地である。

2. 基本層面

現地表下の35cm程の客土・5cm程の水田耕土・25cm程の客土・20cm程の旧畑耕土下の鳥糞ローム上が検出面となり、包含層は遺存しない(図3)。検出面標高は102mを測り、北西に緩傾斜しながら下がる。

3. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は弥生時代前期貯蔵穴1基・古墳時代前期の溝2条・後期の溝1条・中世の溝2条で、主に4時期の集落・墓地が重複し、近世以降には畑地化している。遺物は、各遺構から弥生土器・石器・土師器・須恵器・瓦・貿易陶器等コンテナ1箱分出している。

- 1). 貯蔵穴SU08 調査区北西に位置し、中世溝SD05に切られる。これの中位から上端にかけ平面の1/6程を検出した。基礎の制限のため上端から25cm程掘削したのみで、覆土は黒褐色土。遺物は弥生土器を少量検出。隣地11次調査A区の弥生時代前期末～中期初期の貯蔵穴に覆土・形態が類似する。
- 2). 溝 溝は古墳時代で3条、中世後期で2条検出した。

SD01 調査区東端部で検出した。幅2.5m以上の大溝で緩く弧を描く。深さ35cmで暗緑褐色粘質覆土中よりⅢA期の須恵器・甕破片を数枚検出した。10次調査A区SD1003は古墳時代の径10～12mの円墳周溝と考えられており、同様の可能性が考えられる。他に混入で石錐・花崗岩製石片が出土した。



1. 調査地点の位置 (38 篠原 88 1:8000)



2. 調査区東半部全景 (西から)



3. 調査区東半部全景 (北西から)

SD06 調査区中央部を南北に流れる幅70cm深さ8cm程の小溝で、SD07に切られる。覆土は地山土小ブロックを含む黒褐色土で、古墳時代前期の可能性がある。

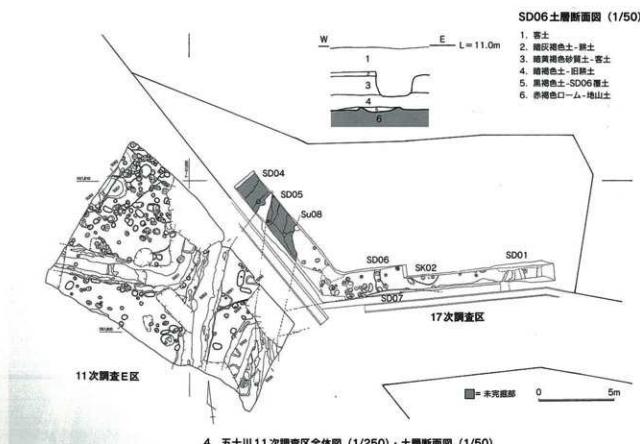
SD07 調査区中央部を東西に流れる北端部のみの検出で、深さ8cm程。第10次調査C区SD3023・第11次調査E区SD5002で復元される古墳時代前期の方形周溝墓に連なる可能性がある。内法東西12m・南北11mに復元され、この北側の溝に合致する可能性が高い。

SD04 調査区北西端部で検出した北東方向に流れる大溝で、幅2m以上、深さは基礎の制限のため上端から25cm程掘削したのみで、覆土は暗灰褐色粘土。口禿の白磁・土師器片を検出。第11次調査E区の幅23深さ10mのSD5003に連なり、本調査区で東に屈曲する。この溝は南のF区SD6010・G区SD7004まで連なり、南北80m弱の15・16世紀代の中世居館の方形区画溝と考えられている。

SD05 SD04の南に隣接する南北大溝で、幅20m、深さは同様に基礎の制限のため上端から25cm程掘削したのみで、覆土は暗灰褐色土。斜格子叩きの平瓦片・土師器片を検出している。第11次調査E区のSD5003に切られる、SD5006に連なる。室町時代と考えられる。

4. まとめ

本調査区西部では11次調査E区から北に延びる幅2m程の中世の溝SD04・05の2条を検出。弥生時代前期貯蔵穴SU08はこれに切られた。東部では同じく11次調査区から東に延びる古墳時代前期の方形周溝墓の北側縁部SD07を検出した。東端部で検出した幅25m以上の浅い溝SD01は底面近くに須恵器大甕の破片が堆積し、後期円墳周溝の可能性がある。



0847 戸切巡り町遺跡第2次調査 (TRM-2)

所 在 地 西区戸切2丁目地内

調査面 積 121m²

調査原 因 道路建設

担 当 者 加藤隆也

調査期間 2008.10.16～10.23

記録保存

位置と環境

戸切巡り町遺跡は、早良平野のはば中央部西寄りに位置する。早良平野は東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から延びる長垂丘陵によって今宿平野と画されている。平野最深部の内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開析され、博多湾に向かって扇状に展開する複合扇状地の平野であり、平野部では幾つかの小河川の開析による沖積扇状地を形成している。本遺跡は室見川中流域西岸の沖積高地上に立地しており、西側には兵庫遺跡、北側には橋本復田遺跡が位置している。

棟 出 構

遺跡の基本層序は、約20cmの耕作土と床土下には茶褐色砂質土の弥生時代から中世にいたる遺物を含む遺物包含層があり、その直下が黄褐色シルト層と黄褐色粗緻層を基盤とするやや安定した面である。その層に掘り込まれた状態で、不定形土壌を検出した。この微高地は、調査区の北側に向けて緩やかに傾斜している。

出 土 遺 物

出土遺物は、主に遺構出土面上層の遺物包含層から出土しており、不定形土壌からは土器の小破片が出土している。

ま と め

検出された遺構の密度は決して高いものではないが、遺物包含層には弥生時代からの遺物が見られることから、当該期の集落の存在がうかがえる。今回の調査は狭小なものであったが、今後の調査により集落構造などが明らかになることを期待したい。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



0848 有田遺跡群第231次調査 (ART-231)

所在地 早良区小田部1丁目216-1 調査面積 80.6m²
 調査原因 個人専用住宅建設 担当者 木下博文
 調査期間 2008.10.29～11.10 処置 記録保存

位置と環境 有田遺跡群は室見川東岸、標高8m程度の八手状の台地上に立地する旧石器～近世に至る複合集落遺跡である。今回の調査地点は、遺跡の北端部に位置する。

検出遺構 現地表下30cmの黄褐色ローム質土上で遺構を検出した。遺構面は重機による最近の搅乱で荒らされているものの、かろうじて消失を免れた黒褐色粘質土を覆土とするピットを大小含めて、40基弱検出した。中には柱痕を有し深さが95cmに及ぶものもあるが、確実に組み合う柱穴を見出せず、掘立柱建物は一間四方のもの1棟を復元するに留まった。

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、土師器の小破片、黒曜石の剥片が数点出土した。

まとめ 搅乱を受けているもののピットが残存し、掘立柱建物を1棟復元した。しかし、出土遺物が極めて少量のため、時期は決定的ではない。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (SB1 室見 309 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. SB01 (北から)

0849 井尻B遺跡第32次調査 (IGB-32)

所在地 南区井尻1丁目712番7 調査面積 98.9m²
 調査原因 個人専用住宅建設 担当者 久住 猛雄
 調査期間 2008.11.10～12.05 処置 記録保存

位置と環境 井尻B遺跡は、諸岡川と那珂川に挟まれた段丘上に立地する南北900m×東西400mの遺跡である。調査地点は遺跡北半の中央部西寄りに位置する。周囲の標高は12.60～13.00mであるが、調査地は盛土され一段高く13.20～13.40mである。

検出遺構 現地表下-100cm前後の12.05～12.50mでローム地山上面となり遺構を検出した。検出面は南東側が低く、隣地の試掘調査を考慮すると東側に狹小な谷地形が入るようである。なお調査区は3区に分割している。検出遺構は、堅穴住居2棟以上（各々建替あり）、井戸1基、溝状遺構4条、土坑4基以上、柱穴である。柱穴は掘立柱建物を復元できるものがある。住居2棟は弥生時代後期半～終末期、いずれも長方形でベッド状遺構を2辺ないし3辺に有し、2本主柱構造である。切合があり、新しいSC21からはガラス玉類が多数出土した。SC21の貼床土の下部に大型土坑があり、八八粘土層まで掘られた跡があり、井戸と考えられる。井戸は平面形が南北に長く、埋土の不整合や底面の凹みが2ヵ所あり、2基の重複（掘り直し？）であろう。遺物が少ないが、弥生時代中期前半に遡るとみられる。溝状遺構SD03は調査区中央を南北に走り、埋土から古代の可能性がある。弥生時代の遺構が多いが、浅い柱穴などでは7世紀末～8世紀の須恵器や竹状模骨痕のある丸瓦が出土しており、古代の遺構も存在する。

出土遺物 パンケース8箱分出土した。弥生土器（中期～終末期）が多いが、他に古墳時代前期の古式土師器、飛鳥～奈良時代の須恵器や瓦がある。他に鉄器、石器・石製品が少數ある。ガラス玉類（小玉・管玉）が93点出土した（管玉2点）。

まとめ ガラス玉類は形状・色調の種類が豊富である。小玉は25mm以下の極小型が目立ち、管玉も2mm幅程度の極小型である。住居出土としては市内最多であろう。報告書は2010年度の作成予定である。



1. 調査地点の位置 (25 井尻 90 1:8000)



2. 2区調査区全景 (堅穴住居2棟など) (東から)



3. 3区調査区全景 (SC21など) (南から)

0850 西ノ堤池遺跡第1次調査 (NTI-1)

所 在 地 城南区片江5丁目1431

調査面積 69m²

調査原因 個人住宅建設

担当者 森本 幹彦

調査期間 2008.11.26 ~ 12.09

処 置 記録保存

1. 調査に至る経緯

2008年11月11日付けで幸村茂雄氏より福岡市教育委員会宛に、城南区片江5丁目1431番225号（212.5m²）における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会がなされた。埋蔵文化財第1課で確認したところ、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である西ノ堤池遺跡内であり、2003年10月22日に試掘調査（県有地売却のため）がなされていて、包含層や遺構の存在が確認されている。この試掘結果をもとに協議を行った結果、建設工事にあたって钢管杭を打設する必要があり、遺構の破壊を回避できないことから、建設施工部分の73.31m²を対象とした記録保存のための本調査を国庫補助事業として実施することになった。

2. 位置と環境

西ノ堤池遺跡は油山より北に派生する丘陵群の谷間にある西ノ堤池を中心とする範囲として周知されているが、包蔵地内の本調査は今回が初めてである。周辺の丘陵上にはカルメル修道院内遺跡や淨泉寺遺跡などが分布している。

調査地点は北西方に伸びる小丘陵の南西斜面に位置しており、遺構面の標高は海拔20.1~20.9m前後である。

3. 層序

現況は宅地であり、70~80cmの現代整地土層の下に近世以前の耕作土ないしは整地土である褐色シルト層が2~3層あり、その下が遺構面となる。遺構面は地山の黄橙褐色粘質土層上面であり、調査区南東部には、暗褐色シルトの包含層が遺存する。

4. 遺構

調査区北東部の尾根上の高所に当たる箇所や北西部の段落の下は近現代の擾乱や削平が著しく、遺構は残っていない。調査区南東部の西斜面付近において弥生時代中期~古墳時代後期の包含層やピットを検出した。

調査区南端部で検出した08は直径70cm、深さ90cmほどの掘り方で、直径20cmほどの柱を立てていたとみられる。覆土は上層が淡褐色土、下層が暗褐色土である。

ピットの時期は08が出土土器から弥生時代後期後半とみられるが、他の出土遺物が極少であるため明らかではない。次に述べる包含層出土遺物の時期におさまるものであろうか。



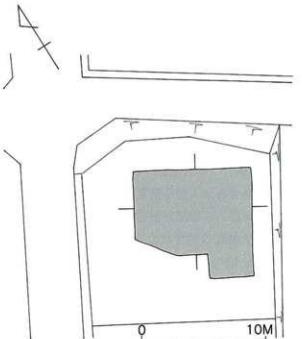
1. 調査地点の位置 (74 七隈 2423 1/4000)



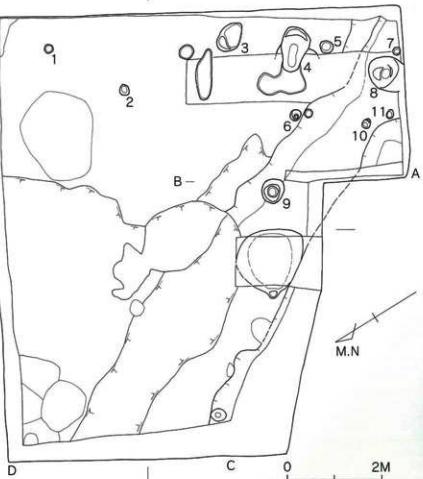
2. 調査区東部全景 (北東から)



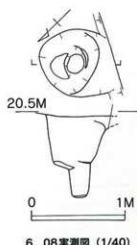
3. 調査区西部全景 (北から)



4. 調査区位置 (1/300)



5. 遺構全体図 (1/80)



6. 08 実測図 (1/40)



7. 08 南側 (南から)

5. 出土遺物

出土遺物の総量はコンテナケース1箱である。1~4はピット08から出土した弥生土器で、1の後期後半の鉢が遺構の時期を示すものとみられる。その他は調査区南東部の包含層から出土した遺物である。摩滅した弥生時代中期後半の土器小片が主体で、古墳時代後期後半の須候器（7~9）などが少量みられる。8は壺の体部片で外面に斜格子目タキとカキ目が施されている。9の杯底部には籠記号とみられる沈線がみられる。土器以外では鉄滓1点と旧石器が2点出土している。10は黒曜石の縦長剥片で、11はサヌカイトの横長剥片である。



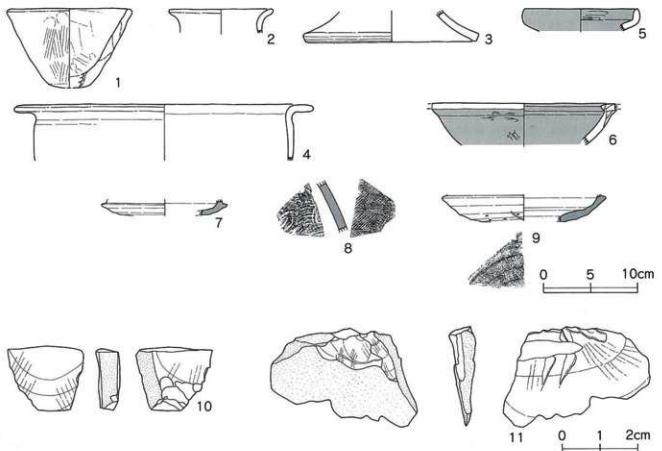
A-Bライン土層説明

1. 砂質土 →現代盛土
2. 黒褐色シルト（しまりあり）→整地土
3. 桜褐色土ブロックの主体、茶褐色土混じりシルト →整地土
4. 褐色シルト
5. 暗茶褐色シルト（しまりあり。炭多い。土器定層含む）→包含層
6. 黄褐色土混じり褐色シルト（土器混じる）→包含層
7. 褐色シルト（6より粘性強い）→包含層
8. 黄褐色粘質土 →地山
9. 桜褐色粘質土 →地山

C-Dラインの土層説明

1. 現代盛土
2. 黒褐色土
3. 茶褐色シルト（近世以降、遺物少量）
4. 黒褐色シルト（古墳時代以前の土器含む）
5. 黄褐色土混じり褐色色土（古墳時代以前の土器含む）

8. 土層図 (1/80)



9. 出土遺物実測図（土器1/4、石器1/1）

6.まとめ

今回の調査区は遺跡の西縁辺という印象を受ける。よって、遺跡の中心は現在包蔵地範囲外となっているが、本調査区よりも東の丘陵上にある可能性が高い。

08は調査区南部の谷頭付近とみられる位置で検出された弥生時代後期後半の比較的大きな柱穴である。このようないびきは近在するカルメル修道院内遺跡の墓域に伴う「木柱」と規模などが類似しており注目される。甕棺など特殊な遺物は出土していないが、甕棺葬が激減する弥生時代後期後半の墓域が調査地点周辺に存在するかもしれない。

一方、包含層の遺物は弥生時代中期後半と古墳時代後期後半にピークがある。調査地点の東の丘陵上を中心として当該期の小規模な集落が存在していたと考えられる。

0851 蒲田水ヶ元遺跡第3次調査 (KMT-3)

所 在 地 東区蒲田3丁目203番1外

調査面積 1236.7m² (総1590m²のうち)

調査原因 倉庫建設

担当者 加藤 良彦

調査期間 2008.12.15～2009.4.30

処置 記録保存

位置と環境

遺跡は福岡市の南東部、粕屋平野の奥部に位置し、東から張り出した低丘陵の先端部に位置する。調査地は九州縱貫道を挟んで弥生時代中期・後期集落と環濠・中期甕棺墓群・古墳時代集落を検出した第1次調査区と対位置の遺跡北西端部に立地する。標高は約18mである。GL-40cmの黄褐色シルト上面で主に弥生・古墳時代遺構を、一部黄褐色シルト中で繩文中期・後期の遺構を検出した。

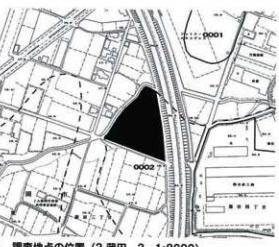
検出遺構

検出した遺構は北館を墓域の中心として、弥生中期初頭～中期後半の甕棺墓30基・祭祀土坑1基・後期の甕棺墓1基・前期を含む可能性があるが、後期を中心とした木棺墓21基・土坑墓38基、終末～古墳初頭の箱式石棺墓2基を、南部を中心に繩文時代後期土坑8基・堅穴住居2棟・中期土坑10基・堅穴住居6棟・溝3条、古墳時代前期土坑9基・堅穴住居15棟・溝7条、古墳時代後期土坑2基・堅穴住居12棟を検出。他に時期不詳土坑91基・集石3基を検出した。木棺墓は箱式と削竹式・小口に板を挿入する3タイプがある。土坑墓は赤色顔料3基・蓋を1基副葬する。箱式石棺は1基内面に赤色顔料を塗布する。

出土遺物

出土遺物は繩文土器、弥生土器、土師器などコンテナケース193箱である。古墳後期の焼土坑からは新羅焼の壺1個体を検出した。周辺に大型の柱穴が多くあり、大型建物を伴う可能性がある。

報告書は2010年度刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (2蒲田 2 1:8000)



2. 調査区全貌 (北から)



3. 繩文後期住居跡 (東から)

0852 浜の町貝塚第1次調査 (HMS-1)

所在 地 中央区舞鶴3丁目88

調査原因 警固断層トレンチ調査事業

調査期間 2008.12.9

調査面積 約3m²

担当者 吉留 秀敏 星野 恵美

処置 記録保存

1. 位置と環境

現地は博多漁港に近い港湾部の都心であり、周囲には中層のビル群が林立している。福岡城の北約400mに位置し、江戸初期の城下造営に伴う埋め立てまでは、種井川河口東側の汀線に近い位置であったと考えられる。現在は埋め立てや開発により、海岸線からは約600m離れている。遺跡の発見位置は浜の町公園内の北側であり、現地表の標高は約2.2mを測る。

2. 調査の経過

2008年12月8日に福岡市史編纂室から福岡市中央区舞鶴3丁目浜の町公園において、防災対策に係る警固断層トレンチ調査事業に際して貝層と黒曜石片の出土があったとの報告を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、至急現場に出向き観察したところ、縄文時代貝塚遺跡の可能性が考えられた。このため文化財保護法第97条1項に係る不時発見の対応が必要となり、緊急に事業主体である福岡市市民局生活安全・危機対策部防災・危機管理課との調整協議を行った。事業範囲は28.8m²程度の小範囲であったが、掘削残存部に一部貝層の露出があり、今後の調査壁解体時に伴い破壊が懸念された。既に12月9日には埋め戻しが予定されていたが、同日の午前中を用いて、緊急の発掘調査を実施することとなった。

3. 現況

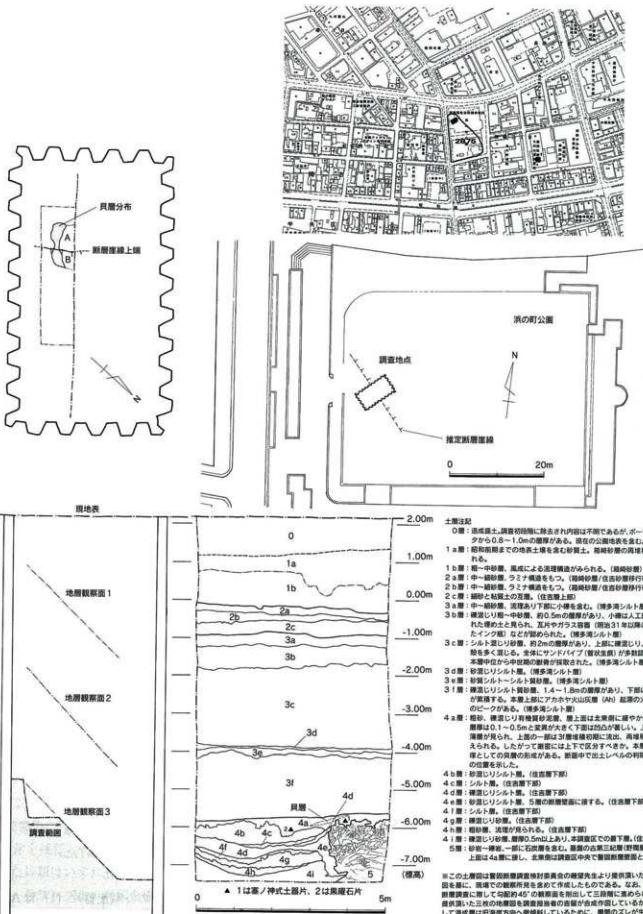
発見の契機は警固断層調査用試掘ビットである。この調査の目的は今後の防災に関する情報収集であり、警固断層活動期の特定のための地質学的調査であった。調査地点は過去のボーリング成果に基づき位置が決められたものである。ビット範囲は東西約2m、南北約4mの範囲であり、四面を鋼矢板で仕切られ、遺跡確認時点で地表下約9mまで掘り下げられていた。確認段階で範囲内の約半分が既にGL - 6.5mの博多湾シルト層中位まで除去されており、それより下位地層についてもビット南側に地層観察用に斜面が削り残されていたに過ぎない。

緊急の発掘調査は、壁面に残された貝塚部分を対象とした。まず人力により博多湾シルト層を除去し、その下位に分布する貝層を露出し、分布状態や構造としての調査、遺物の取り上げを実施した。

4. 貝層の観察記録

貝層上位の堆積状況は複雑である。ビット内の西側では標高約-6.0mで基盤層である古第三紀砂岩層（野間層）が現れ、断層のすぐにより大きく隆起している。断層より東側には既成（淡水性）の住吉層群が堆積する。この層にはより上位の博多湾シルト層から達する甲殻類生痕が多数認められた。住吉層群上面は凹凸がある。この凹凸面上に厚さ10~50cmの疊混じり有機質砂泥層（4a層）が堆積する。この砂泥層は緩く北東に下がり、一辺20cm以下の基盤層起源の砂岩や变成岩による転落の少ない角礁を含んでいる。貝層以上の砂泥層の中位に形成され、その上面も北東に緩く下がっている。貝層は厚さ10~20cm程度であり、検出面で標高-5.8~-6.0mである。貝層下半部には砂礫と貝類の混在が見られる。貝層上半部は全体に堅い泥質である。貝層中には植物遺物も含まれ、貝類の風化は進み著しく多い。しかし埋没状況では貝殻は原形を保っており、表面も新鮮で風化が少ないものの、取り上げると崩壊するものが多い。こうした状況からみて貝殻の埋没に至る二次的な移動は少ないと考えられる。貝層の西側上部は「博多湾シルト層」と呼ばれる厚い疊混じりシルト質砂層（3層）が接する。この部分は海蝕などにより浸食を受けたと推定され、その関係は不整合をなす。なお地質調査では、貝層上面より約1.0~1.5m上位の博多湾シルト層（3層）中がアカホヤや山灰層のブーケ値の位置である。

貝層の平面的分布は断層ラインに直交して延びる東西の楕円形をなし、東西約1.5m、南北0.5m以上の範囲に限定



1. 浜の町貝塚の位置と調査平面図、土壌断面図 (1/8000, 1/800, 1/100)



2. 調査区全景(北東から)



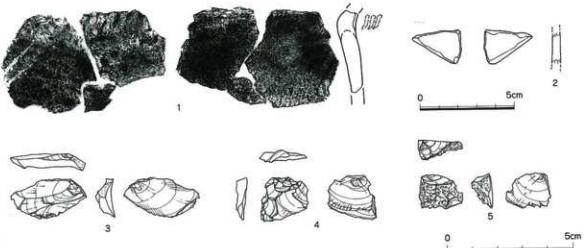
3. 貝層検出状況(北西から)



4. 貝層及び周辺土層(合成画像、北西から)



5. 墓ノ神式土器片出土状況(北から)



6. 出土遺物(1/2, 2/3)

される。南側には展開しないが、北側への広がりは、断層露出の際に重機で除去されたため不明である。なお、精円形の分布も貝類の密集状態で東西2群に区分された。西側をA群、東側をB群として貝類を取り上げた。

5. 出土遺物

貝層(44層)から出土した人工遺物は土器片2点と黒曜石不定形剥片3点がある。このうち土器片(1)はA群貝層の下部であり、砂礫層からの出土である。土器片(2)と黒曜石製片(5)は貝層A群の水洗により出土した。事前に発見された黒曜石剥片のうち1点(3)は貝層下部(断面採集)、もう1点(4)はサンプル貝層中からの出土

であった。

1は土器片であり、器壁0.7cmで内外面共に黒褐色の色調を呈する。深鉢形土器の上部の屈曲部破片である。外面に炭化物が厚く付着している。外面は貝殻調整後ナテア後、頭部に貝殻腹縫の刺突、胴部に沈線を施す。内面はナテ調整と見られる。器形や文様の特徴から縄文時代早期後業の「墓ノ神III(Bb)式」土器と推定される。2は土器小片であり、器壁0.5cmで器面は風化している。剥片は何れも黒曜石製であり、漆黒色不透明黒色の黒曜石である。表面は平坦で、僅かに白色不純物を含む。表面の風化は少なく、新鮮でややぎらつき感がある。二次的な傷や擦痕、ガジリなどは認められない。肉眼観察であるが、伊万里市腰岳産黒曜石に類似する。3は、調整打面をもつ横長剥片であり、僅かに微細剝離がある。4は、小型平坦打面で調整剥片か。5は自然面を残す不定形の碎片である。

自然遺物としては、次章以降で詳細を示す。なお、植物遺物の中には焦げ目のある木片があった。

また、貝層より上部の博多湾シルト層上部(3c層)から牛の下顎骨1点が採取されており、中世段階と推定された。これについても後述する。

6. 浜の町貝塚出土の自然遺物

浜の町貝塚の自然遺物は採取された土層サンプルの水洗選別によって確認したものである。土層サンプルは立会調査以前に採取されたものが20.76kg、(内、小石等の石材5.75kgが含まれる。以下、石材はカッコ内の重量で示す。)断面清掃中に採取されたサンプル9.6kg(1.4kg)、A群(貝層)から採取されたサンプル28.49kg(1.67kg)、B群(貝層の下の層)から採取された9.98kg(3.12kg)、その他土層とされたサンプル7.2kg(0.2kg)の計76.03kg(12.14kg)がある。これらのサンプルから検出した自然遺物には貝類、魚骨、植物遺体がある。以下、それぞれについて詳述する。

A 貝類

いずれも保存状態が悪く全形を保つものは少ない。以下に示す腹足綱4種、斧足綱6種の計10種を確認した。

1. スガイ *Lumelria coronata* (Gmelin)
2. カワニナ *Semisulcospira bensonii* (Philippi)
3. ヘナタリ *Cerithideaopilla cingulata* (Gmelin)
4. ウミニナ *Batillaria multiformis* (Lischke)
5. ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linne)
6. マガキ *Crassostrea gigas* (Thunberg)
7. ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime
8. オキシジミ *Cyclina sinensis* (Gmelin)
9. シオフキ *Mactra veneriformis* Reeve
10. マテガイ *Solen strictus* Gould

次に各サンプルにおける貝類の構成比についてみてみよう。なお、個体数の算出にあたっては殻頂部で左右殻に分け、数の多い方を個体数とした。各サンプルにおける構成比は第1表に示したとおりである。

事前採取サンプルでは16個体の貝類を確認した。腹足綱6個体、斧足綱10個体で数は少ない。清掃中サンプルでは48個体の貝類を確認した。腹足綱4個体、斧足綱44個体である。個体数は多く、特にマガキは32個体66.67%を占めている。A群サンプルは本来の貝層の構成を示すものであるが、27個体と貝類の数は少ない。腹足綱4個体、斧足綱23個体で、主体を占めるのはハイガイ、マガキ、オキシジミ等の内湾砂泥性貝類である。B群サンプルには、わずか2個体の貝類が存在するに過ぎない。貝類は上層から混入した可能性が強い。土層サンプルには比較的貝類が多く、36個体を確認した。腹足綱9個体、斧足綱27個体、貝類の出現傾向はA群サンプルに近い。以上のサンプルからえられた貝類はいずれも内湾砂泥性貝類が主体を占めていて、いずれの貝類も、A群に存在した貝類と考えることができる。各サンプルの貝類を集計した全体の貝類構成は次のようになり、最もこの貝塚の貝類構成を示すものと考えられる。確認した貝類は129個体、このうち腹足綱は23個体、斧足綱106個体である。主体を占めるのはマガキで53個体、41.09%を占め、ついで、オキシジミの31個体、24.03%、ハイガイの17個体、13.18%と続く。いずれも内湾砂

泥性貝類である。ただし、スガイ等の岩礁性貝類やヤマトシジミ、カワニナ等の汽水、淡水産貝類もわずかに認められる。

B) 魚類

魚骨は脊椎骨1点を確認したに過ぎない。タイ類の腹椎骨、椎高8.0mm、椎径6.4mmで中型の大きさである。

C) 植物遺体

植物遺体は各サンプルに認められる。植物遺体の大部分は小枝や樹皮であるが、少量であるが種子類を含んでいる。出土量は乾燥重量で、種子名と共に第1表に示した。

事前サンプルの植物遺存体は19.832g。種子はサンショウ3、ヤマブドウ2、カヤ2、不明種2がある。清掃中サンプルの植物遺存体は14.063g。種子は確認できない。A群サンプルの植物遺存体は157.846g、サンプル中で最も多い。種子はクルミ9、サンショウ3、カヤ1、ドングリ類3、不明種7がある。B群サンプルの植物遺存体は23.747g。種子はサンショウ4、ヤマブドウ1がある。土層サンプルの植物遺存体は6.998g。種子はクルミ1、ヤマブドウ2、カヤ1、不明種1がある。

まとめ

貝類をはじめとする自然遺物は上記したように極めて量が少ない。植物遺存体は前述したように小枝や樹皮が主体を占め、一部に材を含んでいるが人為的な加工痕等は見られず、湿地に流れ込んだような状態を示している。ただし種子類はクルミ、ヤマブドウ、ドングリ類、サンショウなど食料や調味料に利用できるものが多いことは注意する必要があろう。貝類はこの湿地に投棄されたもので貝塚とするよりも、貝のブロック層であるが、調査区が限定され、狭いことから詳細は明らかにできない。貝塚である場合はその縁辺部にあたっている可能性がある。貝類の採集地は主体を占める貝類が内湾砂泥地であることから、内湾の砂泥地が考えられるが、マガキが多く、汽水産のヤマトシジミや淡水産のカワニナの存在を考慮すると近くに大河川が流入していたと見られる。(山崎純男)

第1表 沢の町貝塚自然遺物構成比表

サンプル名	事前サンプル		清掃中サンプル		A群サンプル		B群サンプル		土層サンプル		全体		
	(身)	バ屈	(身)	バ屈	(身)	バ屈	(身)	バ屈	(身)	バ屈	(身)	バ屈	
種子類	5	31.25	1	1	2.08	3	3	11.11	4	4	11.11	13.10	
スガイ ヘナリ類 ウニ類	2	2	2	4.17					2	1.55			
カワニナ	1	1	1	2.16	1	1	3.70		4	4	11.11	6.485	
小計	1	1	6.25						1	2.78	2	1.55	
	8	37.50			4	8.23		14.81	9	25.00	23	17.83	
ハイガイ マガキ	1	1	6.25	1	3	3.25	3	7	25.83	1	1	50.00	
ヤマトシジミ オキナリ類 シオコチ マダガイ	7	7	43.75	8	32	68.67	3	7	25.93	1	1	50.00	
小計	2	1	2	12.50						1	2.78	3	2.33
					7	4	7	14.58	5	9	9	33.33	
									14	15	15	41.67	
											1	0.78	
												0.78	
小計	10	83.00	44	91.66		22	26.11		2	100.00	27	75.01	
計	16	100.00	48	99.99		27	100.00		2	100.00	36	100.01	
總 遺存体(g)	19.832		14.063		157.846		23.747		6.998		222.486		
種子					クルミ9・カヤ1・ドングリ3・サンショウ3・不明7		ブドウ1・サンショウ4		クルミ1・カヤ1・ブドウ2・不明1				
サンショウ3・ブドウ2・カヤ2・不明2			—										

7. 博多湾シルト層中出土の歯骨について

今回の警固断層調査中に動物遺存体が1点採取された。出土地点は現地表面からの深さ約5mの博多湾シルト層(3c層)中で、警固断層調査検討委員会による周辺採取資料のC14年代からは、BP1000~800年頃と推定される。

動物遺存体はウシの下顎で咬筋窓から近位側の下顎枝が欠損している。表面は劣化が少なく比較的良好な状態であることや、舌側にわずかに刺胞動物のものと思われる痕跡が付着していることから早い段階で海中に没し、その後しばらくは埋もれずに海底に露出していたと思われる。

歯はP2からM3までの臼歯がすべて遺存する。歯冠高はM2・M3が歯冠の根本が下顎から出ておらず不明であるが、

P3・P4が2cm前後、M1が3cm弱と咬耗が進んでおり、老熟に近い個体である。骨の表面に数枚の擦痕がみられる。ほとんどの調査時にいた傷であるが、溝状の窪みの中まで周囲と同様に変色し線が摩耗した擦痕については、解体痕の可能性が高い。出土位置は標高-3m付近で、深さ2~3m前後の浅い海底であったと考えられる。堆積は細かなシルト質で約1m下層からタイラギが自然死した状態で出土している。

出土地点が当時の海岸線からどれくらい離れていたかは不明であるが、出土状況からは解体後海中に廃棄された可能性が高く、今回の調査地点より陸地側には廃棄された動物遺存体やその他の遺物が遺存している可能性がある。今回のトレンチの更に下層からは繩文早期に遡る可能性があるカキ等の集積も出土したため、今後は南側台地との間は発掘調査の対象とすることが必要と思われる。(屋山洋)

下顎計測値(計測場所は左図の番号による)

(7) 14.88cm、(8) 9.48cm、(9) 5.5cm、(11) 7.4cm、
(15a) 7.95cm、(15b) 5.64cm、(15c) 3.81cm

計測法は A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES による。

参考資料

福岡市警固断層調査検討委員会2009「警固断層に関する調査報告書」福岡市

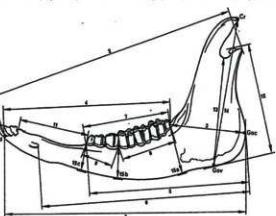


Figure 21a: *Rex mandible, left side, lateral view.*

8. まとめ

本遺跡は標高約-6mで発見された繩文早期の貝塚遺跡である。調査面積は限られ、かつ破壊から免れた貝層も僅かであり、小プロック状をなす。出土遺物には、土器片、黒曜石片と貝類、堅果・種子類等があるが、何れも少量である。出土土器は塞ノ神II(Bb)式であり、繩文時代早期後業に位置づけられる。貝類から見ると河口ではなく、砂泥質の浅瀬の内湾に面した立地環境が予測され、クルミなどの存在から現在よりやや寒涼な環境であったとみられる。同様の遺跡としては標高-10mで発見された繩文早期中業の愛知県先荘貝塚や、標高0~2mで発見された繩文早期後~末業の佐賀県東名貝塚などがあり、いずれも繩文海進以前の遺跡と理解できる。小規模な調査であったが、古環境の復元や、気候、海水面変動などを検討する上でも貴重な成果となった。なお、遺跡の上部は埋没後の海進による海蝕で平坦化しており、さらにその後甲殻類の生痕(巣穴)で侵食されている。しかし、出土した貝殻や黒曜石などの観察から見て、この貝層が再堆積などの二次的移動したとは考え難く、ほぼ原位置を保っていたと判断できる。貝塚の形成された位置は警固断層の活動により現れた1m前後の段差斜面であり、東側低地部の埋没過程中に貝塚(貝プロック)が形成されたと推定できる。貝層を含め東側は湿地の様相を示し、集落等の生活域は斜面上から西側にあつたと考えられる。

本調査の実施にあたっては、福岡市民局生活安全危機対策部防災・危機管理課のご理解と協力にお礼申し上げたい。また、西南学院大学磯原先生、九州大学下山正一先生には多くの教示や資料の提供を頂いた。福岡市博物館学芸課、市史編纂室には資料提供などのご協力を頂いた。自然遺物の分析には山崎純男氏、遠部慎氏、畠山智史氏、屋山洋氏にご苦労頂いた。併せてここに厚く感謝申し上げます。また降雨の中、危険な超深度の緊急調査に参加頂いた菅波正人、長家伸、榎本義嗣、屋山洋、加藤隆也、久住猛雄、木下博文の各氏には芳名を記して感謝したい。(吉留秀敏・星野惠美)

9. (寄稿) 浜の町貝塚出土資料の自然科学分析

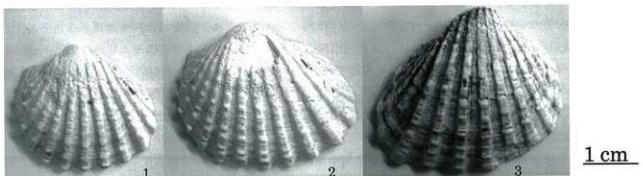
今回、分析した資料は福岡市教育委員会から遠部・畠山が提供をうけた5点である。その内訳は、土器付着炭化物1点、クルミ1点、ハイガイ3点である。

土器は、破片では5枚出しと、そのうち3枚片は接合した。これらは同一個体と考えられる。口縁部は欠落するものの、頸部が屈曲することから外反するものと考えられる。内外面ともナデ調整。外面の頸部には貝殻復縫と考えられる指突を施し、胸部に沈線を施す。内面の稜も比較的明瞭で沈線を区画していないことから、塞ノ神豆式(Bd式)中段階に該当する可能性が高い(桑畑2009・高橋1997)。このうち、外面に付着した煤上炭化物を年代測定対象資料とした。炭化種子はクルミと判断される。貝類の年代測定用資料はハイガイを選択し、加藤(2000)や富岡(2003)の手順に従って、計画を行い(第2表)、成長線分析もあわせて行った。

貝殻成長線分析は、小池の方法(Koike1973)を基にブレーラートを作製し、切断面を観察して行った。ハイガイの切断面は、モザイク状に変成し、成長線の一部が消失しており、分析を行った2点(K1, K3)は、観察不可能な状態であった。

ハイガイなどのAnadara属は、熟成を受けやすい種である(小池1981)。採集時期が推定されたK2の成長線も一部、消失している可能性もあり、その採集時期も若干のズレが含むことが示唆されるため、今回は報告だけに留めたい。

比較的良好な保存状態であったHM02は、満2歳の個体であった。最終冬輪から腹縁まで74本の成長線が計数出来たことから、HM02は、春季後半(4月29日前後)に採集された個体と考えられる。



第1図 分析を行った浜の町貝塚出土ハイガイ

第2表 分析を行った浜の町貝塚出土ハイガイの計測値

番号	種名	L	R	殻長	殻高	殻厚	背開長	重量	肋数
K1	ハイガイ	L	25.14	22.62	9.59	16.08	1.50	16	
K2	ハイガイ	L	36.02	35.00	13.12	24.28	3.90	17	
K3	ハイガイ	R	39.41	33.81	16.06	[23.13]	9.22	16	

単位はmm、重量はg。[]は残存値を示す。

試料については、以下の手順で、年代測定の試料処理を行った。

まず、試料を半分に截断し、そのうち一方から貝が死する直前に形成される外縁部の試料を使用した。表面に付着した土壌を超音波洗浄し、1Mの塩酸で溶解させ、炭酸塩や土壤埋没前/後に沈着する不純物を除去した。これらの作業は、北海道大学大学院環境科学系(海洋生物生産環境学コース)において遠部が行った。

エッチングを行なった試料を錫製カップに秤量し、二重管で燐酸反応させ、燃焼して酸化された気体を真空ラインに導き、液体窒素および冷却エタノールなどの冷媒を用いて精製した二酸化炭素を鉄粉とともに水素ガスと封入し、10時間600°Cにて加熱しグラファイト化し、AI製のターゲットホルダーに充填し、加速器質量分析(AMS)用試料

第3表 試料の重量

試料番号	採取量	処理量	回収量	回収/処理	前処理後	燃焼量	ガス	炭素含有率
FUFUH-1	23	23	6.56	28.5%	良	4.00	2.20	55.0%
FUFUH-C1	3	3	1.21	40.3%	良	4.00	2.20	55.0%
FUFUH-K1	72	72	9.13	12.7%	良	8.90	2.39	26.9%
FUFUH-K2	33	33	1.79	5.4%	良	4.00	2.20	55.0%
FUFUH-K3	124	124	13.83	11.2%	良	3.70	0.32	8.6%

採取量・処理量・回収量・燃焼量は、炭化物の重量(mg)、ガスは二酸化炭素の炭素相当量(mg)、半%は回収量/処理量(%)、炭素含有率はガス/燃焼量(%)

第4表 浜ノ町貝塚の炭素14年代(BP)と曆年較正年代(Cal BC)

試料番号	測定機関番号	^{14}C 炭素年代(BP)	曆年較正年代(Cal BC)		確率分布(%)	
			$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	(BP)		
PLD-14052	(-24.91±0.13)	7440 ± 30	6350	-6240	95.4%	
PLD-14053	(-28.91±0.17)	7310 ± 30	6840	-6900	95.4%	
G1	PLD-14054	(-1.91±0.13)	7620 ± 25	6480	-6430	95.4%
(Marine)				6370	-6090	95.4%
K2	PLD-14055	(-2.63±0.19)	7805 ± 30	6485	-6420	95.4%
(Marine)				6360	-6070	95.4%
K3	PLD-14056	(-5.98±0.14)	7620 ± 30	6560	-6550	0.8%
(Marine)				6505	-6425	95.3%
				6370	-6085	95.4%

とした。AMSによる ^{14}C 測定は、貝殻試料は同時に調製した標準試料とともに、バレオ・ラボのタンデム加速器施設(機関番号PLD)で行った。実験の過程については表2に示す。

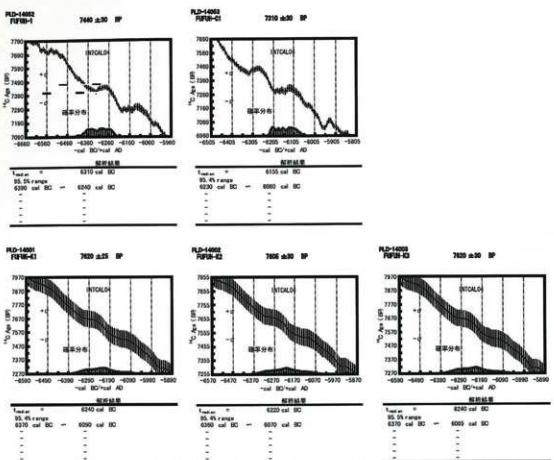
測定結果は、次に示す方法で、同位体効果を補正し ^{14}C 年代、較正年代を算出した。

年代データの14CBPという表示は、西暦1500年を基準にして計算した14C年代(モデル年代)であることを示す。14C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の14C/12C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した13C/12C比により、14C/12C比に対する同位体効果を調べ補正する。13C/12C比は、標準物質(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの13C/12C比)に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル、‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる14C/12C比によって補正する。補正した14C/12C比から、14C年代値(モデル年代)が得られる。

表3に測定結果を示すが、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は、すべて加速器による同位体効果補正のための測定であり、試料自体の正確な値とは言えない。表には参考値として()で記しておく。また、貝殻試料の場合は、測定対象となる炭酸塩の多くを海水に溶存する無機炭素から取り込んでいるため、木炭などの大気と同位体平衡になっている資料と比較するために補正が必要となる。海水の場合、海水が深層を約2000年かけてゆっくりと循環している間に、 ^{14}C 供給源である大気上層から遮断されたために深層水で ^{14}C 濃度が少なり、それが表層水と混合して ^{14}C 濃度が平均で約400年古くなることが知られている。これを「海洋リザーバー効果」(Stuiver et al. 1986)といい、外洋に面した岩礁性のエリアに生息するハイガイ等はこれを考慮しなくてはならない。海洋リザーバー効果には大きな地盤差があり、本来ならばそれも補正値に加えねばならない。しかし、日本列島沿岸での海洋リザーバー効果の正確な見積りは未だ予備的な段階である(Yoneda et al. 2000)。ここでは、西日本における ^{14}C 濃度が海洋の平均とほぼ等しいと仮定して ^{14}C 年代の較正を試み、海洋資料用のデータ(Marine98: Stuiver et al. 1998)を用いて較正 ^{14}C 年代(実年代)を推定することにした。海洋リザーバーを考慮しない資料(%)については、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCAL(OxCal Programに準じた方法)を用いていた(今村2007)。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。()内は推定確率である。

今回の測定では得られた年代値は、土器付着炭化物であるFKFKH-1と炭化物(クルミ)であるFKFKH-C1が、



第2図 浜の町貝塚年代測定試料の較正年代



第3図 浜の町貝塚の炭素14歳測定値（較正年代）

7440 ± 30、7310 ± 30BPであるのに対し、海洋性の貝類であるFKFKH-K1.2が7620 ± 25、7605 ± 30、7620 ± 30BPである。確実な陸上起源のクルミと貝類が300BP程度ずれていることは、櫛田貝塚（山下ほか2007）や東名貝塚（中村2008）などの状況と類似することを示す。

これまで、塞ノ神式（III式）のデータとしては、大分県久重町拓郷遺跡の7085 ± 45BP（MTC-09135：遠部・宮田2007：AAA処理）や、城ヶ尾遺跡（古環境研究所2003：A処理のみ）や三角山I遺跡での測定例（山形2004：A処理のみ）などの測定例がある。これらと、FKFKH-1やC1は整合的と判断され、本遺跡の貝類の年代は、塞ノ神式段階の単純な貝塚と評価出来ることになる。そのような観点で捉えた場合、本遺跡のハイガイの測定値は6400-6100calBC（7600BP）の範囲にまとまることは注目される（第3図）。こうした測定値は、これまで北部九州では、早期後半の貝塚としては、東名遺跡が知られる（貝類のハイガイ R-uncorrected date, 豊前ハイガイ MARINECAL, ■：土器付着物、■：炭化材）が、塞ノ神式（III・IV式）から織にかけての土器が確認されている。東名遺跡では塞ノ

神式は主体ではない。東名遺跡で確認されていた貝塚の測定値（ハイガイの場合7440 ± 35BP、カキの場合7540 ± 35BP）より遅るものであり、現時点での北部九州におけるAMS年代測定の実施された繩文時代貝塚の中では、最古段階の貝塚であることを意味する。

まとめ

以上、福岡市浜の町貝塚の炭素14歳測定を行った。その結果を受け、北部九州における海産性貝類のまとまった貝塚としては、最古段階であることを指摘した。繩文時代早期後半のデータは全国的に少なく（小林2007）、九州地方の繩文時代早期後半の貝塚については、これまで予備的なデータが多く（坂田1980）、出土地点や調査区の明らかなデータが少ない。そうした中において、浜の町貝塚は発掘調査を経て得られた貴重なデータであり、今後、繩文時代早期の海産資源利用の年代的な定点を考えるうえで、重要な定点となる測定値となる。分析の機会をえていたいた北北海道大学大学院環境科学院門谷茂先生、工藤歎先生、関連する情報をご教示いただいた桑畠光博、山崎真治氏に感謝したい。

引文文献

- 遠部慎・宮田佳樹2008「大分県久重町拓郷遺跡出土土器の炭素14歳測定」『九重町歴史資料館年報2008』、pp.17-22、九重町教育委員会
- 加藤久雄2005「ハイガイのサイズ標準法」『西海考古』6号、pp.29-36、西海考古同人会
- 桑畠光博2009「考古資料からみた桜島IIテフラの噴出時期と影響」『南の國の考古・地域文化論考（上）』pp.97-110、南九州繩文研究会・新東見一代表選舉記念論文刊行会
- 小池裕子1981「貝類の分析」『伊豆貝塚遺跡文書』pp.607-615、日本電信電話公社・港区伊豆貝塚遺跡調査会
- 古環境研究所2003「平成14年度放射性炭素年代測定」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（60）城ヶ尾遺跡』pp.130-131、鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 小林謙一2007「AMS炭素14歳測定を利用した東日本縄文時代前半期の年代研究 平成17年～18年度科学費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書（調査番号：17520529）」国立歴史民俗博物館
- 坂田邦彦1980「別府考古学研究報告第2編 1°C年代からみた九州地方繩文時代の編年」広雅堂
- 高橋信武1997「平治式土器・塞ノ神式土器」「先史・考古学論究」pp.1-38、龍田考古会
- 富岡直人2003「平成度成長線分析」『環境考古学ニユアル』pp.237-250、同成社
- 畠山智史・富岡直人・若松泰史・田嶋正恵2008「完新世における日本近海ハイガイの成長速度の多様性」『日本文化科学会第23回大会』pp.168-169、日本文化科学会
- 中村俊夫2008「東名遺跡の年代－科学的な方法で年代を探る－」「有明の海と繩文人－東名遺跡が語るもの－」pp.24-25、佐賀県教育委員会
- 山形秀樹2004「平成14年度放射性炭素年代測定」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（63）三角山遺跡群（2）（三角山II・III・IV遺跡）』pp.130-131、鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 山下勝年・坂野俊哉・増子康典・中村俊夫2007「福岡貝塚の14C年代と較正年代の結果について」
- 東海繩文研究会第5回研究会（愛知）「人海式をめぐる諸問題」p.50、東海繩文研究会
- Koike, H. (1973) Daily growth lines of the clam, *Merixis lusoria* – A basic study for the estimation of prehistoric seasonal gathering. Journal of Anthropological Society of Nippon, 81:122-130. [人海式雑誌 81] : pp.122-130
- Reimer, Paula J. et al 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46 (3), 1029-1058 (30).
- Stuiver, M., G. W. Pearson & T. Braziunas (1986). Radiocarbon age calibration of marine samples back to 9000 cal yr BP. Radiocarbon 28, 980-1021.
- Stuiver, M., P.J. Reimer, and T.F. Braziunas (1988a). High-precision radiocarbon age calibration for terrestrial and marine samples. Radiocarbon 40, 1127-1151.
- Stuiver, M., P.J. Reimer, E. Bard, J.W. Beck, G.S. Burr, K.A. Hughen, B. Kromer, G. McCormac, J. Van der Plicht, and M. Spurk (1998b). IntCal98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40, 1041-1083.
- Yoneda, M., H. Kitagawa, J.v.d. Plicht, M. Uchida, A. Tanaka, T. Uehiro, Y. Shibata, M. Morita, and T. Ohno (2000). Pre-bomb marine reservoir ages in the western north Pacific: Preliminary result on Kyoto University collection. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 172, 377-381.
- Yoneda, M., Y. Shibata, A. Tanaka, T. Uehiro, M. Morita, M. Uchida, C. Kobayashi, C. Kobayashi, R. Suzuki and K. Miyamoto (2004). AMS ¹⁴C measurement and preparative techniques at NIES-TERRA. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223/224, 116-123.

（達部慎：北海道大学埋蔵文化財調査室・畠山智史：岡山理科大学大学院）

0853 比恵遺跡群第117次調査 (HIE-117)

所在地 博多区博多駅南3丁目34番 調査面積 386.6m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 松本義嗣
 調査期間 2009.1.8~3.11 処置 記録保存

位置と環境 比恵遺跡群は、福岡平野を北流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積段丘上に展開する遺跡で、この段丘はAso-4火砕流による下層の八女粘土、上層の鳥栖ロームを主な堆積物とする。

調査地点は、本遺跡の北台地北東部に立地し、調査区西側には北西方向より谷が開析する。地山は東側の台地上では鳥栖ロームであるが、谷側では八女粘土が露出し、その標高は3.2~4.4mを測る。また、谷部には弥生時代前期から中期前半の遺物を含む黒褐色の有機質土が堆積していた。

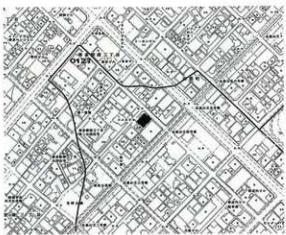
検出遺構 検出した主な遺構は、弥生時代中期初頭から中頃の堅穴住居1軒、掘立柱建物2棟、土坑数基である。

1辺約3.5mを測る堅穴住居は、尾根側に位置するため、壁面が大きく削平を受ける。掘立柱建物2棟は共に1×1間の規模で、台地際の等高線に沿って建てられる。柱穴同士の切り合いはないが、柱筋が重複する。このうち、SB004としたものは、円形プランの柱穴を主体とし、柱間は2.6mである。また、SB005とした建物は、隅丸方形の柱穴で梁間2.6m、桁行3.3mを測る。土坑には、底面に自然木片や未分解の植物繊維が堆積するものがあり、板材が少量含まれる。谷部は東側斜面に相当し、その谷頭は第24次調査区付近にある。

出土遺物 弥生時代前期後半から中期前半の弥生土器を主体に大型蛤刃石斧や土製按鉄、石製錘鍬、黒曜石製石鏃等がコンテナケースにして8箱出土した。

まとめ 弥生時代中期の比較的短時間に営まれた集落の一部を確認することができた。周辺の調査では、弥生時代前期から集落が形成されることが判明しており、集落の消長や構造を考察する上で貴重な資料となる。また、把握できた微地形も集落景観を復元する上で良好な材料となる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



3. 土坑土層堆積状況 (西から)

0854 那珂遺跡群第123次調査 (NAK-123)

所在地 博多区東光寺1丁目131他 調査面積 652.8m²
 調査原因 店舗建設 担当者 本田浩二郎
 調査期間 2009.1.16~2009.3.10 処置 記録保存

位置と環境 那珂遺跡群第123次調査地点は、那珂遺跡群北端部付近に位置している。

検出遺構 調査では弥生時代中期後半の甕棺墓を初現として、弥生時代終末期の井戸、古代の区画溝、中世の井戸、堅穴土坑などの遺構を検出した。甕棺墓は成人棺3基・小児棺2基が検出されたが、いずれも大きく削平を受けていたため下蓋の下半部のみが残存するのみである。甕棺墓は列状に検出されるが、主軸方向の異なる2群に分けられたため、断続的に墓域が営まれたことが分かる。溝遺構は4条確認された。遺物より7世紀代後半の時期と考えられる。この溝に直交する形で南北方向の溝が2条確認された。この2条の溝は約20m程度の幅を測り、何らかの施設を画した区画溝と考えられる。

中世の井戸は直径2mの掘方を持ち、掘方の東側に偏って部位に結構3個を転用した井筒を据えている。結構は1組22~23枚の板材を使用し、3箇所に竹皮帶で結び上げる。最上段の掘方は上端部が破損するものの下半部は良好に遺存していた。他の井戸は素掘りで直径70cm程度を測る。この井戸内から水汲みに使用されたと考えられる手桶が完形で出土した。他の中世の遺構として銅鏡17枚が一括埋納された土坑などが検出された。

出土遺物 遺物は弥生土器・須恵器・土師器・青磁や白磁などの貿易陶器・石斧などの石器・銅鏡・木製品などをコンテナケース16箱分出土した。

まとめ 今回の調査成果より弥生時代の甕棺墓域が遺跡群端部付近まで展開していることや古代に計画的な区画溝が存在していたことが確認された。また、中世前半期に博多と大宰府を結ぶルート上に駅家的な役割を持つ屋敷地等が存在していたことを示す重要な知見を得ることができた。

報告書は2009年度に刊行予定である。



3. 中世井戸井筒様出状況 (南から)

0855 大塚遺跡第17次調査 (OTS-17)

所在地 西区今宿町340ほか

調査面積 3900m² (総面積5200m²)

調査原因 土地区画整理

担当者 森本幹彦

調査期間 2009.11.13～2009.8.19

処置 記録保存

位置と環境 調査区は福岡市西部の今宿平野にあり、高祖山より派生する標高約6.5～8mの低丘陵地（高位段丘面）に立地する。現況は畑地で、北に13次調査地点（平成19年度）、南に16次調査地点（平成20年度）と国史跡の今宿大塚古墳がある。

検出遺構 遺構は中世末（16世紀）を中心とする柱穴、土坑、井戸、溝（濠）などを検出している。一部遺構面の削割が著しいが、遺構密度は比較的高い。溝や橋で略方形に区画された屋敷地が調査区内だけでも10基前後あることが明らかになった。屋敷地は概ね長軸20m前後、短軸12m前後であるが、丘陵上の立地により平面プランにやや偏差がみられる。建物は主に掘立柱建物で、柱穴の一部には楓石が用いられている。丘陵中央付近の屋敷地が他よりやや規模が大きく、石組井戸もみられる。古代以前の遺構は非常に少ないが、平安時代後半の木棺墓、奈良時代前後の焼土坑6基、古墳時代中期前半頃とみられる堅穴住居が検出された。

出土遺物 遺物は調査面積に比べて少なく、完形品はほとんどみられない。16世紀前後を中心とする中国・朝鮮陶器や土器類などのほか、瓦質の足鍋の出土が目立つ。土器・陶器以外では、鉄製品（刀子、鎌、刀など）や銅鏡（銭種不明）などがあるほか、鉄砲玉とみられる鉛玉が出土しており、注目される。平安時代の木棺墓からは副葬品として越州窯青磁と土器類などが出土している。

まとめ 今回の調査では中世末を中心とする屋敷（居館）の展開が明らかになり、周辺の2次、7次、13次、16次調査でみつかっていた遺構群との関係が明らかになった。当該期の遺構は大塚古墳周辺の丘陵上に、東西100m、南北300m前後の範囲を中心としている。溝や橋で区画された比較的規模の大きな屋敷が連続と営まれており、名主層の居住域を含む屋敷地と考えられる。

調査報告書は2011年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (112 今宿 625 1:8000)



2. V区の屋敷 (東から)



3. 石井戸下部 (西から)

0856 飯氏古墳群B群3次調査 (IIK-B-3)

所在地 西区飯氏

調査面積 30m²

調査原因 保存目的（確認調査）

担当者 菅波正人

調査期間 2009.2.9～3.18

処置 現状保存

位置と環境 調査地点は高祖山から北側に派生する丘陵の斜面にあたる。この場所には飯氏B14号墳を始めとする飯氏古墳群B群が分布する。この古墳群は近年の分布調査で、30基あまりの古墳が確認されている。今回の調査ではそのうちの12号墳、13号墳を中心に、埴輪や主体部の規模、構造の記録作成を行なった。調査地点の標高は約45～49mである。

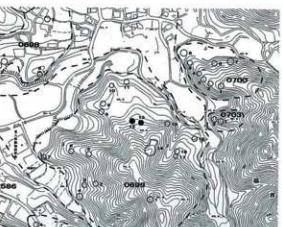
検出遺構 12号墳は埴輪規模直径約10m、主体部は竪穴系の小石室で、天井部は抜き取られている。石室長約1.8m、幅0.5mを測る。石室構造は一方の小口部の壁には高さ40cm、もう一方の小口および側壁には高さ20cmほどの腰石を巡らせる。腰石より上は板石の小口積みである。横口部は確認できなかった。

13号墳は埴輪規模直径約10m、主体部は竪穴系の小石室で、天井部は抜き取られている。石室長約1.8m、幅0.4mを測る。石室構造は一方の小口部の壁には高さ40cm、もう一方の小口および側壁には高さ20cmほどの腰石を巡らせる。腰石より上は塊石を積む。横口部は確認できなかった。いずれも石室内からは遺物は出土しなかった。13号墳の西側では石棺を1基検出した。

出土遺物 出土遺物は埴丘からは須恵器、土器類の小片が出土した。また、弥生土器や黒曜石の剥片等も出土しており、当該期の遺構の存在も予想される（コンテナ1箱）。

まとめ 今回調査した12号墳、13号墳は石室の形態などから5世紀後半から6世紀に位置づけられると考えられ、この古墳群の6世紀後半の前方後円墳である飯氏B14号墳に先立つものと言える。本古墳群の形成過程を考える上で貴重な資料と言える。

調査報告書は22年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (121 飯氏 699 1:8000)



2. 12号墳石室完壁 (西から)



3. 13号墳石室完壁 (北から)

0857 山王遺跡第6次調査 (SNN-6)

所在地 博多区山王1丁目56、57、60-2、61
調査原因 共同住宅建設
調査期間 2009.2.16～4.23

調査面積 580m²
担当者 木下博文
処置 記録保存

位置と環境 山王遺跡は御笠川と那珂川に挟まれた中位段丘上に位置する複合遺跡で、谷筋を挟んで比恵遺跡の東側に位置する。今回の調査地点は、遺跡の東部に位置し、すぐ東側に御笠川が流れる標高5～6mの場所である。

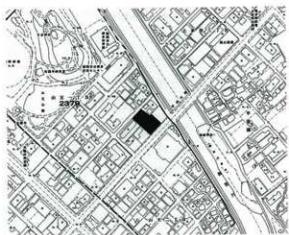
検出遺構 遺構は現地表下20～50cmの鳥栖ローム層上面で検出した。南半は削平が見られるものの、遺構の密度が濃く、残りも良好である。小壇を副葬した弥生前期の土坑・木棺墓、小型斎棺墓4基、弥生中期の井戸1基、弥生後期～終末の掘立柱建物、古墳時代後期～古代前期の大溝、古代末～中世初頭の土坑・溝・井戸3基・土坑墓2基、小ピット多数、中世以降の溝を検出した。

出土遺物 出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、中国製磁器、石器、金属器、黒曜石片などコンテナ35箱分に相当する。

まとめ 最も注目される成果として、弥生前期の墓群の検出が挙げられる。板付式の小壇を副葬する南北および東西方向の土坑・木棺墓と斎棺墓からなり、まとまっている。時代的にも大型斎棺出現の直前期に当たり、福岡平野における弥生前期から中期への移行の過程と様相をうかがう上で一級資料となる。

それ以後についても、中世に至るまでの各時期の、井戸・建物・溝といった生活関連や土坑墓といった埋葬関連などあらゆる性格の遺構が濃密に展開しており、土地利用の変遷過程が明確にうかがえる点で、貴重な資料を提供する成果を挙げることができた。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



3. 弥生前期墓群近景（北東から）

0858 有田遺跡第232次調査 (ART-232)

所在地 早良区小田部3丁目247番
調査原因 個人住宅建築
調査期間 2009.2.17～3.6

調査面積 202m²
担当者 加藤隆也
処置 記録保存

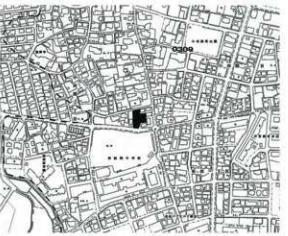
位置と環境 早良平野は、北の博多湾に向かって逆三角形に開けており、その中央部を室見川が北流している。有田遺跡群が展開している台地は、早良平野のやや北寄り、室見川右岸に位置する標高10m前後の洪積台地である。台地は西の室見川と東の金屑川との侵食で南北に長い逆三角形となり、北側はいくつかの谷があり込んでヤツデの葉のような形状をしている。今回の調査地点は、谷の北側にあたり台地の南斜面に位置している。周辺では第159次、第186次、第117次調査が行われている。

検出遺構 遺構検出手帳は、現地表下約3～40cmのローム層上面である。ローム層は部分的に赤褐色を呈しており、後世の削平が著しいことがうがえた。検出された遺構は、埋土の差異から大きく2つに分けることができる。ひとつは、柱穴にみられる黒褐色粘土と地山土が混ざった締まりのある土壤で埋まっているもの。もうひとつは、溝状遺構にみられる灰茶褐色の砂質土のものであった。周辺の既存調査の成績から、前者は古墳時代後期から古代頃、後者は近世以降に埋没したものと考えられる。

出土遺物 近世以降の遺物は少量見られるが、柱穴から遺物は出土しなかった。

まとめ 検出された遺構は柱穴、溝、土壤状のものである。特筆されるのは、調査区南東隅にて検出された直径約50cmの柱穴である。この柱穴は、西側の第159次調査で検出されている古代の建物の柱穴と同様のものであり、建物の範囲が東側にも展開することが明らかとなった。また調査区は、官道の推定ラインの延長線上に位置しているが、側溝などの痕跡は見られず、建物が存在するという今回の成果から、官道は直線的に伸びないと考えられる。

調査報告書は2009年度に刊行予定である。



3. 柱穴検出状況（北西から）

0859 井尻B遺跡第33次調査 (IGB-33)

所 在 地 南区井尻1丁目305-16

調査面積 36.51m²

調査原因 個人専用住宅建設

担当者 山崎龍雄

調査期間 2009.2.24～3.6

処 置 記録保存

1. 調査に至る経緯

2008年12月12日付けで、周知の遺跡である井尻B遺跡内に個人専用住宅建設のための埋蔵文化財事前審査願いが提出されたので、2009年2月12日に確認調査を行った。確認調査では擾乱がひどく遺構はなかったが、周辺の調査例から、遺構の存在が予想され、また計画建物の基礎が遺構を壊すので、国庫補助事業として建物建設範囲に対して調査を行うことになった。

2. 遺跡の立地と環境

本調査地は那珂川と御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する井尻B遺跡の中央部西側に位置する。井尻B遺跡は過去32次に及ぶ調査が実施されている。本調査地周辺では第7次・10次・15次地点などがある。また東側には井尻廃寺跡が推定されている。

3. 検出遺構および出土遺物 (Fig.1～6)

本調査地の標高は地表で13.2m前後を測る。遺構面は橙色を呈す鳥居ロームで、その深さは0.3～0.4mである。以前住宅地であったためか、遺構面までの堆積土は客土と搅乱土である。狭い調査範囲のため、二分割しての調査となつたが、試掘どり擾乱が多く入っており、遺構の残りは余り良くなかった。検出遺構は溝状遺構3条と柱穴・ピット7基である。

溝状遺構は3条 (SD01・05・07) 検出したが、いずれも建物基礎擾乱を受け、断続的な確認で残りは不良。当初の協議から、搅乱は完掘していない。SD01は幅0.8m前後、深さ0.2m前後を測る。埋土は淡黒褐色土が主体である。出土遺物は古墳～古代頃と思われる土器細片や、近代の陶器・磁器、レンガなど(搅乱からの混入か)がある。出土量は少ない。SD05はSD01と切り合う。確認規模は長さ1.3mで、深さは0.1mもなく、残りは不良。出土遺物は古代の土師器や須恵器の細片が6点出土。SD07は調査区北側を略東西方向に伸びる溝で、確認規模は長さ8.6m以上、幅2.5m以上を測る。比較的擾乱を受けていない西側は完掘し、搅乱を多く受け近代戸井がある東側については、搅乱が少ない部分に上面で幅14mのトレンチを設定し、溝の深さを確認した。西側は最大深さ0.3m程で、埋土はやや締まらない暗褐色～黒褐色粘質土。東側トレンチ部では北側で一段深くなる二段掘りの状態を呈す。南側上段部は深



Fig.2 西側調査区（東から）



Fig.3 東側調査区（北東から）

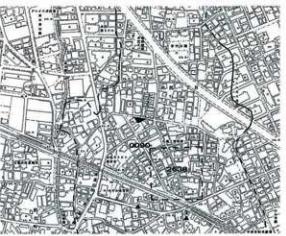


Fig.1 調査位置図 (25 井尻 90 1:8000)

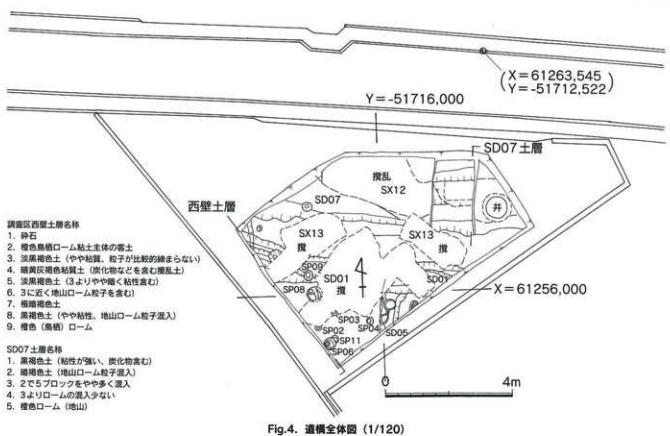


Fig.4. 遺構全体図 (1/120)

南西側調査区土層

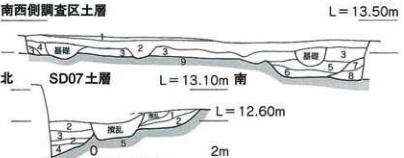


Fig.5 西壁・SP07土層図 (1/60)

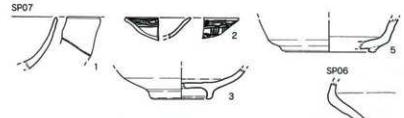


Fig.6 SD07・SP06出土遺物 (1/3)

柱痕を残すものもある。6はSP06出土の弥生土器壺細片。器表面は摩滅し調整は不明。形態から後期須恵器のものか。

4. まとめ

今回の調査では数は少ないが、弥生時代から近世にかけての遺構を検出した。溝状遺構は出土遺物から見て近世と考える。ピットは出土遺物からSP06は弥生時代と考える。ただ溝から古代の須恵器や瓦などが少量出土しており、東側に推定されている井尻廃寺の関連遺構が周辺に存在する可能性がある。

さ0.25～0.3m前後、北側下段部は上段部より更に0.4m程深くなり、最大深さは0.7mを測る。埋土は黒褐色～暗褐色土で、下段部の下層部には橙色ローム粘土ブロックが多く含む層が入る。狭い調査範囲のため、この溝が同一溝か別溝かは確認出来なかつた。出土遺物は古代の土師器・須恵器・瓦、近世陶器・瓦、現代の混入品などが、細片であるが少量出土している。1・2は染付磁器、1は碗の口縁部細片。灰斑がかった薄い透明釉がかかる。2は皿の細片。3・4は陶器。3は碗底部1/2片。復元底径4.9cmを測る。見込みは蛇の目状に埋土を掻き取りし、高台置付は露胎。4は壺口縁部片。復元口径25.8cmを測る。内外面乳白色釉が厚めにかかる。西畠山の高取焼きか。5は須恵器の高台底底部1/6片。復元底径7.4cmを測る。8世紀前半のもの。

柱穴・ピットは、埋土に暗褐色や黒褐色土で地山ローム土を混入するものもある。また、

0860 博多遺跡群第188次調査 (HKT-188)

所在地 博多区冷泉町86番、87番、88番2 調査面積 112m²
 調査原因 事務所ビル建設 担当者 屋山 洋
 調査期間 2004.2.25～4.3 処置 記録保存

位置と環境 博多湾の西端部に位置する。近世は博多人形師の工房があった。東側隣接地の118次調査区では14世紀前半の溝から多量の土師壺・皿が出土した他、弥生時代後期の堅穴式住居も出土した。188次地点の現地表の標高は5.3mを測り、建物基礎のためGL-14mまでは遺構が破壊されていた。調査面は第1面を標高3.9m、第2面を3.5m、第3面を3.0m(砂丘面)に設定した。

検出遺構 近世の井戸4基と土坑4基、古代末～中世の井戸2基に土坑5基、溝を2条検出した。また最下層で古墳時代と思われる土坑を1基確認した。

古墳時代の土坑は立ち上がりが緩やかで人為的な掘り込みではない可能性がある。第118次調査で土師壺・皿が多量に出土したSD024の東側の継ぎが本調査区内で検出できなかったのは、調査区周間に引きが3mほどできてしまったため、溝が調査区と疊る間に延びるか、溝が浅いため以前の建物基礎で削られたものと思われる。ただSD024の継ぎではないが、1面で出土したSD1024で土師壺・皿が30枚程度出土している。SD1024の方針はSD024(118次)と異なり南北方向に近い。

まとめ 明確な遺構としては古代末～近世にかけての遺構が出土しており、周囲の調査で出土しているような弥生時代や古墳時代の明確な遺構は確認できなかった。古代の井戸からは完形の陶器壺など貿易陶磁が多く出土している。近世から近代にかけて調査区周辺は博多人形の工房があったことが判明しているが、近世の井戸や土坑からは関連する遺物等は出土していない。

調査報告書は平成21年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (49 天神 121 1:8000)



2. 第2面調査区全景 (南東から)



3. SE1053井筒遺物出土状況

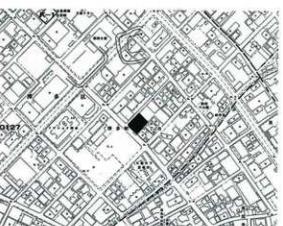
0861 比恵遺跡群第118次調査 (HIE-118)

所在地 博多区博多駅南6丁目6番2 調査面積 192m²
 調査原因 店舗建設 担当者 長家 伸
 調査期間 2009.2.25～2009.3.12 処置 記録保存

位置と環境 比恵遺跡群は福岡平野の中央を流れる那珂川と御笠川に挟まれた丘陵上に立地し、基盤の花崗岩上面には火山噴火起源のローム層が堆積している。

今回の調査地点は比恵遺跡群の南側に当たり、周辺では弥生時代～古代の豊富な遺構・遺物が確認されている。

検出遺構 遺構面は標高4m前後で平坦化された白色八女粘土層上面である。検出遺構は店舗部分(1区)では弥生時代中期後半～古墳時代後期の大溝・土坑・ピット、看板部分(2区)では古墳時代後期の井戸を確認している。1区で確認した大溝は弥生時代中期後半に位置づけられ、本調査地点より100mほど北側の第15・53次調査区でも確認されている。溝幅は2.5m、現況での深さは1～1.5mほどである。埋土は大きく上下2層に分けることができ、上層は黒褐色を主体として、多くの遺物を包含している。また、下層は八女粘土層の水性再堆積土ではなく遺物を含んでいない。同様の溝が更に250m程北側の調査区でも確認されており、丘陵を縱断する運河的な機能も考えられており、1区全貌 (東から)



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 1区全貌 (東から)



3. 大溝遺物出土状況 (南西から)

0862 谷遺跡第3次調査 (TAN-3)

所在地 西区今宿平野
調査原因 土地区画整理
調査期間 2009.3.2～2009.4.9

調査面積 218m² (総面積289m²)
担当者 森本 幹彦
処置 記録保存

位置と環境 調査地点は福岡市西部の今宿平野にあり、標高7m前後の微高地縁辺から谷部に位置する。弥生時代の環濠集落として著名な今宿五郎江遺跡の南約60mのところにあり、谷遺跡1次調査地点（平成14年度調査時は今宿五郎江遺跡9次調査第3地点）の南隣となる。現況は造成された宅地で、遺構面までGL-250cmである。

検出遺構 遺物を多量に包含する暗灰色粘土質を遺構面とした。微高地側では地山の青灰色シルト層が部分的に検出される。包含層は南北に伸びる流路状で、弥生土器が主体であるが、古墳時代の須恵器も散見されるので、その時期に形成されたものであろう。調査区南壁付近ではこれに前後する時期の乱杭が検出された。これらより古い洪水砂層からは弥生時代後期～終末期の土器とともに木製品が少なからず出土する。調査区東部では大畦畔の根固めと考られる木材の集中（木製品や建築材を含む）が検出された。この大畦畔の下層は旧自然流路であるが、その流路に対すると考えられる井堰と護岸杭列も検出され、微高地側の水路等と一連の水田灌漑施設をなすと考えられる。

出土遺物 土器（主に弥生時代末）約50箱のほか、100点を越える木製品が出土した。器種の判別できるものには、鉢、斧柄、堁取り、櫛、槽、機織り具、鼠返し、梯子などがある。大畦畔の用材には建築部材が多くみられる。その他には環状の大型石錐1点や繩文時代の蛇紋岩製石斧などが出土している。

まとめ 谷遺跡第3次調査では弥生時代末を中心とする水田関連遺構が検出された。近隣集落の生産域と思われるが、時期的には今宿五郎江遺跡周辺に衛星集落が増加する段階に当たる。谷遺跡は調査が少なく、その実態が明らかでないが、今回の調査ではその一端を窺うことができる貴重な成果をあげることができた。

調査報告書は2010年度に刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (112 今宿 627 1:8000)



2. 弥生時代後期の井堰・水路 (北から)



3. 木器 (壙取り) 出土状況 (西から)

0863 麦野A遺跡第21次調査 (MGA-21)

所在地 博多区麦野5丁目3番30.40
調査原因 共同住宅建設
調査期間 2009.3.10～03.26

調査面積 134.2m²
担当者 久住 猛雄
処置 記録保存

位置と環境 麦野A遺跡は那珂川と笠置川に挟まれた洪積台地上に立地し、本調査地点はその南半に位置している。北側近隣には7-10-17次地点などがあり、古代官道の方位に並ぶ古代の区画溝や柱穴列、門跡、建物などの官衙関連遺構群が展開する。

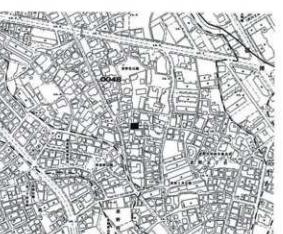
検出遺構 申請地の現状は平坦な宅地で、標高15.0m前後である。南側と東側の隣接敷地は一段低く、かつては当地がやや高く、南側が低かったという。遺構検出面は、表土直下、GL-15～50cmの鳥栖ローム上面である。調査区の東半は近代以降の搅乱が非常に多く、遺構検出面も西半よりも締じてやや低くなり、遺構がほとんどない。西半も搅乱が多いが、検出面は東半よりも締じて浅く、大部分は遺構は西半で検出した。遺構は、土坑の基、溝状遺構1条、ピット・柱穴がある。

溝状遺構は、ほぼ南北正方位である。上面幅が南から北にかけて広くなるが、これは中層以上が中世末～近世に掘り直されたためと推定する。下層の溝幅は細く、出土遺物から古代（奈良時代）に掘削された可能性がある。

土坑のうち1基は、平坦な底面に柱穴があり、類例から繩文時代の落とし穴であろう。断面鉢状の土坑1基は、中層下部に灰色粘土主体の層があるが、その性格は不明である。弥生時代の可能性がある。土坑1基は古代の方形柱穴下部の可能性がある。他の土坑は、近世の方形堅穴土坑と地下式土壙などである。その他、ピットの大半は近世前後と推定されるが、僅かに古代のものがある。

出土遺物 パンケース1箱分が出土した。弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器、中世末～近世の瓦質土器・国産陶磁器・瓦などがある。

まとめ 溝状遺構の下層が古代とすれば、近隣にある古代の官衙遺構とは異なる正方位区画による施設が周辺に存在する可能性も考えられる。また、落とし穴土坑が周囲に分布する可能性も注意される。



1. 調査地点の位置 (12 麦野 48 1:8000)



2. 調査区全景 (北から)



3. 溝状遺構完掘状況 (南から)

VI 平成 20 年度福岡市新指定文化財

平成 20 年度の福岡市新指定文化財は、平成 21 年 2 月 7 日開催の福岡市文化財保護審議会において、24 件の文化財について答申を得、平成 21 年 3 月 2 日の福岡市公報により告示された。

指定文化財の概要

指定区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者
有形文化財	建造物	曲淵水源地水道施設 附 平尾浄水場配水池 点検用通路入口建物 1 棟	1 基	福岡市早良区	福岡市
	工芸品	喚鐘（宝永 2 年〔1705〕銘）	1 口	福岡市東区	宗教法人 西福寺 代表役員 戸田 善祥
	工芸品	喚鐘（嘉永 1 年〔1848〕銘）	1 口	福岡市東区	宗教法人 円相寺 代表役員 萩江 定弘
	工芸品	喚鐘（天保 4 年〔1833〕銘）	1 口	福岡市東区	宗教法人 妙正寺 代表役員 内野 哲勝
	工芸品	喚鐘（正徳 4 年〔1714〕銘）	1 口	福岡市東区	宗教法人 觉応寺 代表役員 森山 英臣
	工芸品	喚鐘（延宝 8 年〔1680〕銘）	1 口	福岡市東区	宗教法人 恵光院 代表役員 高松 照典
	工芸品	殿鐘（元禄 15 年〔1702〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 明光寺 代表役員 山本 成一
	工芸品	殿鐘（文政 5 年〔1822〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 崇福寺 代表役員 渡辺 桂堂
	工芸品	半鐘（元禄 14 年〔1701〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 妙乗寺 代表役員 渡辺 桂堂
	工芸品	殿鐘（宝永 2 年〔1705〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 東林寺 代表役員 梅田 泰隆
	工芸品	喚鐘（寛政 9 年〔1797〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 本興寺 代表役員 囲崎 圭秀
	工芸品	喚鐘（延宝 2 年〔1674〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 一行寺 代表役員 萩江 慶昭
	工芸品	喚鐘（文政 3 年〔1820〕銘）	1 口	福岡市博多区	宗教法人 順正寺 代表役員 古海 显雄
	工芸品	殿鐘（元禄 13 年〔1700〕銘）	1 口	福岡市南区	宗教法人 興宗寺 代表役員 谷山 昭道
	工芸品	喚鐘（宝永 2 年〔1705〕銘）	1 口	福岡市南区	宗教法人 興宗寺 代表役員 谷山 昭道
	工芸品	喚鐘（寛政 12 年〔1800〕銘）	1 口	福岡市西区	宗教法人 白毫寺 代表役員 川端 洪山

指定区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者
有形文化財	工芸品	半鐘（享和 3 年〔1803〕銘）	1 口	福岡市西区	宗教法人 黒林寺 代表役員 桑野 泰山
	工芸品	喚鐘（享保 12 年〔1727〕銘）	1 口	福岡市西区	宗教法人 興徳寺 代表役員 福山 正文
	工芸品	喚鐘（弘化 5 年〔1848〕銘）	1 口	福岡市西区	宗教法人 德正寺 代表役員 武内 法昭
	工芸品	喚鐘（明和 6 年〔1769〕銘）	1 口	福岡市西区	宗教法人 茅昌寺 代表役員 江上 昌峯
	工芸品	喚鐘（文化 2 年〔1805〕銘）	1 口	福岡市西区	宗教法人 本岳寺 代表役員 松本 浩舜
文化財民俗	絵馬	野芥柳飼田神社の「福岡の変」絵馬	1 面	福岡市早良区	宗教法人 柳飼田神社 代表役員 大谷 伸則
	絵馬	唐泊大歳神社の遷船絵馬	1 面	福岡市西区	宗教法人 大歳神社 代表役員 黒 秀一
記念物	史跡	浦江 1 号墳	1 基	福岡市西区	牛尾 啓一 他 4 名

1. 有形文化財（建造物）「曲淵水源地水道施設 附 平尾浄水場配水池点検用通路入口建物」

曲淵ダムは、1916（大正 5）年に着工し 1923（大正 12）年に竣工した福岡市最初の上水用ダムである。当時約 12 万人の福岡市民に一日あたり 15,000 立方メートルの水を供給する為に、旧早良町曲淵地区に八丁川と飯場川を堰き止めて築造された。総工費は 690 万円、構造は重力式コンクリート造で外面に御影石の練石を積む。竣工当初の規模は有効貯水量 142 万トン、堰堤高さ 31.21 メートル、堤頂長さ 142.72 メートルであったが、後の拡張を経て現在の規模は総貯水量 260 万トン、堰堤高さ 45 メートル、堤頂長さ 161 メートルとなっている。曲淵ダムから導水路と三ヶ所の接合弁を通じて送られた水は、平尾浄水場を経て市中に供給された。平尾浄水場は 1923 年の給水開始から、1976（昭和 51）年の夫婦石浄水場新設まで機能した。現在の福岡市植物園内に残された煉瓦積みの建造物は、平尾浄水場の配水池点検用通路入口として使用されていたものである。これら曲淵水源地水道施設は、近代福岡市の都市の発展を考える上で重要な歴史的建造物であり、文化財の指定に相応しい。

2. 有形文化財（工芸品）「半鐘・喚鐘・殿鐘」

寺院にあって一定の時間に鳴らされる大型の鐘を梵鐘といいう。これに対して僧堂・法堂などにあって種々の行事に用いられる小型の鐘を半鐘・喚鐘・殿鐘という。

1699（元禄 12）年、福岡藩は筑前国中の金座席・鉄問屋を博多九人、甘木一人の十人に定めた。そのうち大田（太田）、柴藤、山鹿、磯野、深見の五家が近世博多の鍛物師としてよく知られている。しかし、上記五家を始めとした博多鍛物師の鍛造品の現存例は數少ない。特に寺院の半鐘・喚鐘・殿鐘類は戦時下の金属供出のためにほとんど消滅し、二十数例しか現存しない。

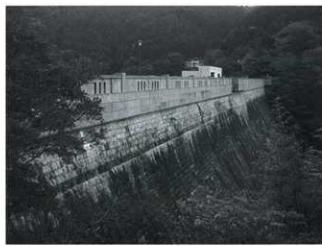
3. 有形民俗文化財（絵馬）「野芥柳飼田神社の『福岡の変』絵馬」

「福岡の変」は 1877（明治 10）年の 3 月に、同年 2 月に勃発した西南戦争に呼応して、明治新政府に不満を抱く旧福岡藩士族が武装蜂起した事件である。3 月 28 日未明の熊本鎮台福岡分営（旧福岡城内）襲撃に失敗した士族達は、早良郡次郎丸、野芥付近で政府軍と交戦し、内野から三瀬方面へと敗走した。本絵馬の法量は縦

95.0センチ、横151.4センチで、画面には野芥周辺の景観と、その中で交戦する両軍の兵士、炎上する家屋等を描く。銘文から事件の翌年1878(明治11)年に野芥柳田神社へ奉納されたことが知られる。市内には西南戦争を題材とした絵馬が10点ほど存在するが、実際に市域を舞台とした「福岡の変」を描いた絵馬は、現在の所本件が確認されるのみである。民俗資料としての価値のみならず、近代初頭の福岡に関わる重要な政治的事件を絵画的に記録した歴史資料としても、本絵馬は貴重な文化財である。

4. 有形民俗文化財（絵馬）「唐泊大歳神社の廻船絵馬」

糸島半島の北東に位置し、北に夷崎橋を繋ぎ出し南に向かって開けた地勢の唐泊は、近世、筑前の「五ヶ浦廻船」の根據地の一つとして繁榮した。18世紀に最盛期を迎えた五ヶ浦には、積載量2000石を超える船を含む、約50艘の大船が所属した。本絵馬の法量は縦70.0センチ、横97.2センチで、画面墨書きから1860（安政7）年に柳田伝吉が大歳神社へ奉納したことが知られる。画面全面に大きく航行中の廻船を描き、船尾に掲げられた旗から船名が大善丸であると判明する。市内所在の廻船絵馬としては、唐泊に隣接する宮浦三所神社に1713（正徳3）年に奉納された絵馬が存在するが、現状では画面の剥落が甚だしい。これを除けば、大歳神社所蔵の本絵馬は往年の五ヶ浦廻船の姿を現在に伝える市内唯一の貴重な事例である。



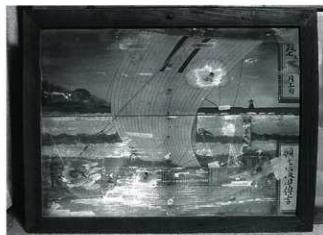
1. 曲渓水源地水道施設



2. 崇福寺の鍾鐘



3. 野芥柳田神社の「福岡の変」絵馬



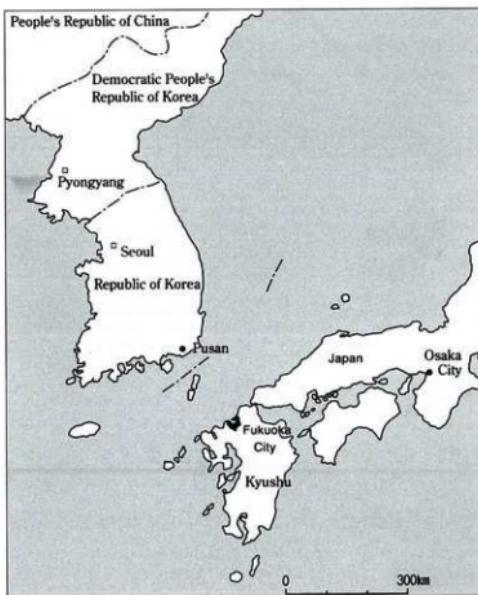
4. 唐泊大歳神社の廻船絵馬

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月	ふくおかしまいせうぶんかざいねんぽう 福岡市埋蔵文化財年報 平成20（2008）年度版 23 宮井善朗 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8-1 平成22年3月23日
ふりがな 所収遺跡名 所在地	コード 市町村 遺跡番号 北緯 東経 調査期間 調査面積 (m ²) 調査原因
かみねくわいせき 上臼佐遺跡 南区臼佐4丁目35	みなみくわさ 40134 150 33°32'15" 130°26'7" 2008.4.21 24.3 下水道
むぎのくわいせき 麦野C遺跡 博多区C遺跡 博多区東雲町4丁目17-2外	はむかにくのくわいせき 50 40132 50 33°32'53" 130°28'5" 2008.8.20~ 2008.9.3 191.4 共同住宅
はないわき 原遺跡 早良区原4丁目13-14	はなわくはな 40137 311 33°33'48" 130°20'38" 2008.8.26~ 2008.9.3 42.0 納骨堂
みなみくわいせき 南八幡遺跡 博多区相生町2丁目30	みなみくわいせき 50 40132 51 33°32'40" 130°27'33" 2008.9.1~ 2008.9.8 51.6 ビル建設
ごこちくわいせき 五十川遺跡 南区五十川12丁目308-10,11	みなみくわいせき 50 40134 88 33°33'33" 130°26'17" 2008.10.20~ 2008.10.30 43.0 個人住宅
浜の町貝塚 浜の町貝塚	はまのまちかいづか 40133 2875 33°35'29" 130°23'13" 2008.12.9 3.0 不時発見
いじりくわいせき 井尻B遺跡 南区井尻1丁目305番16	いじりくわいせき 40134 90 33°33'16" 130°26'36" 2009.2.24~ 2009.3.12 37.0 個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上臼佐遺跡	集落	中世	土坑+柱穴	土師器+瓦器+陶磁器+石臼	集落縁辺部
麦野C遺跡	集落	古代/中世	溝+柱穴	陶磁器+土師器	古代~中世の区画溝
原遺跡	集落+墓地	中世/近世	溝+近世墓	陶器+土師器+瓦質土器+黒磚石	中世の区画溝
南八幡遺跡	集落	古代	堅穴建物+柱穴	土師器+須恵器	集落縁辺部
五十川遺跡	集落+墓地	弥生/古墳/中世	貯藏穴+古墳周溝+中世溝	弥生土器+石器+土師器+須恵器+瓦+陶磁器	古墳前期周溝墓、後期円墳周溝
浜の町貝塚	貝塚	縄文	貝塚	縄文土器+貝+獸骨	現G L - 5mの貝塚
井尻B遺跡	集落	弥生/古代/近世	溝+柱穴	弥生土器+須恵器+瓦+陶磁器	井尻寺園遺跡

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 23



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
MARCH 2010
JAPAN